

十二年丁未 公二十五歲。自八年至是年。神君或在京師。或在伏見。或在駿府。或在江府。或遊獵忍邑川越邑。公皆從之。自公初仕。神君愛其勇壯篤勤。造次顛沛無不奉從。自十六七歲。仕在伏見。宿直營中七年矣。公性捷敏。夜臥時微聲入耳即覺。故神君奇之。命松平正綱。使公宿直寢室之戶外。以為不虞之備。是年冬十一月。駿城大火。時水戶黃門源賴房君。幼在櫛櫛中。火熾延及閨內。乳母抱賴房君而逃出。火急躊躇於鷹架之側悲泣。公聞其聲走行。自抱賴房君而携乳母。脫衣灌水被之。避火得脫。賴房君之夫人。多公救危之功。贈物謝之。神君聽之大悅。是年神君新築駿府城。公在駿府。

十三年戊申 公二十六歲

十四年己酉 公二十七歲

十五年庚戌 公二十八歲

十六年辛亥 公二十九歲

十七年壬子 公三十歲。紀伊亞相源賴宣君。請於神君。欲以公為家臣。水戶黃門君亦以火災救危之功為恩。欲為家臣。公以有退隱之志。故固辭之。

十八年癸丑 公三十一歲

十九年甲寅 公三十二歲

元和元年乙卯 公三十三歲。夏五月。神君與台德大君。攻秀賴於難波城克之。是役公奉從台駕到京師。遽患傷寒將死。神君憫之。命待醫道三臚菴等療之。未驗。時公之母在東關。寄書勵之曰。汝世仕幕府有戰功。是役汝無非常之功。乃不可再見汝矣。公病中使人讀之。垂淚不言。及端午日。神君既發軍。出二條城。公疾猶不辨人事。聞台駕之出。奮然而起。乘輿馳行。過東寺路。台駕自後而至。神君見輿疑之。命從士田上右京詰之。右京報之曰。石川嘉右衛門也。神君笑曰。彼病將死。何至此乎。莫使之遠避也。故公下輿於路側。待台駕之過而從行。到八幡乘馬。太渴。飲水三枚。覺心胸之快。忽忘病煩。其夕神君宿於河州星田。神君命松平正綱曰。嘉右衛門至。則可問來由。正綱待之。及夜公至。正綱引公詣神君之前。神君顧正綱而有命。曰彼有武門之冥助。故得至此。山名禪高陪於御座。神君以語公父祖之軍功。禪高奇之。翌日。台駕到難波。攻城太急。時有軍令。曰麾下近侍之士。不可先登矣。及七日。公乘曉密出麾下。欲入筑前守松平利常所領加州兵之先隊。利常者實前田氏。賜松平氏。為加能越三州之太守。其家臣本多安房守。為先隊之將。乃公之所親也。故稱官使。而過衆軍之間。衆軍皆避之。而得入岡山之先隊。與敵兵戰。交鋒小創。遂殪敵一人。我兵十餘人。群來奪其首。公捨之不顧而進。時羽柴勘右衛門。在公之傍。同獲敵首。公之馬卒後矣。來問勘右衛門。勘右衛門往見公之戎衣塗血。以為創甚。故言曰。嘉右衛門大創。不得進也。是故馬卒不至。公步過平野路。時有一騎追敵而馳。公亦到

敵城之黑門。門閉僅開小戶。敵兵見公招之。公急馳。從卒二人亦馳。公既及小戶。與敵兵交鋒。衝突倒之。敵兵曰。我是佐々十左衛門也。公入戶。遂獲其首。從卒亦破柵入門。敵兵數人防之。公振鉞而進。敵兵二人防公。公立斃二人。命從卒斬其首。從卒十三郎亦獲一人之首。餘兵皆散。先生遂出門。一騎來問曰。我爲遠藤但馬守之家臣。號池田勝兵衛。卿之勇猛拔群。不知何人乎。公即示敵首而語曰。身是石川嘉右衛門也。卿是平野追敵之人乎。曰然。我亦獲其敵首。公自刻其名於刀鞘以記之。既行數百步。會利常帥萬騎來。公橫鉞當路呼曰。官使也。利常之先軍皆避之。公到利常之馬前。示三首語曰。石川嘉右衛門也。去冬之役。在本多上野介之家。初謁公。不知記之乎。今朝小子入公之先隊。而岡山斬敵然也。平野獲首然也。利常曰。往者邂逅猶不忘之。卿今戰功絕倫。軍事既急。宜早過矣。公言之再三。曰倉卒之間。公乃莫忘焉。利常有倦色。於是乃過焉。利常從騎山崎閑齋者。下馬相語。感公之功。少馬主首級簿者至。公請其簿。自記之而謝歸。此夕本多安房守謂公曰。卿有戰功。宜謁我筑前公而爲後證乎。如何。公曰。小子今日先登。非銜利名。祖先世仕幕下有戰功。故唯欲不辱祖先耳。何謁乃公之爲乎而去。歷年之後。利常與閑齋談往事曰。難波之役。平野討敵之人。諄々告我。乃勇者也。今焉在乎。閑齋曰。有則有寄言於臣。料知曾死敵也乎。公終不言之。此役。神君麾下近侍之士。獲首級者。公及間宮權左衛門。豐島主膳二人而已。後本多美濃守語人嘆曰。間宮豐島

石川三人。共不違平生之行。而難波之役。有絕倫之功。真奇士也。神君凱旋而入京師。或蒐首虜。或賞功士。公以背軍令故。蟄居不出。賞亦不及。初公在伏見。與加賀爪民部。屢往大德寺寶寂和尚學禪。後歸駿府。參清見寺說心和尚十四年。說心授印證袈裟。故此役懸掛落於戎衣。是年出駿府。時告別說心。及去說心及衆僧送門。說心曰。戰場者居士平生所希也。宜立功名而凱旋。公謂和尚曰。此役聞麾下之士獲首級者有二人。則一人者小子也。不然不再謁和尚矣。果如其言。公初以爲。難波有功而得生。則可遂閑退之志。軍平後。叔父本多正信愁公背令無賞。而欲再使之仕官。因召公曰。我爲汝請。神君謂。臣使嘉右衛門告私事于安房守。彼以年壯勇爲。故似背令如何。公以退隱之志而不肯之。遂止。神君未還。飾於駿府。公薙髮潛居妙心寺。公在妙心寺時。一日薄暮侍士出奔。公自追之。二更而到江州栢原。乃二刻而行二十二里。其健捷如此。

二年丙辰。公三十四歲。在妙心寺。聞母有病。即到于江府。路過駿府。時左馬助加藤嘉明遊清見寺。聞公之過。遣使招之。打話終日。座客謂嘉明曰。石川君難波之軍事宜問之。嘉明曰。石川君之戰功。以背令先登。其他可知矣。何特須問焉。公到江府。侍母疾太勤。不日母疾愈。公猶在江府。親戚皆曰。卿母老家貧。不足色養。宜仕官矣。公未果之。松平正綱者公之親戚也。故正綱請執政大炊頭土井利勝。欲使公仕。台德大君。既以聞之。正綱告公。公不肯之。正綱不平而與公絕。公在江府。密勤學日夜不怠。讀文選加和訓。三十日而終之。其讀書圓席灑水以

坐之。幌巾灑水以戴之。人疑問之。曰欲警眠也。

三年丁巳 公三十五歲。在京師。與羅山林先生為舊識。田子元氏。戶花屋氏。堀杏菴氏。菅玄同氏。皆有文場之交。時惺窩藤先生隱於北肉峯下。其德望滿于四海。公以學禪。未謁之。一日林先生語公曰。惺窩先生德風太高。四方學者希其一顧。未敢遇人。故問道者。纔不過十人。曾聞卿名。而謂宜相伴來也。余心異之。卿何不往謁乎。公貴禪嘲儒。故未信之。林先生再言曰。惺窩先生者。五百年來未曾有之日本儒宗。大德君子也。卿宜謁之。於是以林先生為介。初謁惺窩先生。聞聖賢之學。有尊信之心。自悔久陷異端。卓然發憤。盡捨異學。覃思洙泗之道。研精濂洛之流。屢詣惺窩先生之門。

四年戊午 公三十六歲。本多出羽守憫公之流落。請一諸侯。招公為客。時號南浦烏鱗子。公為客不稱意而去。題壁曰。白鷗不停野水。先生題漁村夕照作一絕。末句云。欲將蓑衣曝返照。

釣竿還是魯陽戈。惺窩先生見其詩。稱美之曰。斯人後來必為詩家之宗矣。先生此詩以初學率口之吟。不入集中。

五年己未 公三十七歲。(此年惺窩沒)

六年庚申 公三十八歲

七年辛酉 公三十九歲

八年壬戌 公四十歲

九年癸亥 公四十一歲。內膳正板倉重昌。與公睦。以其貧窮為憂。故請藝陽太守淺野但馬守祿之。

初未語公。及事成而語公。且強之。不得已遊仕藝陽太守。太守以客禮厚遇之。其欲行藝陽。

謂羅山林先生及玄同子曰。此行也。豈素志宿心哉。母終天年。則身將退。不敢食言矣。遂告別。

到藝陽廣島。改名左親衛。

寬永元年甲子 公四十二歲。在藝陽。

二年乙丑 公四十三歲。在藝陽。有永原十方院者。遇公語人曰。親衛喜怒之聲。太似信長公。

三年丙寅 公四十四歲

四年丁卯 公四十五歲

五年戊辰 公四十六歲

六年己巳 公四十七歲

七年庚午 公四十八歲

八年辛未 公四十九歲

九年壬申 公五十歲

十年癸酉 公五十一歲

十一年甲戌 公五十二歲

十二年乙亥 公五十三歲 公在藝陽遭母喪 公性至孝 奉母太勤

十三年丙子 公五十四歲 欲辭藝陽 請太守 然不許之 羅山林先生在江府 聞公之居喪 以

往歲之言語 黑川壽閑 壽閑歸于藝陽 與公閑話之次 言及於茲 公曰 羅山子之言然矣 乃我

宿志也 於是屢請太守而辭祿 太守不許 公請之猶不止 一日稱有疾 託浴有馬溫湯 而移

家歸京師 在藝陽十四年 日夜勤學不怠 然人不見其讀書 或有朋友之鬪諍者 公和解之

人皆感其義志崇之 公於武事 皆無不窮其精微 能通兵家之書 識其奧義 說其妙理 其揮

鋒之術者 窮內海左門之藝 其放砲之術者 窮稻富一夢之藝 其柔之術者 窮福野氏之藝 其

御馬之術者 窮大坪之藝 乃無不盡其技之秘奧也 其餘講武之業 守勇之志 人皆以孫吳黜

舍稱之 然公不自善之 唯以聖經賢傳為平生之勤 悅之樂之 至忘寢食 是年冬十一月 朝

鮮聘使來 公與其學士中直大夫兼詩學教授權儀筆語 且談詩相酬和 儀歎曰 日東之李杜也

十四年丁丑 公五十五歲 在京師 卜居相國寺之側

十五年戊寅 公五十六歲 在京師 京尹板倉羽林重宗與公有舊 故善遇之 重宗喻之曰 卿若欲

仕幕下 我為卿請官如何 公不肯而謝曰 小子在藝陽 以養母也 故與母誓謂 百歲之後

宜遂退隱之志 今母既沒 違其誓而仕官 則妄人也 妄人在官何益矣 重宗笑而止

十六年己卯 公五十七歲 公以與羽林重宗相善 數詣其第 重宗每以交執敬之 設席而語 或

有牧伯之來會 引公於席上 語客曰 斯老能極文武之道 卿等勿疑之

十七年庚辰 公五十八歲

十八年辛巳 公五十九歲 公遍尋諸山之名勝 相攸台麓之一乘寺 以為嘉遁之地 把茅構屋 新

築詩仙堂 堂之四壁 畫漢晉唐宋之詩人三十六輩小像以揭之 或以歲時祭之 堂後有室 閑坐

讀經史 博窺諸子百家 曰獵芸巢 堂之上頭架樓 貯群書列四部 興到則凭欄對月 微醺朗

吟 曰嘯月樓 堂之左 懸瀑澗巖 如翻珠玉 曰洗蒙瀑 瀑之流而為一池 白沙繚々 紅鱗片

々 清而徹底 曰流葉澗 堂前栽花 四時芬郁 曰百花塢 過塢而有門下谷 曰小有洞 堂

外有小關 通竹徑 種梅兩三株 疎影橫斜 以為歲寒友 曰老梅關 堂後有小厨 厨前構小

軒 為老僕樵童之所居 曰躍淵軒 厨東有井 清泉流出 可炊可漱 可釀酒 可煮茶 曰

膏盲泉 春則有櫻花之滿蹊 有耕前村之雨 夏則有巖瀑之流 可洗暑塵 秋則有庭池之明月

有溪邊之霜葉 冬則四山之雪 可停剡溪之舟 可策灞橋之驢 朝望台嶠之閑雲 夕眺洛陽之晚

烟 臨流則鴨河之水不舍晝夜 登山則難波之城遠天尺五 園外之松 則風中之琴颯々 鄰曲之

祠 則社日之鼓鑿々 公或為十境 或為十二景 林羅山向陽讀耕三先生 各作其詩 其餘有

勝景 有佳境 不可枚舉 堂之西有平山林 堂之傍有獅子榻 公自作之銘 長廊繞堂 名以

蜂腰 號燕居曰適軸軒 號寢房曰白室 題書棚以剔蛎之字 後改獵芸巢曰至樂巢 公在此

間優遊自適。繞屋有竹林。細徑通幽。柴扉常鎖。來問者千扣而開。俗客則不入之。其性好潔。平生自携帚掃庭徑。總無一點之塵。世人皆崇其高潔。而圖之玩之。先是辭藝陽後家貧。然不受人之贈遺。雖親戚舊朋。或辭之。答酬之外。寄人不以一簡。無貴無賤。人皆敬之。公侯牧伯多顧問之人。公固辭。或不遇之。唯京兆尹板倉重宗。政務之暇。每來閑話。或留宿。其餘來往者。翰墨之友。纔六七十人耳。

十九年壬午 公六十歲

二十年癸未 公六十一歲。是年。後光明帝即位。大猷大君使執政伊豆守松平信綱朝賀之。信綱與公為親戚。留京之間。屢往問其山房。懇遇太厚。

正保元年甲申 公六十二歲。公戲以申日自製土猿作之銘。置之於洗蒙瀑上。

二年乙酉 公六十三歲。公以年老擇地舞樂寺村中山。築壽壙。又新構祠堂於山房之異隅。自號頑

仙祠。晚年築小室於谷中。扁曰脈望。以為寢息之所。

承應元年壬辰 公七十歲。有還鄉之意。請京尹板倉重宗曰。余一乘寺之居。世人熟識之。來問者難拒之。三州泉鄉者余故園。而備前守松平隆綱之采邑也。隆綱與余為親。余欲歸故園而靜退。如何。重宗不許。故不能還泉鄉。於是使官醫武田道安言重宗曰。我既老矣。欲歸三州。公不許之。曾絕世事。厭與人交。自今而後。不可出於京師。然則不詣公所。公勿訝焉。重宗報曰。

卿隱士也。宜任其意。公作鴨川之倭歌。遂不出於京師。先是官議按檢天下之流客。其議及公。時重宗在江府。告請幕下曰。丈山隱於比叡山之下。彼乃幕下世臣之子也。非如他流客。不可疑之。故重宗不許公之還鄉。

二年癸巳 公七十一歲。後光明帝聞公善隸書。命伊勢守高木守久。使公書八卦之文字。既成而獻之。帝大悅而賞其運筆之美。

寬文七年丁未 公八十五歲。是年執政內膳正板倉重矩監京師。重矩以公為交執敬之。有官暇則往一乘寺。閑話終日。乃問故事。

八年戊申 公八十六歲。夏五月。前太上皇遣官使於山房。勅求畫贊於公。公固辭不應詔。特筆隸書之。大字獻之。上皇大悅。又遣官使賜酒肉。

十年庚戌 公八十八歲。是年伊賀守永井尚庸為京兆尹。故與公相識。有官暇則往問起居。

十二年壬子 九十歲。春正月。諸門生賀九十算。友人多寄雅詞祝之。二月公患眼。三月臥疾。公自以為遂不起矣。門生石克常侍側。扶其匕茵。及夏五月疾病。然起居言語。不異于常。十三日水穀已絕。然氣正無違。二十日語石克曰。禮曰男子不死婦人之手。我生來無妻。故不有女子在側。我得素志。又語克曰。東照神君嘗及棄群臣。曰我及茲不忘武勇之心。今回亦不違。先大君之言。又謂克曰。昔曾子易簣。子路結纓。我臨終之心。不可愧古人。乃隱逸之志。至今不

變一毫。及夜半。呼克附舊僕曰。聖人以下不能無小疵。况如僮僕。猶多瑕類。汝宜憐恕。二十三日未刻。俄起端坐。執克之手。無言食頃。及申刻終瞑。先是臥疾百日餘。目明耳聰。纔落三兩齒。猶讀團扇之細字。雖就枕牀疲。猶有勇躍之氣象。遺言葬祭皆用儒禮。殯於詩仙堂三日。二十六日葬於舞樂寺村中山。公平日憐愛村民。故村中老幼悲嘆不止。及葬村民來會者百餘人。石克奉神主於祠堂祭之。侯伯牧守舊識之人。贈賻太多。克以公之遺意不受之。獨捐道板倉重矩。贈立碑之資。受之耳。往歲公得一巨石於山中。因語柳谷野子苞。以碑誌之事。及此子苞作碑銘。克命石工斲磨其大石。使能書者書之而彫之。克盡力勤之。碑成。立之中山山上。天野長重爲公之舊親。石谷武清爲交執。皆敬公。頃年長重嘆公之衰耄。使一僮常侍其左右。以扶几杖。故公使克傳遺言於長重武清。時長重爲官監在京師。故咨謀後事。公窮貧多年。故無遺資可爲葬。克與長重謀。獨受長重之賻。以爲之資。京兆尹永井尙庸。以新製香爐香案。賜使於克。以供公祠堂。公平日乘輿賦詩。未曾成稿。往歲依京兆尹板倉重宗之請。作覆醬集若干卷。藏于參州長圓寺。其後賦詩猶多。克選次之。作續覆醬集若干卷。鏤之梓以行于世。戊戌之歲。余遊京師。讀書于八瀨山房。與一乘寺村爲鄰里。屢詣公幽居。公有恩願。或問詩法。或談故舊。近歲石克問公記其事實。寄書於余。謀作年譜。公易篋之後。克寄事實一卷。促之。余辭曰。僕無可才之作文。且既有碑文行狀。則何贅之乎。天野長重趣余曰。我與東

溪翁爲親戚。故平生見之如父。乃其碑文行狀略盡矣。然猶有遺事。以爲遺憾。凡無傷父母之遺躰。立身行道。以揚其名。及九十歲而矍鑠者。未見如翁者也。可謂至孝矣。我欲書之。而無文而不能矣。請借卿筆如何。余又不得已。石克亦屢寄書促之。於是依其事實作年譜一卷。

延寶元年癸丑玄臘

竹洞金節識

丈山遺墨由來之筆記

予佐倉の實家にありし頃。文政戊寅の歲。御即位の賀儀ありて。大兄なる人。献物の使節に上京しける時。十八歳にて。左右に侍するもの、替りに俱せられたり。其時一乗寺村詩仙堂に至り見しに。石川丈山幽棲のまゝにて。風流雅致。年若き心にも感に堪す思ひたりき。其のち丙戌の冬。當家に養はれ。翌年より林祭酒の奉られし。御家の御舊記を編集する。昌平坂記録所へ出て勤めたりしうち。同局なりし戸田寛十郎の親族青木氏の祖遠江守は。東福門院に附属し。久しく洛にありしゆへ。恩賜の品ならひに古書畫類多く。丈山とも親しかりし由にて。鑑定を乞ひ。求め得たる兜に。添し書簡。またわたらしなの一軸ありて。幼年の頃見覺へたるか。後に此二品は牛込改代町に住める近江屋某の方へ遣して。今は彼家になしと語りしか。或時官庫中にある南畝か隨筆一話一言を閲せしに。文化の始。青木氏に至り古書畫を見し由の條に。彼書簡ならひに歌の前書まで書寫ありて。事の委しきをしりぬ。予從來好古癖にて。以前大兄かたへ親しかりし。大門通りに澤瀉屋といふ道具商人あり。ふるき知る人なれば。昌平坂より歸るさなと立寄り。あり合せし品々を見て。心を慰めぬ。また其頃切支丹組屋敷に。草加與十郎といふ與力あり。父は醫師にて。佐倉に住居せし因みにより親しくせしか。改代町

なる近江屋は。あたり近きゆへ。草加も懇意にて。世に近本といひ。當代は年若なれども。親以來書畫諸器物多くあつかふ家なれば。たのれも折々其家に至り。古器類見及ひたり。天保丙申の春。澤瀉屋を尋ねしに。此程より見せ参らすへきと心待せしとて。兜と丈山書簡と取出せしを見れば。南畝か隨筆。戸田氏の談話ありし品にまかふへくもなし。青木家を出しとき。宛名を切りぬきしと見へて。様の字のみ残れり。予たちまち魂驚けとも。價も賤しからず。其頃無足に類せし身なれば。心に任せす。好古癖をもて養父母の聽を煩さんも心苦しく。佐倉なる大兄は。さきに没し。若年の者にれとなしけなく。事の由もいひやりかたく。されとも世に又あるへきものならず。彼是思ひ煩ひて。草加氏に其旨を物語せしに。さほとまてに心望みの品ならば。價は我等より出し置参らすへし。後にゆるやかに事をはかり給は。整ふ時もあるへしと。懇にいはれしゆへ。厚く謝して。遂に秘藏となす事を得たり。さて近江屋に至り。さきに其許の家にて取出したる由聞きつる兜と書簡は。しかのいはれにて。わか手に入たりといひければ。主きとて。そはさためて宛所なかるへしといふ。其通りなり。道具の闕なれと。せん方なしといひつるに。主心當りありとて。土藏に入りしか。父の硯箱引出しのうちにありしとて。包み紙に入用の品と書付うちに。青遠州とある小札を持出。これは青木氏にて切りぬかれしを。父か乞ひ置しなれと。はや年歴も過ぎ。互に代もかはりたり。君か方にあれば。備具するなり。何かくるしかるへきやとて。予に贈りぬ。わたらしなの歌は。今いつくにやと尋ねしに。

京より下りし商人。父か手より買取持歸りしといへり。或時この兜と書簡を。祭酒蕉軒君見給ひて。慶長の頃此類を都て南蠻と唱へたり。朝鮮陣の時。銃砲を避るに便なるを知り。分捕して持歸り。或は買得て賞翫せしとなり。土井利勝の恩賜ありて彼家に藏せるを見し事あり。此品と同製なり。交趾安南等のものと思はるゝとなり。彫物のうち。楓葉の五尖なるは。いかなる事にやと問ひ参らせしに。此頃は外國と往來しきりにて。彼國人本邦に來り作りしにや。又はかこより造り越したるや。それらの事異論に及はずといはれたり。同じ歳の夏。支配勘定といふに召出され。評定所の勤を命せられ。恩祿を賜はりしゆへ。草加氏の方も事濟て心易くなりたるは。公の御惠みと悦びをなしぬ。凡介胃の利害得失。後世の議論工夫のみ世に多けれども。翁は關か原の御陣にも供奉し。大坂の役は。世に知る如く戰場を経し人の鑒定ありしものなれば。今人の説を加ふへきにあらす。珍重淺からず。其のち丈翁か雪の畫賛を得たり。探幽と親しかりしゆへ。筆法をも問ひしにや。畫もまた拙ならず。上に雪の大字。下に孤舟獨釣寒江暮とあり。また夢の大字側に蝶を墨畫せしを。いつも筆意絶妙なれば。彼両器に添へ珍藏となしぬ。當今同僚の水野氏葵齋は。茶事を嗜み。好古の人なるか如し。戊午の春談話に。過日珍らしき一軸を見たり。室町邊に住する赤松といふ古書畫商ふものより。わたらしなの歌を右筆了仲方へ持せ越したりしを。足下も知る人勝藏なるものは。鑑定を學ひに彼方へ参るなれば。暫時かり請來り見せしとな

り。予きゝて。そは一覽を遂けたし。商ひものならば。價の程もきかまほしきにといひしに。勝藏は彼商人とも知るものなれば。聞合せ得させんといはれしか。やかてとりよせたくられ。赤松はもと京地の生れゆへ。折々上方へ往來し商ふ事あり。此軸も十ヶ年京にて買取たるか。箱のうらにはり付ある小札は。彼地の吟味札なりとぞ。江戸へ持歸りて。己酉の夏。古筆了伴に外題書を乞請しに。其頃上總大戸に住る豪商にて。書畫を好むもの出府しありて。見請ると其儘買取りしか。近頃遊蕩の爲に家産を失ひ。再ひ手にもとりたるゆへ。このたびまつ當時鑑定家の一覽を経たる事となり。さて予が家の壁に掲げ。所藏の詩仙堂誌に出たる自筆の歌と照らし合せ見るに。字跡は替りたるもあれど。筆畫の意味同一趣にて。更に疑ひなきものなれば。宿癖胸臆にせまり。いかんともやるかたなく。ひとたひ手を放しなは。都下好事家に見留られやせん。左ありては悔ゆとも及ふまじと。年頃秘藏し置つる書畫數幅取出し。知己の人々に其故を告て。それ／＼引請もらひ。からふして吾手に入る事となりぬ。よりて南畝か一話一言に筆記せしを合せ見んと。彼記録所局中へ出る人にたより。抄録しこしたるを見れば。詞書ならびに字畫。頑仙子の落款印文まで全く同じ。さては其むかし兜書簡と共に青木氏にありしか。其家を出てより。京商人の手にわたり。彼地にのほり。それより赤松なるもの買請再ひ江戸に下り。一旦總州豪客の所持となりしか。時ありて其家をはなれ。予かたに來り。三種とも所藏となりし事。奇遇とやいはん。良縁とやいはん。六一居士の集古錄の序に。夫力莫如好。

好之已篤。則力雖未足。猶能致之とあり。また明の謝肇淪か。物の靈ある事を。此似有神物呵護之者といひけるも。ことわりに覺ゆ。又さきに大門通なる商人より買取し品に宛名なかりしを。改代町のもの。其父宛名のみ殘しありしをそのまゝ置きしも。何の爲ぞといふ心あてもなきに。予一軸を得たりしより。はからず備具せしも。奇のひとつなれば。ことし表装を改め全幅となしぬ。抑二十年。兜と書簡とを得しころ。わたらしな歌は。とても得難き事なれども。年頃渴望の念慮は止み難かりしに。今幸ひを得。從來の志願こゝに足りぬるなり。よりて考ふるに。此軸をひらきて。客を招かんには。丈翁と昌俊は三十年來親友の後裔なれば。佐川田喜六にまさる由緒はあるまし。幸ひ佐倉邸の予か仲兄と喜六の家は有縁にて。其因みをもて。たのれも先年佐川田家に至り。傳來の古器を見し事ありて知る人なり。昌俊以來血脈相承し名家にて。茶事をも捨てずして嗜む人なれば。事の由を告げ。また水野氏の一覽を経しより。吾手に入りし由縁あれば。とも／＼招きて。茶事を催したりしに。翌日喜六禮謝に來り。洛南新村酬恩庵裏に。先祖昌俊の隱棲せし黙々庵といふあり。火災を免れ今に現在せり。この春上京の時。其草庵庭前等の圖を二葉寫させ。持歸りたり。この庵は丈山もしばしば／＼來りし因みあれば。一枚を呈するとして贈りぬ。これも奇縁といふへきにや。よろこばしさのあまり。其始よりの來由を筆記して。兒輩に示すものなり。

安政戊午の冬

豊藤熟之草

丈山遺墨由來之筆記
六

閻齋先生年譜

平安 山田連思叔述

先生姓山崎氏。諱嘉。字敬義。閻齋其號。又號垂加。稱嘉右衛門。幼名長吉。後更清兵衛。其先播磨國安栗郡山崎村人。按家譜。曾祖淨榮。播州人。祖淨泉。稱又左衛門。仕于備之木下氏。妣多治比氏。考淨因。稱三右衛門。泉州人。襲仕。後退隱京師。以鍼醫爲業。妣佐久間氏。

元和四年戊午。冬十二月九日甲子。先生生于京師。母佐久間氏。嘗夢賽叡巖祠。有老翁折梅花一枝以與。受而置之左袖中。既而有娠生先生。

七年辛酉。四歲。先生幼穎悟。大母多治比氏常訓之曰。兒須識字。有目不識字。與無目同。故諺云。身直一錢。目直萬錢。言得可以讀書學問也。

九年癸亥。六歲。嘗從羣兒戲。有人舉菓子示之曰。汝曹各奏其能。吾將與之。羣兒或歌或舞。其人輒與之。先生獨無所奏。其人不與。先生乃大號泣。其人即與之。曰止。先生不敢受。曰非欲得之。人皆有所能。我獨亡。故不勝憤耳。

寬永元年甲子。七歲。冬十一月太父淨泉君沒。

二年乙丑。八歲。先生是時既誦四書及法華八部。時人異而稱之。

六年己巳。十二歲。以父命更稱清兵衛。先生稍長驚悍無所憚。每遊堀河橋。持長竿擺行人。墜

于橋下以爲戲。淨因君傲居下立賣堀河街。父老謂淨因君曰。此兒爲里中累數矣。宜逐之。淨因君乃託諸比叡山。將以爲僧焉。其在山也。常袖書卷。雖延客供茶之際。得少閒輒出而讀之。

七年庚午。十三歲。先生竊讀天台祕書。略曉大意。一夜在佛堂誦經。哄然而笑。師怪問。答曰。

瞿曇說謊何爾。時土佐公子某來居妙心寺。稱大通院。字湘南有識鑒。一日遊比叡山。見先生神彩秀逸。乃請而俱歸妙心寺。會野中兼山來訪寺主。一見先生大奇其才。乃勸讀儒書。先生幼時負才驕傲。不肯從人指導。以故人皆嫉之。或謂之曰。如作詩非有師承不能得。先生曰。余則師李杜蘇黃。彼用平處。余亦用平。彼用仄處。余亦用仄。如此而足矣。聞者益疾。小倉三省亦悅先生超脫不羣。惜其陷緇徒云。

九年壬申。十五歲。在妙心寺。薙髮爲僧。稱絕藏主。一日與儕輩辨論。理屈詞窮。至夜潛入其寢室。火紙帳而去。或傳。一僧學所謂入火不燒。入水不溺之語。以誇張。又嘗有一僧。常忌先生之才。聞其疾泄利。欲乘以凌辱。至則先生方倚壁跨厠馬。誦書不輟。僧知不能當而歸。寺主嘗欲逐先生。先生聞之。大號曰。果爾吾將灰寺宇。寺主懼而止。他日就寺主。借中峰廣錄。寺主云。徒務涉獵。不通其義。竟無益耳。先生曰。諾。一月而還之。寺主試舉首卷。問記幾段。先生背誦盡卷。不爽一字。且疑難處詳說其義。至次卷亦皆如此。寺主驚服。又讀五燈會元。三日而卒業云。

先生聞之。大號曰。果爾吾將灰寺宇。寺主懼而止。他日就寺主。借中峰廣錄。寺主云。徒務涉獵。不通其義。竟無益耳。先生曰。諾。一月而還之。寺主試舉首卷。問記幾段。先生背誦盡卷。不爽一字。且疑難處詳說其義。至次卷亦皆如此。寺主驚服。又讀五燈會元。三日而卒業云。

先生聞之。大號曰。果爾吾將灰寺宇。寺主懼而止。他日就寺主。借中峰廣錄。寺主云。徒務涉獵。不通其義。竟無益耳。先生曰。諾。一月而還之。寺主試舉首卷。問記幾段。先生背誦盡卷。不爽一字。且疑難處詳說其義。至次卷亦皆如此。寺主驚服。又讀五燈會元。三日而卒業云。

先生聞之。大號曰。果爾吾將灰寺宇。寺主懼而止。他日就寺主。借中峰廣錄。寺主云。徒務涉獵。不通其義。竟無益耳。先生曰。諾。一月而還之。寺主試舉首卷。問記幾段。先生背誦盡卷。不爽一字。且疑難處詳說其義。至次卷亦皆如此。寺主驚服。又讀五燈會元。三日而卒業云。

先生聞之。大號曰。果爾吾將灰寺宇。寺主懼而止。他日就寺主。借中峰廣錄。寺主云。徒務涉獵。不通其義。竟無益耳。先生曰。諾。一月而還之。寺主試舉首卷。問記幾段。先生背誦盡卷。不爽一字。且疑難處詳說其義。至次卷亦皆如此。寺主驚服。又讀五燈會元。三日而卒業云。

先生聞之。大號曰。果爾吾將灰寺宇。寺主懼而止。他日就寺主。借中峰廣錄。寺主云。徒務涉獵。不通其義。竟無益耳。先生曰。諾。一月而還之。寺主試舉首卷。問記幾段。先生背誦盡卷。不爽一字。且疑難處詳說其義。至次卷亦皆如此。寺主驚服。又讀五燈會元。三日而卒業云。

先生聞之。大號曰。果爾吾將灰寺宇。寺主懼而止。他日就寺主。借中峰廣錄。寺主云。徒務涉獵。不通其義。竟無益耳。先生曰。諾。一月而還之。寺主試舉首卷。問記幾段。先生背誦盡卷。不爽一字。且疑難處詳說其義。至次卷亦皆如此。寺主驚服。又讀五燈會元。三日而卒業云。

先生聞之。大號曰。果爾吾將灰寺宇。寺主懼而止。他日就寺主。借中峰廣錄。寺主云。徒務涉獵。不通其義。竟無益耳。先生曰。諾。一月而還之。寺主試舉首卷。問記幾段。先生背誦盡卷。不爽一字。且疑難處詳說其義。至次卷亦皆如此。寺主驚服。又讀五燈會元。三日而卒業云。

先生聞之。大號曰。果爾吾將灰寺宇。寺主懼而止。他日就寺主。借中峰廣錄。寺主云。徒務涉獵。不通其義。竟無益耳。先生曰。諾。一月而還之。寺主試舉首卷。問記幾段。先生背誦盡卷。不爽一字。且疑難處詳說其義。至次卷亦皆如此。寺主驚服。又讀五燈會元。三日而卒業云。

先生聞之。大號曰。果爾吾將灰寺宇。寺主懼而止。他日就寺主。借中峰廣錄。寺主云。徒務涉獵。不通其義。竟無益耳。先生曰。諾。一月而還之。寺主試舉首卷。問記幾段。先生背誦盡卷。不爽一字。且疑難處詳說其義。至次卷亦皆如此。寺主驚服。又讀五燈會元。三日而卒業云。

先生聞之。大號曰。果爾吾將灰寺宇。寺主懼而止。他日就寺主。借中峰廣錄。寺主云。徒務涉獵。不通其義。竟無益耳。先生曰。諾。一月而還之。寺主試舉首卷。問記幾段。先生背誦盡卷。不爽一字。且疑難處詳說其義。至次卷亦皆如此。寺主驚服。又讀五燈會元。三日而卒業云。

十三年丙子。十九歲。遊學土佐。在吸江寺。與野中兼山。小倉三省友善。先生在吸江寺。蓋擬爲編主。○本集歸全山記曰。余與良繼友善。又哭三省文曰。友人小倉三省。忽焉而亡。交通之情。同志之樂。已矣已矣。按三省長先生二十四歲。兼山長先生三歲。

十六年己卯。二十二歲。在土佐作三教一致論。當時僻境乏書籍。人或得大學或問而讀之。知有小學之書。求諸二都及長崎。不得。後得之大津。野中兼山等大喜。使先生作解。先生既起稿。比至明倫。偶得句讀本于對馬島。乃焚其稿。

十七年庚辰。二十三歲。春正月太母多治比氏沒。

十九年壬午。二十五歲。逃佛歸於儒。土佐侯不悅。於是歸于京師。先生前是讀朱子之書。既覺佛之非。然猶持戒。及聽谷時中講中庸首章於野中氏。斷然歸儒。無所顧慮。是日主人預命司厨云。今日不必別設素饌。藏主至亦必不辟魚肉。果如其言。侯聞而不悅。以其擅破僧戒。亂寺法。將逐之。兼山深嘉其志。愛其才。數請侯原其罪而留之。不聽。遂逐之。於是先生歸于京師。無所依歸。兼山憐之。爲買宅於佳屋街居之。且致粟百石。又屬生徒六七十人。以受其學。

正保三年丙戌。二十九歲。春三月更稱嘉右衛門。號關齋。字敬義。按先生歸正後稱清兵衛。至此更稱嘉右衛門也。前述多欠詳明。不啻異同。今當如此。

四年丁亥。三十歲。著關異。謂道綱常而已矣。彼既廢之。則其教之非。不辨而明矣。後世學不講。

人不知綱常之所以不可廢。世所謂儒者識見汗下。徒務記覽。苟為詞章。而不知所以明之。是以彝倫斁。而不惑于佛氏之教者鮮矣。夏四月。編周子書成。

慶安二年己丑。三十二歲。秋九月始設祠堂。製祖先神主。奉祀一遵文公家禮。冬十二月白鹿洞書院揭示集註成。

四年辛卯。三十四歲。先是編周子書。猶疑合其本意與否。至是一夕夢寐之間見周子。乃問曰。大極圖說晦菴解。無違尊意否。曰。不違。又問第一圈中有點者。得無非尊意乎。周子領之。秋如土佐。弔野中兼山母秋田氏之喪。且助其喪事。為作歸全山記。冬十一月。敬齋箴集註并附錄成。

承應元年壬辰。三十五歲。夏五月作家譜。

二年癸巳。三十六歲。冬十二月先生娶鴨脚氏女。按先生又嘗買一妾無子。世或以林山三郎敬勝為先生嗣者誤。

三年甲午。三十七歲。秋七月小倉三省卒。先生痛惜。作文遙祭。

明曆元年乙未。三十八歲。春始開講筵于京師。四方遊學之士。靡然嚮風。其講經先小學。次近思錄。次四書。次周易本義。及程傳。至明年冬十二月而畢云。其教人常執一杖擊講座。音吐如鐘。顏色尤厲。聽者凜然。莫敢仰視。其解義略舉要領。取易解耳。

二年丙申。三十九歲。秋八月孝經外傳成。冬十二月感興詩考註成。

三年丁酉。四十歲。先生嘗言。吾不踰四十。而覺有所得。實賴朱子之功也。是歲春正月先生欲

作大和鑑。及將起草。謁藤森祠。作詩曰。親王強識出羣倫。端拜廟前感慨頻。渺遠難知神代

卷。心誠求去豈無因。既而燒其稿。蓋以有_レ不滿意也。本集特存其目錄。母后聽政者不入世數。

此據唐鑑范氏之論云。二月如伊勢。始拜國祖廟。三月歸京師。是月如八幡。

萬治元年戊戌。四十一歲。春正月始遊江戶。初寓書肆村上勘兵衛家。笠間侯聞而欲召之。使勘兵

通其意。先生曰。禮不聞往教。侯有志學。須來學也。侯即日來見。執弟子禮。且約委國政。

餽五十口糧。先生為校堯曆為之序。大洲侯亦來學。先生為作省齋記。脩加藤家傳。按前此多言。先生先寓美作守

加藤泰義家。後遊事河內守井上正利。今依家譜。笠間侯即正利。大洲侯即泰義也。秋八月歸京師。道過伊勢。著遠遊紀行。

二年己亥。四十二歲。春三月遊江戶。秋八月歸京師。又過伊勢。著再遊紀行。

三年庚子。四十三歲。春正月武銘考註成。先生曰。嘗為武銘考註。當時得儀禮經傳白本。而未得通解。後來得見之。則考註為贅。三月遊江戶。秋八月

歸京師。

寬文元年辛丑。四十四歲。春三月遊江戶。道過多賀祠。秋八月歸京師。

二年壬寅。四十五歲。春二月遊江戶。夏五月歸京師。

三年癸卯。四十六歲。春二月改葬祖考妣於黑谷山。先是墳在智恩寺山。是月遊江戶。秋八月歸京師。九月同二

親及女兒如伊勢。冬十二月野中兼山卒。先生聞而慟哭。兼山才性過人。先生常稱其卓絕。謂方今

列國有爲者。土佐野中良繼。會津友松氏與二人而已。小倉三省常與兼山友遊。每病其德不及才。時規箴之。及三省既卒無爭友。寢益安肆。且恃屢立殊功。因極奢靡。先生聞之。每書疏往復。惻々忠告。初兼山託先生。購茶器於都下。先生曰。大夫之職。惟賢是急。玩物何爲。兼山不悅。遂有疎先生之意。兼山既有嫌於先生。將絕。遣一辨士極言其說。欲使先生屈服。莫敢復言也。其人叟々不已。先生瞑目而坐。不接一語。言訖。徐曰。若爾亦好。神氣自若。其人不覺氣沮神禔。後其人每舉此事。云少年爲客氣所使。今思之汗浹背。異日先生念其舊恩。折節通問。兼山不報。識者惜其知人之不終云。

四年甲辰。四十七歲。春三月同二親及女兒如八幡。是月遊江戶。夏四月辛酉聞女兒疾。五月丙寅

歸京師。中間纔四日。跋涉之勞可知矣。閏五月丁未阿玉憂。

五年乙巳。四十八歲。春二月新造居室。先生移居家譜無所見。三月遊江戶。應會津侯左中將源公諱正之之聘。往。不

仕。侯以爲賓師。餽一百口糧。先生從吉川惟足。受卜部家神道。侯壯年專攻儒教。又欲究所謂神道。未得其人。後聞有吉川惟足者精其道。居鎌倉。遣服部安休就學焉。既得大旨而歸。侯悅其說。遂招惟足於江戶。而親學焉。先生亦嘗信本邦之教。粗得其傳。至此與侯意不謀而合。於是侯每聞其講說。使先生侍坐以定可否焉。先生崇其道特甚。其意以爲本邦與支那。雖異域殊俗。而其道無二致焉。抑我神代之古也。猶彼三皇之世也。我神武之皇圖也。猶彼唐堯之放勳也。嘗言宇宙唯一理。神聖之生。雖東西異域。萬里懸隔。而其道自有妙契者存焉。是吾人所當敬信也。於是博涉神書。校正諸傳。又著風水風葉等書傳之門人。或云。垂加神道。自備成一家之學。秋九月編玉講附錄。成。先生嘗言。玉山講義發揮四子。旁通情也。此爲學者所宜用力而講焉。既因侯命編此書。謂仁智之義。性命之旨。精蘊畢在焉。冬十月。歸京師。侯賜先生。以時服二領。羽織一領。金一百兩。賜交淨因君。以衣服二領。銀五十兩。賜母佐久間氏。以衣服一領。銀三十兩。後以爲常例。

六年丙午。四十九歲。春三月。遊江戶。秋九月歸京師。

七年丁未。五十歲。春閏二月遊江戶。夏四月以疾歸京師。病間脩洪範全書。秋九月成。時先生患癰。醫勸其廢業養疾。門人亦以爲言。先生弗肯。曰若不了斯事。目不能瞑。校讎愈勩。夜以繼日。書成而疾亦愈。嘗請會津侯。令有賀滿辰輔其事云。是歲淨因君八十一。先生因有都々志メヤヤンチヒトツノカメノウラ免也。也曾知比登都廼加米廼宇羅之句。乃於北野菅廟連歌以祈壽祺。

八年戊申。五十一歲。春二月遊江戶。夏五月仁說問答成。秋八月歸京師。道過伊勢。

九年己酉。五十二歲。春三月作伊洛三子傳心錄序。會津侯之命也。先生嘗謂程門靜坐之法。楊氏羅氏李氏得之。侯於是編三子傳心錄。侯問先生曰。今世誰能讀此書。而明此義者。先生曰。福山永田養菴其人也。爾後侯每見先生。必問養菴無恙。養菴福山儒官。爲人脫洒。人稱爲會點之

流。其初見先生歸。謂人曰。開齋豪爽博覽。世無與比。求之古人。指不多僂。先生英氣高邁。罕有所推。而至養菴。則謂彼才誠不易得也。夏五月小學蒙養集大學啓發集成。當時讀小學書者。大率皆依陳選句讀。先生獨不取之。以為其說已失朱子編輯之旨。且刪本註而亂成書。無忌憚之甚。因就集成中。取正文及本註。校正以授學者。曰。此書只以朱子舊本讀之足矣。諸家註解宜勿用也。又編此二書。以資學者之講習。秋九月如伊勢。受神道之傳於大宮司精長。遂遊江戶。冬閏十月歸京師。十二月令土佐光起。描淨因君壽影。而為之贊曰。乾父坤母。一視同仁。家君壽影。於我尤親。

十年庚戌。五十三歲。夏五月校正近思錄成。先生於近思錄。不取葉氏集解。別校正一本。以復朱子之舊。六月丁姊阿鶴薨。

十一年辛亥。五十四歲。春二月丁母佐久間氏憂。

按家譜。佐久間氏。以天正辛巳十月。生于江州安比路。至此壽九十一。性嚴雖甚愛先生。而少有過差。便痛加呵噴。每戒云。鷹

饑不啄穗。士夫之子當尙志也。生男女各二。長男天。次先生。長女鶴。次玉亦先沒。秋八月。遊江戶。冬受吉田家神道。十一月號垂加。蓋取諸寶基本紀所謂神垂以祈禱為先。冥加以正直為本之語也。先生為之贊曰。神垂祈禱。冥加正直。我願守之。終身勿忒。是月作藤森碑。十二月歸京師。

十二年壬子。五十五歲。夏五月中和集說成。六月性論明備錄成。秋八月遊江戶。遂如會津。冬十一月作會津神社志序。先是會津侯臥疾于江戶。猶請先生日講近思錄。及通鑑綱目等之書。聽之。是

月先生聞父病。乃辭而歸京師。十二月會津侯薨。先生慟哭。

延寶元年癸丑。五十六歲。春正月如會津。會侯之葬。三月襄事。遂辭會津。先生自始侍侯。八年于茲矣。侯懿德夙成。威嚴明斷。禮賢下士。其為學也。從事於誠敬。而知大學之道。及得

先生。則其德益進。其治邑也。崇儉抑奢。達下情。問民苦。建社倉。行常平。興廢祀。毀淫祠。禁火化。止殍子。凡倡優異色之人。不許入境。時人稱侯本賢。然先生輔相之力。亦不可誣焉。侯之遇先生。學辭厚禮。優待極盛。班在國老上。與聞政事。許乘轎抵廳前。常賜坐重茵。先生高其義也。及此會葬。相其儀。誌其曠。撰行狀。作碑銘。嗣君亦善遇先生。先生遂辭糧。夏六月歸京師。自此退處。教授于家。門徒極衆。弟子凡六千人。是歲程子張子書抄略成。

二年甲寅。五十七歲。冬十月父淨因君沒。

按家譜。淨因君以天正丁亥夏五月。生于泉州岸和田。至此壽八十八。為人幼。其勞劬非人所堪也。淨因君處之裕如也。平居無事。從容乎庭樹之間。時携幼使其誦小學。及先生所作詩文。聞而樂之。

五年丁巳。六十歲。春正月朱易衍義成。先生於周易一用本義。而不混程傳。其所校正。上下經二卷。象傳。繫辭傳各二卷。說卦傳。文言傳。序卦傳。雜卦傳各一卷。凡十二卷。冠序例。悉復朱子之舊。更著朱易衍義。首明古易今易之別。次發明啓蒙之旨。次述易道之要領。凡三卷。先生嘗言。余少年時。嘗病渴。每日飲湯。凡二斗餘。疲勞甚不勝起坐。因縛頭柱而讀書。勤學不少廢。或曰。病中豈可如此。宜少弛勤自愛養。余曰。死生有命。若廢勤。假令長生何益。終

弗少怠。然當時自以為。如此多病。恐不能至三十。而今已六十餘。尚無恙。身自經歷如此。故世或言因學生疾。吾不信。

七年己未。六十二歲。冬十一月周書抄略成。

八年庚申。六十三歲。秋朱書抄略成。先生於周程張朱全書。取其尤切于日用者。部彙為編。各三

卷。名曰抄略。蓋有微意而所別撰云。

天和二年壬戌。六十五歲。春先生有疾。猶校訂四子抄略。

思錄。及濂洛關閩諸子之書。每有所得。輒撮錄為編。題曰文會筆錄。凡二十卷。皆折衷紫陽。

語門人曰。我學宗朱子。所以尊孔子也。

尊孔子以其與天地準也。中庸云。仲尼祖述堯舜。憲

章文武。吾於孔子朱子亦竊比焉。而宗朱子。亦非苟尊信之。吾意朱子之學。居敬窮理。即祖述

孔子而不差者。故學朱子而認。與朱子共謬也。何遺憾之有。是吾所以信朱子。亦述而不作也。

汝輩堅守此意而勿失。秋九月十六日庚申。先生終于正寢。臨終。盥嗽整服。東向再拜祠堂。晏

然而逝。同月二十日甲子。葬紫雲山新黑谷先塋之側。墓表曰山崎嘉右衛門敬義之墓。門人春原信

直。建祠于下御靈境內以配祀。後有故移祔庚申祠云。先生恒崇猿田彥。曰吾邦道學之祖。每

庚申日。致祭甚謹。因配享云。或曰。神道肇于猿田彥。成于舍人親王。發揮于垂加。殆無遺蘊

矣。庚申。即猿田彥祠。○先生為人豪邁。性極剛烈。自勉教人。惟日孜孜不少懈。其待人也甚

嚴。粗無投時好徇人情之意焉。門人有廢業惰行者。痛責之而不少假。或至絕之。其晚年學

之所至。行之所成。則非後學所敢議也。○先生學尚研精不守章句。所見超逸。居常以激勵風

節。抑黜百家為己任。博涉墳典。折衷紫陽。易則原太古之精義。範則明九峰之全數。凡自濂

洛關閩以下。揚摧表揭。分析經緯。所述以垂世。幾乎數十百卷。而其所為歸。不出灑掃應對。

忠信篤敬之間。終身持論諄諄言。漢之董。隋之王。唐之韓。非思不尊也。非語不詳也。唯其不

斯之察。所以不臻乎極。又曰。鄒魯之後。伊洛接其傳。至朱子解孔子之書。明六經之道。是

則述而不作者。吾之所願學也。又曰。聖遠樂亡。經以五名。禮之壞亂亦甚矣。幸朱先生出。易

也。詩也。明本義。考未失。書令蔡仲默傳之。禮樂欲正而未成。然黃直卿續儀禮經傳。蔡季

通著律呂新書。春秋以為未學不下筆。寓其微意於通鑑綱目。四書之解。小學之輯。發明真切。

無復遺蘊。朱子實孔子以後一人也。善學者由小學進大學而盡論孟之精微。極中庸之歸趣。則六

經可不治而明矣。又曰。朱夫子之後。知道者。薛文靖。丘瓊山。李退溪也。文靖見識之高。文

莊博文之富。朱門之後。無有出其右者。其後特李退溪而已矣。蓋退溪平生之精力。盡在朱子書

節要。可以觀其學之醇也。○先生教人。以居敬窮理為學之要。嘗謂門人曰。學之道。在致知力

行。而存養。則貫此二者也。漢唐之間。非無知者也。非無行者也。但未會聞存養之道。則其

所知之分域。所行之氣象。終非聖人之徒也。又曰。一高卑。合遠近者。聖人之道也。升高自

卑。行遠自近者。聖人之教也。或馳於高遠。或滯於卑近者。皆失之偏也。又曰。入道莫如敬。學者須先持敬。又曰。小大之教。皆所以明人倫也。小學立教。教明倫也。敬身。明倫之要也。大學格致。則因小學已知者。而窮極之也。誠正脩。則因小學已行者。而惇篤之也。齊治平。則舉此而措之耳。一以貫之者敬也。敬之道其大矣哉。又曰。敬齋箴。是存養之要也。白鹿洞揭示。則教學之法。而大學以來之規也。又曰。今世儒者。自謂學周程。而未曾用一日靜坐之力。甚者謗靜坐。以爲異端。學之不講。可歎也。又曰。學者知與行而已。知可博也。不可雜也。可精也。不可鑿也。行可一也。不可二也。可篤也。不可薄也。知行并進。而可上達焉。又曰。吾竊志于小學。讀書題而知無古今之異者。不可不行。然而行之。則未能也。非知之難。行之惟難。小子須以我爲戒。又曰。近日自稱學朱子者。誹詆誦以蔽己之寡聞。謗詞章以蓋己之無文。譏笑陸氏之禁讀書。而其所讀所行。却在陸氏下。此吾人之所宜警省也。此皆先生諄諄誘人之言也。○先生教弟子治經。專用力於正文朱註之間。而不注目於元明諸儒之末疏。嘗言自朱註定。而未疏以百數。大全蒙引爲巨擘。夫陸學者流。仇朱子者。置而勿論。若大全蒙引。其意固在發明朱註。而昏塞却甚。大全所收程朱之說。於道雖無害。而間有與經註不合者。學者當先熟讀經註。然後及乎其全書。則其已詳明經註。又別立議論。或有爲而發。或未定之說。且記錄之失。刻板之誤。皆可得而明辨之。如諸儒先於先生者。則先生既辨之。先生同遊張南軒

呂東萊。門人黃勉齋。蔡節齋。九峰。私淑之士。真西山。王魯齋數人。蓋皆醇乎君子儒也。有餘力則考其言可也。其他諸說。雖不閱無遺恨也。吾往時無師友之導。反復大全。追尋末疏。自得蒙引。尊信之不在朱註下。而於其難朱註者。則以爲蒙引後出。介夫既宗先生。吾曹何訝之。夫書之後出。勝於前出者。他人之賢者所著也。如朱註豈有可間然哉。弗思之甚也。況介夫之識。與雲峰定字相爲伯仲。而蒙引之爲書。秦延君之二萬言矣乎。又曰。釋詁訓解彌多。正文大註彌闕。實甚於洪水猛獸之災者也。又曰。朱書之來于本朝。已數百年矣。獨清軒玄惠法印。始以此爲正。而未免佛。藤太閣亦以爲。程朱新釋可爲肝心。而猶惑乎佛。遂不聞有實尊信之者也。慶長元和之際。南浦自謂信之。而亦尊佛。惺窩自謂尊之。而亦信陸。夫陸之爲學。陽儒陰釋。儒正而佛邪。懸隔天壤。既尊此又信彼。則肯菴草廬之流亞耳。豈可謂實尊信者哉。○先生於老佛之說。則有闢異之述。於陸王之學。則有大家商量集之編。其言曰。夫程朱之學。始未得其要。是以出入於佛老。及其反求而得諸六經。豈用佛老哉。其闢之也。以其有廢綱常之罪也。若有可用之實。無可闢之罪。而陰用陽闢。則何以爲程朱矣。朱子嘗譏溫公吾排佛欲扶教之言。則可以見其不欺我也。又曰。孟子不言乎。能言距楊墨者。聖人之徒也。是吾所以不敢辭也。朱先生力能與陸辨。闢之廓如也。先生沒後吳草廬趙東山之輩出。而再倡陸學。程篁墩王陽明之徒。尋而和之。然以外先生而難立。故篁墩作道一編。附註心經。陽明爲晚年定論。欲混

朱陸以易天下。陳清瀾之學郝通辨。馮貞白之求是編。皆憂之而作。然陳馮未窺先生之室。則以一酌之水。救崑岡之火。雖勞奚補。又曰。張無垢之學。陽儒而陰釋。先生雜學辨中論之。又嘗聞張氏經解板行曰。此禍甚酷。不在洪水夷狄猛獸之下。夫先生未見陸氏也。既聞其宗無垢矣。鵝湖之會。其詳不可得而攷。然誦其詩。亦可以概見焉。其後先生論辨不置。及陸之死。有死了告子之歎。苟得此集而讀之。則朱陸同異之分。不待他說而明矣。蔡介夫言。以朱子之正學精義。而不能折服象山氏兄弟於一時之語次。意亦其雄辨之不如孟子也。介夫此言吾不韙之。夫朱子之於陸氏。猶孟子之於告子。孟子之於夷之。猶朱子之於李伯諫。則是服與不服在彼耳。豈可以此方孟朱之辨哉。○先生所著。四書序考四卷。六經經名考一卷。白鹿洞書院揭示集註一卷。敬齋箴集註并附錄一卷。朱子齋居感興詩考註一卷。武銘考註一卷。文會筆錄二十卷。大和小學二卷。葬祭儀略一卷。垂加草十卷。又有垂加文集若干卷。享保中。跡部良賢等所編次。遠游紀行一卷。再游紀行一卷。本朝改元考一卷。神代卷風葉集九卷。題辭一卷。中臣祓風水草十一卷。風水鈔一卷。中臣祓傳一卷。元元集美言一卷。玄義講習一卷。其所編次。小學蒙養集三卷。大學啓發集并序例七卷。孝經外傳一卷。仁說問答一卷。性論明備錄一卷。真西山孟子要略附錄一卷。中和集說一卷。朱易衍義三卷。洪範全書六卷。周子書一卷。周程張朱書抄略各二卷。冲漠無朕說一卷。朱子訓子帖附錄一卷。社倉法一卷。拘幽操附錄一卷。關異一卷。大家商量集二卷。魯齋考二卷。刑經一卷。其所校正。四書五經。及濂洛關閩

書數十卷。并上梓行于世。其餘會津侯所纂。玉講附錄三卷。伊洛三子傳心錄三卷。二程治教錄二卷。亦多先生之力。然其初年所著。晚多不滿意者。皆不及刪訂而沒云。

論述 凡十三條

佐藤直方曰。竊謂堯舜以來。道學相傳。而至于孔孟。孔孟之後。秦漢隋唐。其學不傳。至于宋興。周程張朱接其統。而道學復明於世。朱門之盛。得其傳者。獨黃勉齋。蔡九峰。其餘無聞焉。元明之世。以儒名者。不可枚舉。而至窺聖學門牆。則方孝孺。薛文靖。才二人而已。朝鮮李退溪。東夷之產。而悅中國之道。尊孔孟。宗程朱。其學識之所造。大非元明諸儒之儔矣。我邦中古崇儒道。王公以下。學焉者亦多矣。而至道學。則未知有其說也。其後朱書之來我邦。已數百年矣。讀之者亦豈少乎。然未聞有識發明道學之正義。而為萬世不易之準則者。近世獨山崎敬義先生。讀其書。尊其人。講其學。博文之富。議論之實。識見之高。實世儒之非所及焉。蓋我邦儒學正派之首唱也。其所著之書行于世。讀者能達其義。則識先生發揮道學進為之方。以示學者。欲使之不惑其所從之意焉。輶藏錄討論筆記。

淺見安正曰。夫道一而已矣。教亦豈有二哉。但以風土氣習之有異。教之所施。不得不殊其所向也。古昔聖神宣風通志。因時立教。將以致夫道之一也。豈有和漢彼是之別耶。我邦所謂神道者亦然。然世之談神道者。往夕墮淺陋而入奇怪。是局於風土氣習。而不知反其本故也。以

陋傳陋。習染之久。其弊有不可勝言矣。山崎關齋先生之於神道。蓋有見於是矣。是以學習有年。研究精到。以繼往聖之踵。而垂來學之統。門庭既立。綱維既張。而間或有擇而不精。語而不詳。未能盡脫舊習。而一新世俗神學者流之耳目者。也。是為可憾已。然天若假之年。則豈止如是哉。後之學者其亦知諸。答跡部良賢書

三宅重固曰。敬義先生學於儒。而亦信於神。世之學者於是乎疑難不已。予昔從先生遊。而未與聞其說。固不知所謂神道之源委如何。然嘗竊謂先生之學識。豈眩於異端邪說者也哉。其意蓋以為佛之為說。言無不周徧。然其實外於倫理。所以為異端也。若神道則否。立教設法。或有小異同。擇粗語略。或時少出入。然要之不外於倫理。豈得與佛氏同為之異端哉。我邦固東方之一提士。而有遺教之可觀如斯。亦凡生此土者。所宜敬信而遵奉焉也。故與儒并學。固無害焉。先生門下并學者衆。但學神。而不求於儒。不足。雖神官者。先生必教以儒。若夫專學儒。而不求於神。未為不足。門人專學儒。而先生不必教以神者衆。先生之意。恐如此已。然則何疑之有。此予之所以不疑神道。亦不敢學也。尙齋文集

又曰。吾邦僻在乎東方。絕遠乎中國。是以雖知聖經之當讀。而能得其意者。未嘗聞其人。近世吾山崎先生之興也。以間出之才。獨步之識。實善因朱子之意。泝聖賢之旨。開其路徑。學者於是反復探索。則其彷彿豈不可庶幾哉。揭示筆記。

又曰。關齋先生有功于世。不可勝言也。今之學者。知去邪徑赴正路者。皆先生之功也。尙齋雜談錄

游佐好生曰。關齋先生為人。平生無他嗜好。一味志於學。未嘗與俗人交。雖不足溫和之氣象。志剛而制行不苟。專以明此道為己任。死而後止。庶幾乎學不厭。教不倦者歟。如其志。則不仕藩國。不屈王公。欲誘引後學。傳此學於將來而已矣。實本邦之一人。而具有功於程朱。則世未覩其比也。與室鳩巢書

室直清曰。山崎氏表章續述之書。多皆為後世抄略考證之類。朱子之書。盛行中國。中國儒者。有志理學者。所素傳習而通知。不待表章續述如此之為。惟在本朝。首倡正學。崇明朱子之書。則其功固有不可誣者。至其排大全蒙引等書。以為支離之言。不使人讀。且謂凡諸經義。折中於朱子足焉。則其意良善。鳩巢文集下同

又曰。山崎氏逃佛而歸儒。尊朱氏而黜百家。嚴師道而誘後生。其有裨於斯道。有不可誣者。亦近世豪傑之士也。然聞山崎氏自處太高。待人太嚴。少含弘之度。不容人過失。其授受之間。無能平心虛懷。從容委曲。以盡彼此之情。此其所短也。詩曰。溫溫恭人。維德之基。山崎氏豈不之思耶。至其晚節好神道。使人失望。為之嗟嘆不能已耳。

中村明遠曰。關齋學術全從宋儒。一信朱子者也。其意以為自道德性命之大。至日用事物之細。窮其義理之精微。莫出朱子之右者。而毫無所容其疑。蓋於朱子經解。及其文集語類等書。大用。

其力。而反復熟覽。以有得焉者也。故抄錄其可以為定說者。而以為數部書錄。以是為集註分疏。亦可謂有功朱子矣。雖博涉史傳百家。亦唯以宋儒為之權度。其所見若此而已。但全信宋儒。而不之疑。則自有推之高。鑿之之深。而往々與文辭上正面背馳。言出於附會者。恐未必為無也。和韓筆語

澁井孝德曰。閻齋豪傑也。志行專一。而不顧世之議論。伊藤才藏每誦父兄之業。以閻齋為一大敵。國云。余始不解其故。迨閱遺集。知有與父兄之業相依相違者。豈以是乎知言哉。要今作者。書牘愧虛詞寒暄。序記愧諛辭溢美。典故愧資緣牽強。比諸彼順流直下。自然遇回瀨急湍。不可同日而論也。嗚呼時習之鋼人。知非不能改。知善不能徙。死者若可起。雖為之執鞭。固所願也。太室文集

服部保命曰。閻齋先生吾邦道學嚆矢。所宜戶而祝固也。閻齋於朱門以下元明諸儒。所取不過薛李二人。至其論說。雖薛李時亦從違。何也。折衷乎紫陽也。閻齋之於紫陽。其如曾子之於孔子。紫陽之於程子乎。可謂善學矣。然而草創之業。有未悉備焉者。佐淺三宅三子踵興。敬義之內外。湯武之放伐。神道也。華夷也。緒正歸乎至當。亦折衷乎紫陽也。三子之於閻齋。效閻齋之於元明諸儒。非叛之也。善繼其志也。然則信疑疑。守正不回者。曾朱之意。而四子之業也。蓋閻齋時文運尙鬱。十子窮一經。研一史。沒生究年。尙猶病焉。矧閻齋豪邁卓絕。罵風

叱雨。其於經業不必屑々考覈。三子正而救之。庸得已哉。答箕浦選叔書

又曰。吾邦倡伊洛之學者。林羅山崛起倡初。而山崎闇齋。仲村惕齋。室鳩巢。相繼而興者也。蓋林氏博洽強記。倡首之功。可謂偉矣。仲氏之學。醇而能博。操守亦固。但所見未適上。室氏文辭。卓越乎諸子。見道略明。而操守或不足。如山崎氏。則立志之高。見道之明。直欲咀嚙程朱之截而後已者。要非拘々世儒之比也。顧英邁之資。行或不掩。欠功章句。故多踈略。晚又唱所謂神道者。是崎門所以為世所誦也。而仲氏之徒。委靡不振。鳩巢之門。或流詞章。學者可弗思哉。吾邦四先生論。又夏五謾成詩曰。逃佛奔馳將絕學。高明直逼考亭真。誰言白璧無微瑕。仍是東方第一人。仲子紛綸經業成。室該文藝更錚錚。欲尋河洛淵源處。好采三家子細評。併附于此。

尾藤孝肇閻齋先生肖像贊曰。洙泗微言。閻洛至論。剖析敷暢。以闡斯文。陰陽仁義。禮樂鬼神。靡所不究。以啓後人。於戲斯翁。儒林之宗。

閻齋先生年譜終

書闇齋先生年譜後

白朱學之傳於吾邦。深其道者。未有若吾闇齋先生也。而其功也。自高足弟子。未有撰其行實而成篇者。豈其造詣有不易言者乎。洎于近世。撰著家有二編述。景仰之意則可嘉。而或過於浮誕。或失於拙澁。文獻之徵。不足以傳萬一也。山田君思叔憂之。於是年譜之作。蓋其先子靜齋君。講學京師。亦私淑諸先生者。而思叔自蚤從事家學。致思於叙述。廣訪旁索。殆三十年。本之先生手筆之家譜。參之諸家所撰之傳記。繫年以總其事。此事以覈其實。傳信闕疑。其所採錄。無一無確據。而不敢以己意前却。其間又別錄其遺事可存者。為若干卷以附之。夷考撰述之書。未有如此之核實而可傳者也。思叔之勤。於是乎為足錄於先生之門焉。因書其後。

天保九年九月望

後學若州山口重昭跋

紀平洲先生年譜

門人 尾張大番騎 神埜世猷 輯

享保十三	戊申	六月二十八日生	一歲
十四	己酉		二歲
十五	庚戌		三歲
十六	辛亥		四歲
十七	壬子		五歲
十八	癸丑		六歲
十九	甲寅		七歲
二十	乙卯		八歲
元文元	丙辰		九歲
二	丁巳		十歲
三	戊午		十一歲
四	己未		十二歲

五	庚申	十三
寬保元	辛酉	十四
二	壬戌	十五
三	癸亥	十六
延享元	甲子	十七
二	乙丑	十八
三	丙寅	十九
四	丁卯	二十
寬延元	戊辰	二十一
二	己巳	二十二
三	庚午	二十三
寶曆元	辛未	二十四
二	壬申	二十五
三	癸酉	二十六
四	甲戌	二十七

遊京
遊長崎
夏至東都遂家

(周南澹淵卒)

五	乙亥	二十八
六	丙子	二十九
七	丁丑	三十
八	戊寅	三十一
九	己卯	三十二
十	庚辰	三十三
十一	辛巳	三十四
十二	壬午	三十五
十三	癸未	三十六
明和元	甲申	三十七
二	乙酉	三十八
三	丙戌	三十九
四	丁亥	四十
五	戊子	四十一
六	己丑	四十二

詩經古傳成
刻古傳
(南郭卒)
應聘請始往米澤藩

十二 庚申

享和元 辛酉

六月廿九日疾卒于東都之宅

七十三
七十四

及門遺範

語曰。先進於禮樂野人也。後進於禮樂君子也。蓋孔門諸弟子。親炙聖人。同受循誘之訓。成德達材。彬彬君子。宜如無先後之異焉。然自質趨文。古今常勢。以聖人視之。亦不能無小變。三十年為一世。則其有先後今猶古。何獨聖門為然也。安嘗遊藤先生之門。固謏劣寡陋。何敢自比先進。然自幼從遊。歲月尤蚤。幸得聞見先生誨人之始終。今也不見先生亦已久矣。而安亦老憊。竊恐先生教養之遺軌。後輩或未之詳。廼錄及門之日所親炙聞見者。以備他日一考。若夫先生家庭之訓。則斌卿固既紹述有餘。不待安論列焉。

一先生教人。專在忠孝。蓋先生至性純孝。而慷慨好義。其幼善事親。弱冠居喪。疾痛悲哀。持心制三年。著書論古今執喪得失。門人受讀。往々做之。盡三年之哀。推其孝以及人者如此。忠義亦出於天性。成童讀保建大記。憤發興起。從此好讀書倍他日。十八歲著正名論。言君臣大義。其教子弟以忠孝者。本於此也。

一先生尤重君臣之義。恒語人曰。天祖垂統。天孫繼承。奉三器以照臨宇內。皇統綿々。與天壤無窮。實如天祖所命。是神州之所以冠四海萬國。天祖天孫。固與天一矣。世世相襲。號天

津日高。騰極謂之。日嗣。神天合一。與殷周配天尚不免於與天為二者不同矣。先生論國體。其大旨如此。蓋奉義公之遺意云。而近時稱皇國學者。荒唐不經之談。則亦所不取也。

3 世俗業儒者。久承五山僧徒之陋習。令幼童先誦文選。先生則先授孝經。次之以四書五經。四書五經之目。出於後人所論。先生授幼童讀之者。姑從時俗所習熟。不欲希為異也。時時於習讀中。取其易喻者一二件。輕輕開說。比句讀稍熟。略

曉文義。乃使之讀史記左傳國語漢書等。遇其有可興起心志者。媿々講解。使人不知倦。時吟誦前賢詩文。以感發其志氣。或談論古今嘉言懿行禮樂制度政教刑兵措置之得失。君臣父子之名

分恩義。四海萬國之形勢變革。華夷內外之辨。一一指示。因其憤悱而啓發之。其講經。務明大義。合德行事業為一。使人自入聖賢區畫彙簡中。識見日開不自知焉。先生誨人之次序。大要如此。然成德達材。皆因其人資質。不必規規於一律也。

4 先生教人。後虛文而先實行。然文墨之業。亦非所廢。要在使人盡其所長。如其實行。務在長善。而不拘拘於責惡。是以人亦勸於為善。而耻於為惡。蓋磨礪名節之效為然也。平居好稱入則雖庸人懦夫。亦莫不揚揚然激昂憤發。其善誘人如此。

5 先生誨人。以恭遜為先。安之幼。每戒忿爭。讀書遇古人孝弟忠信之事。縷々說話。有如提耳。常誦諸葛武侯戒子之語。言尚在耳。或與親朋談論國事。不令小子輩聞之。安輩亦專讀書質疑。不敢為闕黨童子。故雖時聞天下之事。而不知一國吏事臧否。蓋先生誨人。欲其器之晚成。而不欲其速成。又屢誦義公之言曰。童子當為童子。而切誠謙讓時政。亦此意也。然少年銳氣之人。多悅於激勵之言。不思戒救之意。狂簡斐然。而忘所以裁之。亦非先生之意也。

6 先生不喜臧否人物。安之受業。授資治通鑑。而不及綱目歷史綱鑑等書。謂綱目書法謹嚴。然其所附載。書法發明等。多譏議古人。令少年讀之。其弊議論太過。責人苛酷。恐失忠厚之意。甚至好稱人惡。綱鑑等亦然。又謂山崎氏之書。其興起節義之氣甚佳。然所論過密。使人心狹隘。疾不仁已甚。非所以長養德器也。

7 先生每誦陶淵明語曰。好讀書不求甚解。每有意會。便欣然忘食。讀書求甚解。其能實解之者。蓋鮮矣。但其有意會。而至欣然忘食。雖不甚解。而實能解之者也。又曰。咀嚼二字。讀書之要訣。讀書不能咀嚼玩味。忽々看過。雖日誦千百卷。大抵不免為耳食之徒。又曰。古人謂眼光透紙背。是真能讀書者。若徒嘗古人糟粕。不能開活眼以看破肯綮處。誦習陳言跡迹。所見不過紙面文字。不可謂之能讀書者。安謂能有咀嚼。而後眼光可透紙背。如此則意會忘食。亦在其中也。

8 一看經書者。使之先就經文熟讀玩味。或一篇中前後相照應喚呼者。或於他書中其意義可彼此互相發者。一一指示。又使之自思而得之。融會貫通。有感發興起。然後稍就傳注質疑義。蓋所以

使之時有意會。而亦未必要其甚解也。近世耳學之人。或未熟讀經文。先看傳注。傳注先入為主。經文爲客。其弊至徒信後儒說不信經文。經文反爲後儒之注脚。亦聖經之一厄也。

一先生談說孝經。以愛敬二字爲第一義。發仁孝一本之義。微之曾孟之言。鑿鑿有確據。而講論諸經。必以論語爲首。每誦大寶令分經教授。孝經論語。令學者兼習之。將著梅巷筆叢。粗有端緒。未就而即世。誠爲可憾矣。然學者能熟讀二書。反復玩味。果有意會。庶幾不倍先生之意也。

一先生恒言。學者學爲君子。非學爲儒者。故論語以君子二字始終之。又言道者成人之道。非儒者之私業。故夫子成德達材。有德行。有言語。有政事。有文學。各因其人所長。成就之。儒則古以道藝教人。周官云儒以道得民是也。故夫子誨子夏以爲君子儒。以其長於文學也。周末道不行。門弟子各以其所學教授後輩。而人稱之爲儒者之道。是非聖人之本意。後學者當以成人自期。不必要爲儒者。學而爲君子。是則孔門之學也。安謂義公論士臣曰。士不可以不學道知人倫之義。匹夫之勇。非所貴。學道知義。雖寡人亦儒也。此以儒自處。似不與先生之意同。蓋公則勸士大夫學。所謂儒者亦唯指學道者爲言。而其意在明人倫。則亦學爲君子。而非爲村夫子之謂。其言雖異。其意則同也。

一先生謂古者文武一塗。未嘗分以爲二。無論海內外。其致相同。故男子生。則以桑弧蓬矢射天地四方。天地四方。男子所有事也。孔子曰。有文事者。必有武備。而其折齊人驕慢之氣。折衝於

樽俎之間。陳恒弑君。則請討之。明大義於天下。與後世下帷揮麈徒文不武者不同。况神州自太初崇尚勇武。而當今食武家之祿。豈可徒事文墨。以失武士之本業哉。是以使門人兼習武技。不微於白面書生好爲軟弱之態。

一又謂習武者。所以臨陳盡己職分。本非私鬪之用。而亦非演場街技之具。當去花法專務實用。當時承秦平之餘習。演技者多株守昔人成法。拘泥陳跡。不能出其區域。先生嘗與杉山子方等。學伊勢所傳吉田射法。又招傳戶崎氏刀法者。使教授少年。自是如小野之刀。種田之槍。荻野之銃。往々傳播。而師家傳舊法者。亦務講求實用。自出機軸。至有稱雄於四方者。先生實爲之嚆矢。則非獨於文學多所發明。其於武技亦不可謂無益於國家也。

一先生幼以神童稱。立原先生最愛其才。自少年所交。一時豪傑。如高山仲繩蒲生君臧。慷慨憂天下。每以肝膽相許。如木村子虛忠憤報國。僧實源高邁好義。皆情好親善。其經生學士文人墨客。如杉山高橋青山以下諸子。則固亡論。而如增子之寬厚。池原之俊爽。川瀨之勇決。雖非讀書之士。而亦當世人傑。相信最深。川瀨恒稱先生有無學門人如子者。亦爲一奇。此雖戲言。亦可觀其取友用舍好惡無所偏倚。其他俊彥以及武人俗吏農夫賈豎。苟有志氣有材藝者。德憑勸勵。雖寸長片善。採之勗之。各隨其才所長而導之。開懷說話。傾倒底蘊。其人莫不恍然心醉。其教育子弟。隨其材所長性所好。指示開導。每謂世儒教人多把持一箇格法。欲使其面目氣臭盡作一樣

態度。不許毫出其區畫範圍。如冶金出模。整整然一樣形狀。非聖人成德達材之道。皆坐於偏信後儒之說。而不知至悔聖人之言也。

一先生於文學。網羅古今。會萃衆說。斷之以聖經。謂漢儒博士之學。先訓詁。疎實用。甚者流識緯之言。大害聖人之道。宋儒一洗陋習。說躬行心術。其見卓矣。然自信太過。蔑視前賢。以爲繼二千年絕學。至後學之弊。則或知有濂洛。而不知有洙泗。明人言敢於非周公孔子。不敢於非宋人。亦有非誣者。而自設藩籬立門戶。見異於己者。則排擯以爲異學。不能汎愛容衆。陳同甫以英邁之才。倡大義。其王霸之辨。不爲無一得。然豪氣過甚。其言亦有不醇者。王伯安一代人豪。其謂就物窮理爲支離。亦如有一理。然自恃聰明。浸淫禪機。則失聖人之旨。明清考證之學。解經精密。然或務碎細遺大義。不無一失。熊澤氏才識絕倫。然偏信王學。則未爲得。山崎氏磨礪節義。有益風教。然狹隘多僻說。伊藤氏以論語爲宇宙第一書。說擴充之義。可謂卓見。然見道過平易。亦流於一偏。荻生氏雄才卓識。壓倒古今。然英雄欺人。說經多牽強。以道爲先王所造作。不知君臣之名華夷之分。新井氏聰明絕倫。爲經綸之才。然至君臣名分。則大失其義。此皆有長有短。舍短取長。以聖經爲根據。庶幾其不倍矣。安謂義公嘗曰。先賢各有所見。廣蒐博採。用之不偏則善。執偏見拘泥一隅。儒中之異端矣。先生蓋奉公遺意也。一古文尙書。孝經孔傳。孔子家語。後人僞作。東神州西漢土諸儒辨之。既有明說。先生蚤歲亦

辨明之。有舜典二十八字考。又辨安國孝經序僞造之跡。鑿々有確據。時太田公幹倡孝證學。論說經義。大有所發明。其辨古文繆妄。極爲詳悉。先生每推稱其博大。使門人謄寫其所著書。或使之游其門而受業。是以門下之士。講論經書。有得於公幹者亦多。先生取善於人。不挾彼此。如此。公幹亦與先生相懽甚厚。嘗有送序曰。天下之英雄公與我而已。蓋公幹所長。雖在明經。而先生之志。則在事業。故以英雄目之也。

一先生原於春秋尊王攘夷之義。尤謹於名分。君臣上下之際。華夷內外之辨。論之極詳明。行文措辭。其涉名分者。雖片言隻字。未嘗容易下筆。而最致思於神聖經綸之業。講究典章制度。立論精確。蒲生君臧亦務講究典故。所發明往々出人意料。謂人曰。我周流天下。未嘗見英才卓識如子定者。而先生亦數嗟稱君臧特見前後罕儔。每其來遊。使門人就而質問焉。曰得奇士而從遊。可以長才氣。而門人得益者。亦爲不尠矣。

一先生好誦古人歌詞。以勸勵後生。而從遊之士。善歌詞者往々有之。常謂詩言性情。漢唐之詩。猶周詩三百。人情風俗。瞭然可觀。可以感發興起人之志意。皇朝之歌。亦猶漢唐之詩。自古事記書紀所載而及萬葉集以下歷朝撰集。可使入感發興起者爲不尠。然至末俗之弊。則貴綺麗務纖巧。而中菁之言。淫猥不可道者。比比有之。乃欲使門人鈔錄其切於人倫裨於風教者。題曰葦原集。取之。大祖葦原之什也。未果而終。從游善歌詞者。亦相踵凋謝。良爲可憾也。

一先生嘗以儀禮經傳通解授安讀之。曰。朱考亭講究實學。其所以施於事業之志。於是書可見其本色焉。野中兼山嘗命鏤之梓。可謂得紫陽之真面目矣。安謂聖人之道。修己治人。在合外內。考亭之論性理。所以修己。編此書所以治人。故見其戊申封事等書。亦可觀施於事業之志。世稱朱學者。多言修己而遺治人。其倍聖人之道固亡論。而於考亭之意。亦偏舉一端。而失全旨。使考亭聞之。其謂之何。

一先生好讀周官。謂聖人經緯天地。綱紀國家。悉備於此書。其發明之說。大抵前賢所未發。而其說寄軍令於內政。與管仲治齊同意。司馬之軍制。即司徒之六鄉。治之之法。多與今制合。西士諸儒。在郡縣之世。而說封建之制。多紙上之談。不可盡信。今世目見封建之勢。論周室封建之世。愈覺其的切事情。不獨軍制為然。安聽此言。恍然如有發蒙。始知此書之切於實用。信先生之厚賜也。

一先生謂易之起。本由象數而養生焉。漢儒說象數。尚為近古。唯其說多牽強附會。王氏專說義。一洗陋習。然離象數言義。失其本。且所說出於老莊之見。至程傳始本聖人之意。為得其正。及朱義出。而經文復古。而其義亦益明。然皆不論象數則未為得其義之所本。學者兼象義而推求之。然後始為不失學易之本末矣。

一先生謂聖人之道。仁孝為本。明人倫。濟天下。德行與事業一。光明正大。不為隱微高妙之言。

唯於易發精微之旨。然天地生生之道。陰陽仁義。一其本。天人合一。其旨皆實。與佛家空寂之見。相冰炭。後儒或見佛之高妙。而心竊羨之。欲與之相抗。亦別設一種高妙之說。以自立門戶。故其說雖排佛。而往往與此相出入。不免被其氣臭薰染。與周易精微之旨有間。是求其說高於聖人。由其自信篤於信聖人。亦豪傑之一失也。

一先生專力正學。不好曲藝小技。而視記聞俗學。亦與他雜藝等。素不喜晉人清談之流。尤惡老莊之學。謂老氏陽唱恬澹無為。陰自恃聰明。貴智術。不欲蹈古人轍迹。非譏聖人。別立一箇之見。其流為申韓。司馬子長以申韓與老莊同傳。可謂卓識。故先生說老子之書。與王弼等復別。戲謂人曰。我欲造老子像。擊其頭為節。以說其書。亦一快矣。而其所解說。皆前人所未發也。

一先生素憂戎狄窺邊。寬政甲寅。俄羅斯來東蝦。乞通市。先生察其情偽。推求古今戎狄之形勢。瞭然如指掌。且辨破其虛誕誇張之妄說。如云云千年史書具存。又云中世有大洪水。人物蕩然。明如觀火。而謂脫使西夷得志。字內晦暗。天地為長夜矣。安聞之茫然自失。如無所措身焉。其激勵後輩如此。而屢誦陳同甫上書高宗。言舉一世安君父之大讐。不知何物是性命。故後輩亦知性命之不可附空言。當時不見于戈二百年。文恬武熙。無復言兵事者。先生謂滿清乾隆之西師。去今二十三年。一水之外。用大兵革如彼。雖海內無虞云乎。而治安焉可恃。迺欲著西土詰戎記。以警發世之安於無事者。屬稿粗成。遭多故不果。見今清有寧波廣東之變。而西夷張大。逞觀觀

益甚。世亦多以兵事爲言。果如先生所憂矣。

一先生講究經史。學無不該。而於聖人經綸事業尤致力。內之則自天神創業。列聖繼述。以至皇綱解紐。武人爲政。外之則自堯舜周孔立政明教。漢唐宋明治亂興衰。以至身毒西洋形勢沿革。異教罔民吞併肆毒之跡。上下數千歲。推究原委。甄別臧否。禮樂制度。經國治民之規模。人情風俗之變態。論之如指掌。而稽古徵今。自幕府法令。及我東藩政治教禁。徵之文書。求之口碑。雖斷簡破牘。俚言瑣語。莫不採錄蒐羅。其鈔錄記載。積至汗牛充棟。門人請著述成編。先生曰。吾學既不得試諸事業。托之文字。亦不可以已。我將待年至知命。然後有所著作焉。其言未及遂。以五十三而終。實文政九年丙戌冬十二月朔也。距今二十餘年。門人亦離合聚散。凋謝不尠。追懷往事。泣然書之。

庚戌冬日

門人會澤安述

及門遺範終

常陸正志齋會澤先生著述目錄

思問編

孝經考

一卷

中庸釋義

一卷

刪詩義

一卷

典謨述義并附錄

五卷

讀論日札

四卷

讀書日札

三卷

讀易日札

未成

讀周官

三卷

正志齋雜錄

一卷

閑聖編

新論

二卷

迪彝篇

一卷

艸優和言 一卷

學制略說 一卷

退食間話 一卷

洙泗教學解 一卷

及門遺範 一卷

下學邇言 七卷

責難解 一卷

泰否炳鑒 四卷

江湖負暄 三卷

讀直昆靈 讀葛花讀級戶風讀萬我能比禮

閑聖漫錄初編 一卷

息邪編

豈好辯 一卷

千島異聞 一卷

兩眼考 二卷

三眼餘考 一卷

息邪漫錄初編 二卷

三編之餘

正志齋文稿

正志齋詩艸

會澤先生所著書目如右。而其如三眼餘考等諸書。有深藏篋裏不示人者。其餘可公布者。他日將就請上梓。今豫揭其目以諭四方君子。

玉巖堂主人 謹識

文久元年辛酉新鐫

玉巖堂

江戶橫山町三丁目
和泉屋金右衛門

我昔詩集目錄

僧大潮	一	高陽谷	二
僧若拙	三	永富獨嘯菴	四
原尙菴	五	僧知雲	五
中邨頤亭	六	岡千里	七
岩城子明	七	僧紫石	七
僧謙道	八	河野伯潛	八
吉益東洞	九	僧廣陵	一〇
僧玄澗	一〇	高山敬貞	一一
白石真人	一二	清田君錦	一三
葛子琴	一三	安井靜宇	一三
池邊匡卿	一四	僧曇懋	一四
僧拙菴	一六	齋靜齋	一六
武宮謙叔	一七	池大雅	一七

芥川彥章

一八

合田求吾

釋蘭陵

一九

青木和卿

鳥宇內

二一

吉邨遍宜

小倉亞相公

二三

通計三十三人

我昔詩集

龜井道載撰

我昔三十四首并叙

我昔者。述我昔日所周流遊處之感也。余不佞自結髮從事四方。友道頗廣。所交通大抵皆當世名流。雖其最汗下者。莫弗蔚然露頭角也。今也則身就羈紲。屏營劇職。尚不得敢越境。視諸畔渙數千萬里。得其人周旋者。宛隔一大鴻溝矣。間燕杯酌際。時一念之。其人歷々集乎心目。情或樂之。忽焉又失之。不能無感慨。於是逐名錄之。得若干人。其三十有三人者。今已即世。是爲一等。其五十有五人者。交定之後。情異疏戚。亦皆所謂眼中人。是爲二等。其二十有二人。雖未嘗相見。或翰墨通名。或平素嚮慕。心議其風采者。亦以爲一等。凡三等。亦一百一十人矣。欲皆詠言之以慰我永懷。先得第一等。謂以觀其人者。因粗誌其履歷。係之名下。庶以實語意也。首章有我昔字。取以爲名云。

甘露潮公

名元皓。字月枝。號大潮。西肥松浦人。住持蓮池龍津寺。後退居甘露山寺。余年十四。始從遊門下。是時護園能文士。皆已下世。獨有服南郭。與公振藻東西。聲望頡頏。海內翕然。若

公懿蹟。口碑著作備存。不贅于此。寂年九十三。

我昔南遊侍皓公。公年八十未成童。驚駘寧比大宛種。控御偏憑造父工。瑞世毫光明白日。彌天偈誦穆清風。羨牆卅歲徒存思。弱植依然吳下蒙。

日域文章創業中。群才崛起並稱雄。一從東海亡護老。獨峙西溟抗服翁。妙思天倪渾自範。微辭風水不須工。九原可作惟三子。使我躊躇泣眇躬。

高陽谷

名彝。字君秉。俗稱渡邊忠藏。長崎人。余年未冠。與僧大同。俱造君秉。時未強仕。詩學適上。眼已空一世。先是託海舶來市者。贈詩于清禮部尚書沈德潛。及其門下七子某々。德潛及七子。嘉尚其詩。共會一堂各次其韻。亦使海舶齋來報之。君秉以為秘書晁監。黃備公。雖名高古今。然皆以天子使鳴盛彼中。不足奇焉。豈如其身在此。獨以鴻詞驚動諸夏者哉。自夸示人。名亦由是大顯。於是高張門戶。以延生徒。生徒日益進。余二人草途間詩。試問推敲。君秉一再諷誦。走筆塗抹。因語曰。公等可教也。潮師老悖。不知詩有法則。大誤公等才子。余欲印板所業。使海內學詩者知所從。請序潮師。序成。所稱說不滿余意。再請之。序又成。不滿意如舊。嗚呼宇宙之大。獨有老杜一人。先我著鞭。我且自序其詩。係學少陵未得其妙等數語足矣。其豪誕率如是。余心惡無庾公之斯之禮於潮公。然亦驚其業奇拔罕儔。受

其正斧有年。年未五十。患毒瘡而卒。著有蓬壺樓集。其徒守之未刊行。聞之屬續之前十餘

日。病惱發狂。而語言發于夢寐恍惚中者。率皆韻語成牀。自傍錄之。積成小冊子。名曰病榻

草。其最後所作曰。鐵壁城崩不作聲。孤身方壓萬精兵。天鷄一喔東方白。側耳分明助凱鳴。(下

三字一本聞凱名)

崎陽最爾一彈丸。之子心胸大地寬。詩律慕唐惟杜甫。文壇竊漢有曹瞞。陶鎔群象多々辨。蟻視前

修面々寒。寄語胡清沈禮部。應令人壽晚成難。

僧若拙

名宗朗。號香山。或稱岡水居士。本州岡縣人。住持藝州香林房。博學強記。欲成一家說。以

振起愚禿氏之道。作香山長語。大經刪註。論駁發張。其徒以其言乖祖意。恐惑衆聽。相衆

誹斥。以聞龍谷。幾乎至罪。有救者而免。歲戊戌。其寺火。所著述皆燬。其翌年暴病而寂。

識者或惜其無壽云。初若拙幼而穎敏。讀書五行並下。亦有記性。學詩亦石梁蛻岩。故詞尙新

奇。頗厭李王摸擬。是時州人不喜文章之業。見若拙年少豪邁。偃蹇傲物。皆側目相指罵。以

爲狂。獨先人知其非常人。迎取爲忘年交。親率徒弟就業。講詩屬文。傾產給其衣食。庶幾

由以成其化蜀志也。既而橫嶽大嶺。妙行岱峰奇愛才伎。爭延爲上客。都下稍々革觀。知其非

真狂。時余方隴。弟暉尙在襁褓。若拙每顧語人曰。龜翁所志不小。恐不與年相及。至其成

之。則在二兒乎。貧道受翁之知愛極篤。圖所以報之。亦在二兒成立之日焉。所不使二兒成翁之志者。有如噉日。嗚乎余兄弟者。質薄才疎。所業荒涼不成。父志云乎哉。然鄉閭承乏。竊微名一時者。若拙卯翼之力許多。轉結蓋云之。卒年五十二。

曾從赤石摘芙蓉。裁作編章潤色濃。為是詩禪無所著。能令儒俠漫相容。數竿清蔭倚竹。百丈微音謬々松。誰識雄藩泮宮水。由來此子舌端洵。

永富朝陽

名鳳。號獨嘯菴。長門赤關人。著有囊語。漫遊雜記。吐方考。甲乙方。皆行于世。年三十五。客死浪華。先人為作墓誌。略曰。幼而無童心。年十三四。歷觀三都諸州。求所遊仕。不得其人。刺滅于懷。歸則會縣周南唱學宗國。乃往事之。受經講史。未逮竟其義而去。學醫於山東洋。受奧邨翁吐方。名藉甚。既卑而舍之。修玄學學禪。旁治兵家之言。亦皆不遂而止。其夙有大志也。其意蓋以為凡所藏于身。苟可以濟時務足矣。若夫以一道一藝自顯。我不為也。然家無恒產而窶。故遊處四方。教育英才。皆以講經方為名。因亦自業焉。性聰明沈毅。有人倫之鑒。喜博接人物。務察事情。其所行僮莫測。每出于人意表。而平素多病。形孱弱如婦人云云。有男名友。時年九歲。遺命託魯不佞。今以儒業遊事五島侯。華名數馬。嘗聞僮不羈言。始見斯人。駭我魂。鬼谷揣摩行國遍。高陽飲博有徒繁。著書論世知無壽。辭聘

逃名夙自覺。六尺遺孤風采在。如今遊事列侯門。

原公瑤

名瑜。號尚菴。京師人。以善醫仕土井侯。時侯邑于唐津。公瑤應聘之後。師事潮公。專力文業。亡幾命為師儒。改號三右衛門。蓋夙志也。其詩清婉纖麗。雖未全免河一作京洛風習。亦一時巨匠。又善屬文。多所論述。潮公嘗語吾輩曰。詩有高彝。原瑜。加僧法蘭。為門下三俊。土井侯移封古河。公瑤從行。亡幾卒。

刀圭應聘漢津城。亡幾儒紳報素情。詩品恰看春月柳。風條難住禁林鶯。龍門三俊非虛譽。玉渚千年配盛名。猶記盞簪松浦夕。論文把酒到天明。

(玉島一名玉渚。即神功后所釣鱖之處。唐津古名勝。稱玉島為第一。)

僧知雲

名宏辨。西肥多久人。住持桐栳密寺。為人溫雅。持律嚴密。好修苦業。學詩潮公。亦有升堂之稱。著有桐栳遺稿。余兄弟嘗往過山寺。時雨雪埋路。弟年十二。弱不勝衣。知雲欲留驩多日。俟晴乃行。供給極篤。弟思歸不已。信宿辭去。知雲命僮負弟。送到大路。其愛人之篤。至性為然。嘗聞去後見思之語。師蓋其人。老後入律。學于叡山。而寂。年七十。(一本七下有左右豈所謂斃而後已者邪十一字)

桐林奇遊彼一時。提携小弟拜龐眉。香烟夜靜優曇室。密雪朝封栢樹枝。歸興非關三宿戒。歡留故和二難詩。即今惟有巒峰月。深照愁人雙鬢絲。

(優曇室房名。巒峰言二子山。多久名山。)

中邨頤亭

不記名字。天草人。或曰天錫叔父也。以詩鳴于鄉。後推高陽谷爲盟主。率其徒天錫輩。來學崎陽。詩專以杜爲鵠。欲其語自然。時陽谷名傾海表。從遊甚盛。土豪邨山某有別墅。曰南礪莊。陽谷一日以詩會友于此。長門永富朝陽。藝州平賀房文。讚岐合田求吾。東肥片山冬藏。備僧癡絕。及鄉書生劉龍藏。松君紀輩咸集。頤亭謹素。以白髮老生踞上頭。然亦兄事陽谷。不敢與抗禮。受其戒約惟謹。是日牀限五古。諸子皆奮揚。爭先人得佳句。頤亭忽夕沈吟。調練得乃出之。陽谷一唱稱善。一座皆傾。余時弱冠。雖頗倔彊。不得不爲之心醉。偶作我昔。亦感南礪之遊不可復見乎今日。遂以起焉。頤亭嘗携天錫遊筑。訪余江廬。題鳳而去。終爲永訣。余畢世遺憾之一。

南礪文盟寶曆年。斯翁鶴髮踞初筵。酒中先就李陵牀。杖底惟携杜甫編。社有同聲還獨步。詩無片語不天然。江湖一面終難繼。何處名山去學仙。

(陽谷結詩友曰同聲社。)

岡千里

名白駒。俗呼太仲。播磨人。以儒學穀蓮池侯。而教授京師。好註子集。旁通象胥之學。有二子。伯爲河野子龍。叔爲井澤君光。皆以文學稱。

當年交臂洛城隅。黃髮蒼顏志氣孤。仕國愧同文吏案。受塵甘作小人儒。三鱸二註開蒙學。明律清謨課象胥。曠逸樂天天不負。果然老蚌吐雙珠。

(千里著左傳鱮。史記鱮。世說鱮。蒙求箋注。毛詩補義。)

岩城子明

名白。俗呼清五郎。後改泰藏。能登七尾人。服商賈。而志于道。喜談經義。嘗市崎陽。說余于廣衆中。遂相得而歡。有弟曰真。使學于京師。及與余歡。千里召弟。從余于筑。居三年。學未成而還。子明有遊說志。勸家事弟真。抱經史出遊金澤。中病而卒。弟真旣祥之數日。泣狀其行。不遠數千里而來筑。謁余以墓銘事曰。遺命也。余感子明有友于之恩。而真不墜其業。爲作墓銘。子明卒年四十有四。

賣藥會遊瓊浦城。岩郎先識伯休名。探花畫舫浮春渚。聽伎青樓醉月明。共約百年同出處。誰料一別畢平生。箕裘有弟成遺命。無奈韓碑語未平。

僧紫石

名淨价。西肥人。嗣潮公董席龍津寺。先公化。為人滑稽好諧謔。善書。大潮之姪化霖孫。清渭濁涇同一源。品食每嘲公府供。拂衣時入市廛喧。任他呼作風顛漢。何處住為禪定門。伎倆兼藏懷素筆。興來狂墨鳳鸞翻。

僧謙道

名某。嗣法紫石。蓮池大夫松枝氏之弟。松枝氏名某。博聞多識。為政有冷望。有二弟一妹。皆好讀書。賢行著稱。謙道為人簡貴寡欲。接物不設府城。惟善是比。行脚十年。得道而歸。受師父命。強起住山。性多病。夙知壽不長。詠吟自適。不甚苦學。風槩清疎有溫藉。寂年四十四。

君家兄弟總才賢。殊勝石家稱漢年。中有宦游遭羽客。遂捐華胄奉金仙。傳燈黃蘗東漸後。卓錫扶桑西極邊。我昔南詢煩一喝。于今火宅得安便。

河野伯潛

名子龍。俗稱忠右衛門。岡白駒之子。有故冒今姓。幼時以善屬文。名動京師。有向歆異見之稱。以交任仕蓮池侯。為人強直遲重。頗自矜伐。愧文儒無補于世之陋。為大坂邸吏。掌錢穀計。而不廢儒雅。余弱冠。傾蓋洛下。後十五年遊大坂。募詩友會其邸舍。翠年病卒。年蓋三十五。

文章弱冠觀周年。但爾同庚同病憐。二妙傾都連袂夕。八叉驚座舞觴前。鳳鳴阿閣梧桐動。龍躍延津風雨懸。嘆息中原今負約。空將鞭弭酌黃泉。

吉益東洞

名為則。字公言。藝州人。晚年為醫住京師。時京師承良山創業之餘。異說紛糾。莫所統一。既而修菴。東洋輩相尋即木。東洞乘間奮起。營造一家言。鐫書若干。以示軌轍。大張門戶。延海內士。且其人豪邁多智略。驅使時名高瀧彌八。齋第五輩。以為聲援。於是名譽隆々。驚動四方。一時翕然嚮往。不遑及顧其說之生熟也。余初以父命委贊門下。居五六日。知其說偏僻出乎不學。一再詰問。東洞以年少未歷事。不肯商量。余心惡之。自悔來。遂辭去。後十餘年。因事東上。通謁門下。開燕接見。時年七十。鬢髮雪白。眼光耿耿射人。但聲勢稍減。門下重生四五輩。承左右。非復昔日病者填門。門庭熱鬧薰人者。余雖不悅其說。固已奇其為人。從容絮話。以及醫事。東洞顏色無墨。揚眉顧眄。故大言曰。余去歲病偏枯。人皆以為中風。惶急失措。余命兒輩作梅肉散。頻々服之。數日復平。余為天下後世。盡心力。焦唇舌。建言疾醫之道。人疑而未信。懼而避之。咄嗟。天下無不瘳之疾。奈天下無盡其疾之人何。天下無不盡之命。奈天下無安其命之人何。恬然無怪。一本愧色。噫東洞其英雄士也乎。以余視之。其膽略剛明。不在晁錯周亞父之下矣。蓋本朝無銓衡選舉之制。使人才幽憤空老。者豈獨

東洞哉。東洞之敏。豈不知其說不可致遠。但天與其才。而學後其時。無由自顯。則自謂苟成其志。自欺欺人不恤也。遂以施行云。假令此輩得時而起。自致青雲上乎。其功業豈可測哉。聞之東洞四十餘年。始就黃岐業。若然者。其所講誦。屢々二十餘年。夷考其學所至。所謂伏臘郎沒字碑耳。然其言一旦布海內。轟如天鼓。非人傑孰能與于斯。東肥邨大年。有識士也。與余論東洞。曰。其人是第二流。至其說千載無雙。余至今尙疑其言。

僧廣陵

東洞先生老學醫。經方祖述漢張機。星霜七十窮愈固。弟子三千信且疑。萬病有源惟一毒。私言雖好奈公譏。英雄心事猶堪惜。目睫依然鸞鳳姿。

僧玄澥

名胖。本藩橫岳之徒。壯歲東請掛錫紫野。會河內僧慈雲新揭法燈。參徒雲集。廣陵一再扣問。深服其明識。遂從受戒。余嘗入洛。寄寓其房。晨夕禪誦。起居安養。居八十日。未嘗見懈弛色。父訃適至。閉目稱名。徐起拈香一炷。還坐復話。神色不異平常。余於是知其涵養有素。年三十六。寂紫野。

形顏尪弱六銖裳。志氣金剛百鍊腸。發跡海西玄覽遠。尋師河內夙心償。蒲團坐斷浮生夢。雲水住爲禪悅鄉。寓在紫山聞父訃。斂容徐拈一瓣香。

名同。字大同。本藩人。少從若拙學文辭。進步乎詩。後專修愚禿氏之道。從事濟度。門徒歸仰。名高一時。歲甲辰。奉龍谷法主之命。侍講法孫。辭不得命。千里赴之。至則會法孫卒。因又承命說法東都道場。玄澥資質孱薄。善病。且時屬暑伏。以爲往必損壽。雖然命重。榮亦出望外。不可以死爲說。遂如東都。演法若干日。慧燭焜耀傾都。病亦不發。得命歸鄉。令望倍昔。性溫雅。喜言詩。至死不廢賦詠。雖然寶筏餘業。大抵遊戲三昧。不必要佳句。著有數種。寂年五十六。

高山敬貞

俗呼利兵衛。本藩東鄙賈人。自少喜作和歌。于謁冷泉公。受教門下。藩距京畿二千里。虛往實歸。槩無虛歲。如是二十餘年。略通奧義。至其句秀絕者。不甚愧古人矣。爲人真率辨捷。好善行。悅義節。肚裏毫無惡趣。興至諷詠泉湧。手不遺釋管。亦不甚慮其拙。曰。和歌者情耳。情動于物。而形于言。言出而成章。是已。故能言情者。不欲澁滯害辭。情緒縷出。從出從練。夫而後舍拙取工可也。孔子刪定周詩。豈盡工而刪乎。今作和歌。字權句衡者。謂

之文言則可。可謂言情乎。不則西行山家集。可傳誦者。十有三四而已。敬真家本富厚。及學和歌。遠遊破產。至屢空。然家人輯睦。無反目色。又好誦南華。深味逍遙自然之腴。晏然終世。

紫陽高士姓高山。披詠深偷天地閑。蠟屐心徐一本閑。流水送。茅齋夢淨白雲還。家倫自樂樵漁跡。風什爭傳郡邑間。借問翰林新勅撰。題名或廁赤人班。

白石真人

名榮。字子春。俗稱彥二郎。仕平戶侯。為文學。初遊東都。師事江忠園。受老子古義。善詩且文。開口輒作跨鸞駕龍之語。有古狂者之目。亦以自處。因稱曰白石真人。自與余納交。恩情厚乎骨肉。其父遊林六十。請序於余曰。我壽吾父。子之一言足矣。他人有千言萬語。我特不請也。已而遊林卒。又命余碑銘。父卒之數日。為事故如東都。病死浪華。葬其寺町寒山寺。姪山縣景雄為建石。余又銘之。著有桃花洞遺稿。刊行于世。余為之玄晏真人。長余一歲。為人廉潔不苟合。學識深博。事父母孝。與人恭而有信。或毀其居交喪。絕酒肉百日。病泄瀉以死。是毀而滅性。非孝也。余對曰。毀不滅性。子與余皆能之。至毀滅性。惟真人能之。未知孰孝孰非孝也。毀者大愧。

飛鸞島上宅仙靈。白石真人綽約形。神王星槎探月窟。道凝桃洞註金經。姑緣玩世朝公府。竟以修

文寵帝廷。下界舊遊君憶否。一師一友共南冥。

(月窟言生月島。是真人常所遊處。平戶一名飛鸞島。)

清田君錦

名絢。號文興。為越前侯文學。著有孔雀樓筆記。孔雀樓文集。皆刊行。晚年醞釀資治通鑑作評注。未知其卒業乎否。

渭洛雲霞孔雀樓。匡牀榻管睨千秋。幻奇縱作袁鍾隸。庸腐不為王李儔。二秩齊章新鳳藻。卅年撫仕一狐裘。論評未盡平生意。通鑑青華老更稠。

葛子琴

名張。號蠹蒼。浪華人。善詩。高陽谷嘗為余品隲海內作家曰。浪華有葛張。合離。陽谷抱負極高。而稱許如是。二子之能可知也。晚遊京攝間。行軸一變。務為艱深纖巧之語。大傷躰格。雖二子不能無染汙之患。亦醉明季初清。厭陳喜新者之毒耳。可奈之何。

百尺書樓枕水涯。題詩日夕弄烟花。荻洲風落落帆檣。柳岸潮腥腥鳥鳥譁。擬代天工能賦物。還教鬼趣別成家。人琴安在山陽夕。隣笛一聲江月斜。

安井靜宇

名維允。號草江散人。本藩人。中年有疾。足不良。是以務讀書。該博衆流。特好文章業。所

作琤々玉振。一時府下無出其右者。雖世家師儒自標置者。亦咸推讓兄事。不敢不甘受其月旦。子民則以明經能文。擢爲國學訓導。

北筑文章草昧中。泮宮雙起府西東。終成國是知誰手。先獲吾心有此翁。半世沈痾稱祿隱。盈函遺藻見天工。音徽嗣響安提學。長使書生仰下風。

池邊匡卿

名某。俗呼平太郎。東肥人。爲府學訓導。秋玉山門人。詩秀雅不墜先師遺範。至其佳句能爲李王優孟。死年可六十。

火國詩家旗鼓分。秋門赤幟獨推君。開天渾雅終難復。王李高華或可群。廣座掀髯哦白雪。虛軒擊缶眺青雲。童心六十無他伎。轉見清朝試舉文。

僧曇懋

名宗昴。南豐玖珠人。生而岐嶷。其父欲其成才器光耀家庭。託僧法蘭肄詩書。無幾記誦益進。最善草書。法蘭素修濟南家之言。因字曰攀龍。蓋官始也。父本農夫。心悅其有子。常一作嘗提携來入本藩。欲售其伎以取一時之快。橫岳藩名利也。踵門請觀殿堂園池。曇懋年十二。髮兩髦。姿儀不凡。雖僧輩相將出觀。父曰。僕等南豐鄙人。偶來得禮大刹佛陀。何幸如之。彼小兒少知運筆。請獻拙伎。以供清覽。兒幸甚。僧輩以爲鄙人井蛙之陋。固不足觀。但費數張

馬糞紙以忙了半晷亦可也。爲出筆硯。白狀院主和尚。和尚亦隙視之。纖手指撥大筆如椽。一再揮洒。龍蛇蜿々欲飛。在坐相看吐舌。院主雅善書。一覽知其腕無鬼。且見尾題攀龍。亦知其非獨無鬼。因延上座。詳問兒所經歷。父以實對。時院主覓繼席。未得其人。請余弟爲徒。約長而才則爲後。而弟甚幼。恐其不相及。忽見攀龍以爲天授也。因請其父舍兒爲僧。許爲繼席。父已心悅。奇貨可居。故未肯許。曰。生彼者僕也。然有育彼者。不請不可。蓋要也。既歸與法蘭謀。遂遣息慈橫岳。改今名。學亦益進。有文思。歆羨余先執鞭潮公。裹糧來學。與余接筆硯。賦詩屬文。晨夕精勉。惟求一步前行余。而以余一日之長。伎進于文。潮公未敢遽改品第。曇懋益自奮不已。會余肄華音因而中止。曇懋以爲闕才不及也。不曰才不如勤乎。因專力華音。孜孜矻矻。動至忘寢食。蓋以爲一寢處乎余。而後安眠未晚也。居少選得乾音。而余竟罷退。曇懋於是喜動于色。而勤勉復如舊。年二十餘。以家學東遊洛。事僧惠訓。有省而歸。亡幾又出。辭別余曰。我業乃在善財昔日之跡耳。成志此行也。否亦此行也。將無幾相見。話舊竟夕。蕭然有千里不留行之色。余壯之。作序送之。會本師和尚奉勅住龍寶。遂如東都。曇懋從行。道中得病。終不起。年二十六。

憶爾黃山雜染年。兩髦揮灑筆如椽。龍駒七日眞超母。佛種三遷竟入禪。衣鉢遊方無內外。文章擗吻有媿妍。遺言在篋皆金石。擲地應須震九泉。

僧拙菴

名大龍。南筑人。歲甲午。此遊本藩。說法瑞雲教寺。余素聞其名。往謁。時年六十。英氣勃々。視人如蟻。譬諸國狗之瘦。無所弗咬。余幾缺望。而亦奇其膽氣。一日邀會于野大夫望海樓。分韻賦詩。樓臨北海。景勝絕美。時五月天晴。陽候霽威。馮夷負氣。四美殆備。拙菴大悅。作七言絕句二首。而大言傲物如平常。竟坐無一美譚稱人意。詩惟絕句得妙。又能書。酒酣。余出一紈扇。請題得意舊作。走筆直寫曰。碧玉林中乘曉歸。清風偏襲女羅衣。宿雲捲盡翠如滴。點破青天白鷺飛。

月海東頭望海樓。萍蓬憶昔此同遊。虛檐貪看潮來去。彩翰爭揮雲沒浮。罵坐禰生還白首。驚人杜老又緇流。從聲響歸天籟。風浪猶驕五月秋。

(拙菴詩有貪看潮去又潮來之句。第三語云之。)

齋靜齋

名大禮。字必簡。俗呼第五右衛門。紀州人。晚年入洛。下帷教授。以其嘗從南郭服子。生徒頗多。然以其喜言經濟。學殖矜持。深自尊大。識者或病之。著有靜齋文集。音例。刪成傷寒論。皆廣布于世。

東漢名臣第五倫。知君母乃慕風神。千金卻謝親藩聘。一劍來為帝里人。鼓篋課童崇揖讓。絃歌化俗

起頑羸。至今徒弟疑夫子。憶昔西河河上民。

武宮謙叔

名某。柳川侯醫官。柳川詩人。除中山夫人村山嘉仲外。獨有斯翁。往年與夫人讀余所作南山小草。作詩贈示。余嘉其老而益壯。唱醉數次。以為他日班荆之地。亡幾卒。

柳川城北海潮馳。柳川城南有所思。即有所思人安在。海潮千載秋更悲。白雲難酌中山酒。明月空歌異日詩。百里生芻違一哭。非關宿艸已離々。

池大雅

名無名。字貸成。余嘗到其廬。大雅適讀名山記。顧語余曰。盤古洪荒之時。有一巨靈。手掬沙石。頽置此彼。大者為喬嶽。小者為培塿。以為吾輩行樂地。可謂大賚矣。贊歎不已。余以為真隱者也。歷五六日再訪之。會其行遊富士。不得再見。近讀僧蕉中所作碑陰文。益知其非常人。文略曰。貸成為人蕭散。不以寵辱驚心。善與物而不苟合。與人交。謙損而不阿。簡於禮法。而不衍乎義。其於取與得失。恬淡如也。能文及書畫。圖山水尤妙。好遊名岳。躡蹻健。超高峻。極幽奧。發諸毫端躍如。屢登富士。又必異路。隨所見圖之。圖一百乃止。狀態皆異。是古今畫工所未及也。妻玉瀾有異操。亦能畫。無子家絕云云。蕉中輦下文人也。大雅死而無子。諸嘗與大雅相知者。匍匐喪事。遂又立石。乞文刻之。所謂死而不朽

也。墓表面篆曰。故東山畫隱大雅池君墓。吁哉知大雅者。爲大雅所知者也。死生亦大矣哉。花柳東岡一酒卮。餘酣笑傲澹鬚眉。愚人方朔情何巧。避地梁鴻見已遲。但使青山流水在。長將草聖畫禪隨。洛微君子斯焉取。船阜儼然大雅碑。

芥川彥章

名煥。號養軒。京師人。余弱冠往謁。年已可六十。性好酒。口喃夕談詩。可人也。有男清藏。與余同年。韓聘之役。唱和浪華。以俊秀著聞。洛陽詩業一時雄。餘響方承享保隆。冠玉縱令趨綺靡。棘猴猶未墮織工。白頭寒壓終南雪。絳帳春含上苑風。家學況成堂構美。聲華相發二劉中。

合田求吾

名某。讚岐人。學醫松原才次郎。說伊藤家之學。言行慥々。折旋蟻垤。自稱曰儒中醫。嘗慕說紅毛治術的實徵物。千里跋涉。就蠻譯師某。講習其書。余從獨嘯氏遊長崎。納交求吾。因與聽其講。求吾著紅毛醫言公于世。余未之見。有弟曰大介。志業亦相仲伯。今見住子和田濱。

瓊城離索一千里。生死倉皇二十年。曾約龍騰驚海內。自傷鷹隼老江邊。紅毛重譯韋編絕。白簡新鐫木鐸傳。猶有典型存介弟。家聲風動讚陽天。

(紅毛書籍。以及革裝外面。假稱韋編。)

僧蘭陵

名越宗。不知何許人。人間之。曰不知也。嗣法大寧無隱。以高足稱。爲人灑々落落。其行在清濁間。與人交語。大抵皆虛誕恍惚。如捉風畫水然。而機辨景響。解人頤。自然有所誘進。毫不爲物害。少壯行脚。參諸宗師。後竟歸無隱。住持本藩東鄙圓清寺。初號蘭陵。又改草廬。或稱草菴。又或自稱曰夜雨禪師。著有草菴稿。樵歌。永朝陽嘗參禪蘭陵。嘉樵歌有味於道。註以冷語。鑄而公之。又有琴譜十二章。惟余藏之。最後應隱岐侯之請。住其官寺。亡幾示寂。臨終作和歌曰。百末亭裳。生天久禮婦登思比志仁。毛婦波死奴留加左天毛殘念。○琴譜曰。鶯農初音仁。梅加枝農色保登計。郭公農初音仁。卯花白幾月影。○潮酌者盤浦遠得。樵須留人盤山遠得。萬日出度太平農御代。○佛登盤誰結比之。白絲賤加遠多萬幾線返之見與。○千秋樂登歌毛。萬歲樂登歌毛。君遠祝言農葉。君農德會阿梨加多之。○峨眉山月登歌之盤。唐土農李仙人。三笠山登詠之盤。我古農中麻呂。思惠波今裳袖志保留。○我登云毛佛農名。人登云毛佛農名。假農名仁迷登毛。誠農心盤壽天之。○富士農山農雪農面影具羅邊見天。我波津加之幾田子農颯人。○夜農雨農淋之幾盤。吾毛人毛加盤羅之。淋毛數々。誠農淋幾遠樂萬無。○篠農葉掛之盤誰家。誰家登思仁會。昔戀之幾竹林。○危盤岐會農棧。畏幾盤函根山。我心仁配禮波。山毛

橋毛及波之。○烏帽子著天毛猶拙幾盤我心。墨染仁屋都勢波屋都須狼。○花盤芳墊。紅葉盤龍田。人盤誰。薇折人戀之以。

舞鶴山邱誰氏墟。蕭然夜雨道人廬。江湖有跡雲相似。涇渭無心水自如。琴譜今應傳樂府。樵謠舊已比金書。最驚臨沒仍饒舌。遊戲佯狂不負初。

青木和卿

名節。俗稱源藏。仕德山侯。年二十一。病死東都郎。邑友人傷其齋志未遂。葬其鬢爪先塋側。請余銘其墓碣。略曰。和卿性謹厚好學。學專主物子。好修古文辭。法象于鱗。弱冠負笈東都。從遊瀧鶴臺。歸則圖西。歷觀我九都。錄余不佞于筑。說數士厚于肥。見其政治最于天下。慨焉於內。取法而還。居未幾。擢爲執法。周故事。執法老吏任之。以賢舉也。歲丁酉。祇役于東都郎。將行。顧同學兄弟曰。此役也所不揭頹綱補闕典。對揚我侯之明者。有如兄弟。在郎數月而卒云云。和卿歿之八年。德山府建學宮。鼓舞國子。綱記大張。蓋亦遺化云。

青年憶爾氣軒々。一劍劖緜略九藩。論樂不慚吳季子。定交誰許鄭公孫。還鄉特命除風憲。祇役還方殉國恩。倘使英靈歸造化。或爲鳴鳳降天關。

(德山學館名曰鳴鳳)

烏宇內

名宗成。浪華人。寶曆癸未八月既望。浪華作者大會于木弘恭葭葭堂。余亦與焉。時以齒德尊長。執牛耳者。片孝秩。宇內其人也。一瞬二十餘年。竟爲烏有。而其不朽者。獨有詩稿而存。噫。風雲鬱勃浪華城。邂逅相逢夜宴清。撲地兼葭懸月色。滿堂琴瑟入秋聲。一時方美王家酪。千里敢誇吳客羹。傷往白頭吟望立。江流嗚咽注東瀛。

吉邨遍宜

號臨古。初名某。以材官挽強。仕薩摩侯。爲人驍勇。有蓋世之氣。好擊劍射騎。馳騫山野。以俠著聞。每憾其生不當源平割據之時。排々憤々。擊地罵天。薩摩法。許武弁運於醫。遍宜以爲不爲良將。則爲良醫。苟能仁人。何必問術高卑。無已醫乎。即萬一緩急。昧首披練。提矛出鬪。亡害爲武人也。請官淨髮。革名扁祇。言其兼扁鵲祇婆之長也。已而鄉人毀其誇詡。故改字面如今。先是十年。余南遊薩摩。舍逆旅主人。遍宜來謁。容貌傀偉。眼如飢鷹見肉。歷階上座。輒謂曰。人言肥有椿壽。筑有道載。足下何以得此名。請問傷寒論大意。奚若說得以爲合仲景志乎。時余厭世醫拘古私議強聒。因對而曰。子亦好言醫乎。我獨好爲醫耳。醫尙不得而言之。况敢言仲景哉。且傷寒論備忘小冊。不足以應萬病。故不甚珍之。往日過柳川府。府醫官某乞言于余。余爲之語曰。醫者意也。意生於學。方無古今。要期乎治。是余

生平爲醫之大意。未知某果合仲景志乎否也。遍宜口欲有言。而未發。憮然久之。對曰。好々太好。足下遠來。當留數日。余必日見。論決醫事。真奇遇也。乃去。余留滯二旬餘。遍宜來見謀事。概無虛日。情款特厚。事見南遊紀行。初遍宜遊京師。從吉益東洞受古醫方。既疑其說有與術矛盾者。數就質問。東洞未明辨之。或詖辭折之。或冷笑緘默。不肯置對。居七十餘日。遍宜惑益甚。屬侍問燕。從容問曰。先生爲天下後世。創造一家言。以教育多少英才。固當無所欺誣。而今所說非所爲。所爲非所說。苟如是。致遠恐泥。醫雖小道。係人性命。談豈容易。不則弟子所問。一夕辨證。使弟子心悅而誠服焉。如使弟子悅服乎。則亦與天下後世悅服也。因枚舉平生疑案數條以質之。鑿々窮詰。不遺餘力。東洞知其終不可免解。不敢論報。因亦笑曰。余說固有所本由。惟子不合。可奈何。遍宜怫然怒曰。足下知非而遂之。所謂英雄欺人耳。人固可欺。我不欲長受其欺。請從是辭。竟絕去。其剛果如是。若夫任俠已諾。傾命赴人窮。出其天性。鄉人嘖々稱之。太史公傳刺客。論列曹劌荆卿事頗悉矣。即使遍宜當其世。其勇敢豈避三子乎。余還自薩入肥。過邨井大年。大年先問遍宜。余以所見答之。大年愕然曰。彼嘗著述人參記。痘疹必用二書。排擊我東洞之說。我疾其執拗。朱書其行間。辨而駁之。使人齋去贈彼。今以子之所言。彼之怒我必甚矣。我之未爲魚肉。幸而免耳。

眼空寰宇意鷹揚。驍果如君不可當。盛世徒懷衰世略。南方乃有北方強。弦鳴楊葉風生壁。匣動蓮花夜吐芒。屈膝姑從醫職末。願言分取范公良。

小倉亞相公

名某。號此君亭主人。寶曆中。魯不佞與韓聘使南秋月輩唱醉州藍島。相公千里賜書。徵魯唱和集者。魯時年少客氣。學術文章無有所解。所作篇什率孟浪。不過爲覆瓿之具。是以醜拙自藏。不欲傳諸大方。及相公命下。不可以拙辭。就潮公謀之。潮公曰。工拙子之分也。相公有命。不敢不獻。且子百年之業。豈謂已于此耶。相公君子也。將觀人文察民俗。以供異日毗輔之用。是以手書賜子。雖曰周室輶軒之使。亦何以加之。要之。亦太平一大美觀也。不敢不獻。因綜理爲上下卷。名曰決々餘響。作序冠首。使魯不佞繕寫。以上相公閣下。相公之書。今見傳于家云。

此君亭子帝城陲。千畝清風滿繡帷。曉聽龍吟靈籟發。昏迎鳳宿彩烟披。慕賢能屈三台貴。觀俗周徵萬國詩。一自吾從韓使役。家藏雲錦七襄辭。
(服南郭。太宰春臺。僧大潮輩。皆被相公知遇。第五句言之。)

我昔詩集終

師友志

春水遺稿
別錄卷三

藝藩 賴惟完 千秋 著
男 襄 校

余藝東一介書生。父母以其幼弄筆研。大喜期於有成。而寒鄉乏師友。獨從鹽谷志帥翁授讀焉。又有僧獅絃愛人。文墨之事多所資焉。十七歲丁內艱。踰二歲遊浪華。所交一時知名之士。幸不見棄。日夕往來。取益為務。後十餘歲。歸宦於國。乃祇役江戶。暇則求友。府下人亦或來問。如此亦十歲許。余謂學統未必一。好尚未必同。其交遊久近。又未必均也。而會合之際。各有所契焉。今老矣。時顧疇昔。其見存者僅僅晨星。浪華有一履軒。京有二幾齋。江戶有寒泉精里。備有茶山與桃源。肥有鹽井而已。其嘗相觀而善者。何忍泯沒焉。作師友志。

志帥翁姓鹽谷。名貞敏。以道頌行。業醫。吾竹原人也。其祖友菴以醫食祿於小早川氏。從朝鮮之役。其墓在鄉之照蓮寺。余童時翁為之墓表。父曰玄節。暫住大坂云。翁少時遊府下。問儒學於植田良背。講程朱之書。至老不倦。頗究精微。每朝自洒掃堂庭。明窓淨几。讀書琅琅。學極博洽。善和歌。談話諧謔。人無老幼皆盡歡心。為人潤達。不事生產。愛客酒飯每豐。翁多子而不育。有弟曰道哲。遊學京師。從久米訂齋。學成而歸。亦早沒。家有田宅。有書數十函。人

勸養子。輒言木村某以其爲子。其家壞矣。難波某子養某。亦已壞矣。共公等所目擊也。吾之無子天也。然借他人之手以壞吾宗。其罪更大。吾寧任天以自壞。公等莫復言焉。其天資開朗不凡如此。

赤松惟義字子方。以春菴行。播州人。少時出鄉住河內。後徙大坂。以醫爲生。爲人朴實。常談性命。不作詞章。以道學自居。所交必厚。知無不言。見無不規。自謂徑行直情。不能巧低昂。於交遊間。與二洲最善。常言吾晚志義理之學。而無所造詣。是爲終身之憾。幸有丈夫子。吾欲其爲儒。不欲其爲醫也。醫易富。儒易貧。而如吾父子之拙生計。醫儒奚異。與其餓於醫。寧餓於儒。後暴病沒。托孤於二洲。名翼。字文平。才學兼優。下帷張業。可謂善繼志者。文平稱本姓越智。

僧遵字超倫。號虎溪。藝小谷人。爲真宗僧。寓竹原照蓮寺。其人洒落脫凡。無真宗一種陋習。善書。被酒揮洒。字益妙。其於佛學。亦研究有淵源云。蓋不負其超倫之名也。鄉人皆崇信。如不容口。後病癱歸其鄉。竹原人往問其差劇。往來相踵。其爲人所信如此。時年六十許。遂沒。中南先生初名叔明。字士亮。後改晉氏。字房父。稱總右衛門。藝忠海人。本姓平賀氏。幼養於本鄉土生氏。年廿歲餘志學。寒驛無師。獨自苦學。躬執賤業。而繙閱十三經廿一史。義父沒。執三年喪。鄉人皆怪之。後皆悅服。生女子。爲求婿。後得土生氏同姓一男子。以女妻之。而身復

本姓。二家各得其所。後遊長崎寓京師。又徙大坂。而終無子。以著書爲志。其學不出詭譎園。僧周契字處中。號寰海。藝佛通寺僧。天資聰敏。善詩。與平賀先生善。常往來玉浦三原竹原之間。資余啓發亦不少。其於人不必勸異教。務導之從事文學。東西栖栖。惟日不足。從史平賀先生西遊。問文辭於僧大潮。亦此人也。健脚無比。行五七十里。猶適隣。並機警辨捷。雅俗皆悅。後歸山臥病。三年許而逝。年未四十。有詩集上梓。字都宮潭。字士龍。稱龍藏。備後三原士人。自刀筆小吏累遷。至掌郡務。爲人端亮淳深。有器局。言辭安定不苟。舉動必由規矩。而有風趣。嗜騷雅。納交都會名士。三原妙正寺景勝殊絕。士龍爲乞四方寄題。一時名家詩集。必有其詩。其勝大著。士龍之力也。然皆爲其君謀。非自爲也。余跋寄題詩卷。亦詳言此事。宮敬之字世恭。稱彥五郎。備後尾道人。面醜近視滑稽。賦詩敏捷。從僧寰海遊長崎。高陽谷贈詩一篇。盡其爲人。是時余十六七歲。後就官屢東役。往來宿尾道。世恭輒必來侍。欣然道故。老後聾甚。嘗有一新事可笑者。座客既舉以語我。世恭不省。客話方畢。世恭乃復話起。一座笑之。則自以爲吾能解入願。其談益劇。二兒皆才子。長善畫。夭折。島居瓊字子瑤。勝島惟恭字敬助。亦尾道人。島居謹篤。爲親族子弟輩。每日講小學。勝島亦謹篤。島居余爲之墓銘。詳其事。勝島先世有遊東涯門者。爲家誠曰垂裕嘉言。東涯序焉。

趙養字仲頤。號陶齋。又號息心居士。長崎產也。其人蕭散。音吐沈靜。而性豪宕不羈。世罕其倫。視權官如小兒。初住江戶徙大坂。後寓界府而終。善書法。多受業者。

森田政字士德。稱六兵衛。河內人。住大坂。為子錢家。洒洒落落。毫無銅臭。為人趨急恤窮。無有德色。善書。崇趙陶齋。以為在文徵明董其昌之上。愛古書畫。有鑒識。所藏多奇跡。旁好茶器刀劍。皆由鑒書畫得之。故古骨董無鑒而置者。士德或以低價獲之。其價倍徙。故士德家藏不必費多金。而其品極貴者有之。

片山猷字孝秩。號北海。稱中藏。越後新瀉人。為人耿介精悍。處己以謙。不脩邊幅。初從字士新於京師一兩年。士新沒後。住浪華。不以師道自居。從遊之士。皆朋友待之。詩文皆腹稿。二者蓋士新家法云。詩社曰混沌。人皆歸之。雖竹山恕齋英邁卓越。皆以北海為一日長。性不飲酒。善吹橫笛。又好茶儀。無子。墓在浪華梅松院。僧大典為誌。盡其梗概。

河野子龍字伯潛。號恕齋。稱忠右衛門。京儒岡白駒之子。仕蓮池藩為大坂邸吏。吏績甚多。暇輒著書。博學麗藻。一時推為繡虎。未四十沒。其學窺洛閩而未純。使其有年。不止如此。為可惜耳。河野蓋其本姓。

葛張字子琴。號蝨菴。以橋本貞元行。家在玉江橋北畔。世浪華人。為人恬澹樂易。接人甚謙。而詩名最高。都下賞會。無子琴不樂。世人皆納交為榮。其學博綜。於書無不窮。學醫于京。亦

究精奧。人特以詩稱。可謂不盡子琴矣。浪華之俗。遊冶為常。輕薄成風。子琴笑謔遊衍。人

疑其近俗。而不與富漢遊。貧窶自安。妻子熙熙。日夕吟咏為樂。子琴作詩。不似苦學者。不

欲與人評古今詩。詩友相會。動輒議論蓋起。子琴絕不交一語。一日獨行遊南紀。謁祇園尚濂。

尚濂伯玉之子。亦作家也。尚濂喜子琴。為說伯玉平生曰。先人所志甚遠。詩其餘業耳。世以詩

知之。是非其所刻苦焉。而其詩獨尸祝韓退之。子琴聞之。如得拱璧。南歸後。逢人輒說之。

岡元鳳字公翼。稱魯菴。浪華人。業醫。善詩文。每一篇出。人皆傳誦。為人溫謹。不猥交遊。有

香橙窩集。京師江村北海選日本詩選。見其集以為古人。曰句法格調。非今世所易得焉。

田章字子明。稱七郎右衛門。近江人。宅在鳴門橋。因以為號。家世以冶鍋為業。故屋傍列置鍋釜。

累累在地。開愛日園。日夕在一小室。左右圖書如書生。學務博洽。詩文皆有一種氣象。好客

飲膳豐美。為人磊落。有長者之風。

篠應道字安道。號三島。稱長兵衛。世浪華賈人。兄弟三人皆奇士。弟先沒。兄亦尋沒。安道後改

業。下帷授徒。善書。徒弟日多。為人濶達。處事明快不貳。藏古帖頗多。無子養二子。一

曰某。在近郊為里正。田宅頗富。一曰弼。字承弼。學識超勝。優幹交盡。去春余賜告浴。有馬溫

湯。便路過浪華混沌社。存者獨安道。時年七十七。叙舊歡甚。出所著草彙。浪華風雅。皆手

書。細楷整然。安道見入門者。唯授修德二字。無他語。

岡田豹字君章。稱善次。阿波郎吏。多材。文藝武伎皆稱出凡。最善詩與書。三十餘歸官其國。後為學職。修惕齋學為教授。

左鳳字子岳。京人。業醫。以佐佐木魯菴行。有學殖。善詩。書亦有法。風丰高尙。非凡流也。烏山宗成字世章。號崧岳。越前人。業醫。居浪華。齡過耳順。詩社之飲。必自居上頭。視余及子琴如小兒。人亦以其耆宿推之。然其人質實謙虛。自以為子琴公翼我所不及。音容溫雅。實長者也。

平九齡字壽王。明石侯邸職。以大島官兵衛行。美丈夫。善詩。書亦不拙。師事中井竹山。

荒木喬字伯遷。號李溪。稱善右衛門。池田人。其父亦善詩。伯遷從竹山游。好論詩。有識趣。選本邦古今詩。稱熙朝詩選。為十餘卷。為人恬淡寡言。風趣可愛。

五岳山人。姓福原。名元素。字太初。一字子絢。備後尾道人。善畫。最長人物。性嗜酒。有客必留酌賦詩。詩多六言。皆有風致。非尋常丹青者流。與池大雅相師友。名亦在伯仲之間。

中井兄弟。兄積善。字子慶。號竹山。稱善太。弟積德。字處叔。號履軒。稱德次。其先播龍笠人。後徙大坂。自其父登菴。已為名儒。兄弟並師五井蘭洲。竹山魁梧奇偉。治經精密。詩文雄渾雅健。為世所推。履軒較偏僻。而事事超凡。詩必用古韻。不奉沈約之政。文則以為東坡後無文。竹山時有膽張氣傲之態。而不害為好人。長子曾弘。字伯毅。文藻敏捷。今古罕比。一夜作十賦。

者再。齡三十餘。發病不起。竹山創懷德書院。次子曾縮嗣為院長。竹山為人謀事周備。又有幹

事之才。履軒持論奇僻。皆與人乖。自號幽人。兄弟皆有山斗之望。但其學信程朱不純為恨。

早野辨之字子譽。號仰齋。竹山門人。勉學勤苦。早喪母。獨與父居。至孝隱約自甘。而能樂父志。

為人甚瘦如不勝衣。自稱太瘦生。飲酒無算。醉而益謹。住大坂西橫堀。早沒。子稱義藏。有才講說為業。

中村有則字伯夷。生于二上山下。故號兩峯。住京師授徒。其學與竹山同歸。善書。早沒無子。

小山儀字伯鳳。稱半兵衛。浪華賣藥舖之子。嗜讀書。網羅和漢。其書皆奇僻。以山海夷堅為主本。

舶來新書有奇僻怪異者。必讀而記之。素有記性。叩之如響。人目以怪物。未弱冠多病。至於不起。有著書數種。竹取物語抄上梓。其文辭老成可誦。又其天折之兆也。送余探梅伏水詩云。

仁德天皇昔上臺。三韓博士奏歌來。無何文物今寥落。遂使騷人遠問梅。

服部保字右甫。號栗齋。稱善藏。攝州小曾根人。在江戶築地。下帷授徒。說洛圖諸書。道理爛熟

而有條理。其學受諸稻葉迂齋。且與村士某善。皆崎門之裔也。為人夷曠。懇懇言談。一時稱儒

宗。人或議其過高。後賜地于糺町開學舍。初扁信古堂。襲村士學堂之名也。後改麴溪書院。

鄉里小曾根為保科侯采邑。其父兄為之宰。右甫初亦受一官。在江戶邸。其學成於江戶。初寓大

坂懷德書院。故善道蘭洲登菴事。中井兄弟為垂髫之友。六十六歲沒。

黑瀨祖參字子孝。稱登內。書室扁白茅。稱白茅先生。本藩士人。在江戶邸。邸士有森某。為太宰春臺高弟弟子。子孝初從之學。信春臺過於森。其學以從政為主。雖不能當路。而其言行要期於輔治。正心誠意。皆視為末。其教人矩步繩趨。無有從容之氣。為兒童授讀。僅有失訓。輒必誚責。人視其塾為囹圄不恤也。余祇役數歲。其交益熟。口授指畫。稍知舊學不足貴。而出言處事。舊習不脫。後向余頓首謝曰。吾初謂不從政。則無學無道。今得聞洒掃應對與移風化俗。無適非道也。吾心豁然。吾何幸享此大錫。何日報之。為人端亮剛直。讜言正議。存人口碑者甚多。大凡世人所難。率意為之。為人趨急釋紛。如其家事。邸內之人。信之如著龜。親之如親姻。他邦士或問余曹舍。子孝多在坐。人必注目。故無不知吾邸有登內者。宮原贊字必大。稱文太。豫人。為人強直。狀貌鄙野。如不伍文墨者。在服部右甫塾數年。學治程朱。頗為精微。凡於世有所見。皆以文發之。上林祭酒書謂。人雅言我陸某官。當與某事廢某事。各得其所。不亦快乎。一旦得到其位。則不知所厝。大馬高槍。揚揚過市而已。上紀公子書。論蠻器事謂。苟以此器為有益。盍建言以適世用。苟無所益。婦女子翫物耳。此類甚多。皆為可觀。後歸官松山藩。侯已沒。嗣君幼。執政將有用焉。而嗣君患痘沒。必大亦暴疾死。歲四十餘。其弟繼為學職。名文次。今改義平云。赤崎楨幹字彥禮。號海門。稱源助。為薩世子伴讀。為人溫厚和平。善詩及和歌。句句吐實。無

有一浮詞。亦曰。子與余同從世子。世子之德。一藩盛衰係之。輔導之任。何可自輕。子則實同悲歡者也。長余可十歲。薩世子襲封。每歲從駕東西。或同役東都。或要之于吾府下。二十年間相逢無虛歲。彥禮學初主鳩巢。又遊肥後。從藪孤山。識趣甚高。又聞彥禮性豪壯。少時為任俠。余二十年之交。毫不見舊態。蓋其學之所變焉爾。特時為歌詩。叙其隱衷。持來示我。慷慨泣下。

栗山柴先生。名邦彥。字彥輔。稱彥助。東讚人。為阿波儒臣。住京師。召為昌平教官。特與林祭酒岡田先生。共修學政。都下書生。眩惑謗園赤羽之餘焰。不知有正學。每示諭下。輒都下傳聞。詆謗百出。皆歸咎於先生。甚則入室倒戈。先生泰然。國學規模一新。先生力居多。又奉命譯十七史。名曰國鑑。余時得窺其稿。老後詩文。往往率易狂放。然其遣辭自在。曲盡心事。無少遺憾。亦人之所不及也。愛客容衆。風流好事。而談笑間。事涉節義。音詞激烈。如風雨。余嘗奉命講經于昌平學。先生時來視學。余適說小學程子人怕寒餓死一節。後過其宅。先生曰。疇昔講說。沈着痛快。使人竦聽。往時京儒某著諸葛孔明非王佐辨。人問其當否。余曰。其人受某法主俸米。孔明雖汗下。必不食浮屠之食。欲議孔明。不食其俸而後可。又一日戲語客謂。使我得志。清國可取也。閩國皆讀書人。而北面胡虜。豈其本志。余航海以諭諸聖賢哲裔。孰有不戮力者。率以驅腥羶。如振枯拉朽耳。豈不大快。二洲龍渚自旁言曰。先生少安。無乃被髮纓冠

於鄉隣乎。一座哄然。朝鮮聘禮下議昌平學。先生執一事嚴言。林祭酒曰。此議所關非小。先生且低聲。先生曰。奚妨。我聲雖大。不至聞於朝鮮也。衆皆大笑。余嘗問其著書。曰無二片紙。蓋著書謂益於人也。如僕迂腐之儒。為不急之著。人或閱之。是損人心目也。故僕不著書。乃所以益於人耳。謂之有著書亦可。先生齒德並高。侯伯爭延請。後進班布衣。遷任侍讀。列相每有大議。詢謀亦不少云。其敬奉先祀。哀恤親舊。細心謀事。皆可以範世。余嘗請觀其家祭。其備。其妻兒嫻禮。亦可觀。平居破障敗席。衣帶稱之。人之所難。所謂審易安者也。然其延客。供給甚豐。四方贈遺。日闌盈其門。都下儒門之盛。蓋莫過柴氏者。無子。養侄為嗣。石井蠡字子彭。稱條大夫。江戶人。仕館林侯。閑文辭。通關東典故。多私著。世有三王外紀者。不知作者。子彭常舉其謬誤。以為話柄。皆可聽。後著續三王外紀。館林侯居相年久。子彭為其書史。故熟其事也。後歸其本邑。掌學務。不知其存沒。

岡田恕字強卿。稱清助。居在寒泉坊。人號寒泉先生。受業於村士某。為人明朗俊邁。旁達醫理。又善和歌。說經爽快。聞者洒然。與服右甫善。切劘相發。賜出身為教官。與柴先生脩昌平學政。學者大進。尾藤古賀二博士荐至。寒泉出為代官職。治數萬石邑。有政績。後以老病辭官。邑人闢于幕相吉田侯之門。有借寇之請。乃命進秩布衣。而職猶如故。數年乃得退。嘗居外艱。著二年間記。不輒示人。

黑澤萬新字新卿。稱右中。上毛人。為人真率。為田安邸儒臣。白河侯本田安公子。問學於新卿。侯之當國。宇內一新。名譽烜赫。翁視之猶其童時。少遊林門。學極博洽。其子惟直字正甫。稱正助。力學為詩甚工。陞于麾下。為昌平學直番長。後遷林虞。

菱川觀字大賓。號字門。備前人。遊大阪。時佐倉侯為城代。聘為文學。後住江戶。與二洲善。論文甚密。謹稱謂之際。遂作一書。柴先生題曰正名緒言。年未五十。得病不起。

岡兄弟。兄名壽卿。字元齡。稱惣左衛門。弟延年字仙儒。稱文兵衛。備中倉敷人。兄弟皆溫謹。兄善詩。弟善畫。母齡九十。兄弟侍養盡孝。縣令賜銀旌賞。凡以孝順被賞。多係畝隸孀婦。岡兄弟其鄉豪族。風流好事。無出其右者。而膺此旌典。是為難獲也。母沒後。兄弟相尋沒。皆七十餘歲。元齡有鶴汀吟稿五卷。

西山正字士雅。以拙齋行。備中鴨方村人。為人耿介。少時游京畿。受業於那波主膳。歸里下帷。遠近群至。鴨方僻鄉也。以有士雅。鬱為一都聚。其課門人。嚴毅不少假借。有侯國徵命不就。學崇奉程朱。以關異衛道為任。柴野先生在東府。士雅寄書懇勸。以此為言。赤穗赤松國鸞寄書栗山。以為學主程朱為偏。大府之學不可如此。栗山無答書。士雅為著一書辨之。名曰論學書。平生接人風流閑雅。談多戲謔。但一言有乖理。必辨詰數反。人服而後止。遊京師。聖護親王聞其為人。延請將見。以村野之人不嫻禮辭焉。然王府堂殿屏障。皆為古名畫。一日

或引士雅觀覽。將遍。府長史佐木某遇之堂上曰。親王知子至命延見。士雅逡巡辭如前日。且謝褻衣不可以見。府長史乃辨禮服服之。不得已入見。王大悅。有所賜。又親為橫笛一弄。曲名曰老君子。士雅病沒。時年六十四。葬不用浮屠禮。儀可觀焉。門人故舊近鄉送者三千人。倉嶽字善卿。號龍渚。稱善司。與平侯儒臣。為人端愿坦率。壯歲遊京。寓伊藤氏塾。後在江戶邸。與余往來甚密。識趣明朗。不逐時好。詩文成一家。讀周官有圖解。儀禮禮記皆有論。讀宋史。有宋官抄。條理可觀多。人所不及。嗜酒稍醉。高論劇談。旁若無人。嘗曰。俗士恒嗤書生善談古不可使從政。今之從政。大抵沒字碑耳。猶且執政。摹稜了事。吾輩埋首書籍。自少至老。所學何事。寧有游及不有餘地耶。特無奈其不相托耳。近歲諸藩有閱兵之舉。皆以金銀紅紫。裝飾介冑。如婦女子上已縷人之戲。夫苟有緩急。鉏耰棘矜。亦足折衝。然求其備具。不得不做縷人。今之問政於書生。亦然。誠當其任。咄嗟可辨。至預論列之。不得不以古典為談資焉爾。言畢輒劇笑引滿。然善卿為人不矜其才學。為知己吐露肺腑。人亦不厭其言。夙喪偶。躬育二子。不復蓄妻妾。門生數輩。辨給家事。一時諸侯延請。講經無虛日云。沒年六十餘。樺島公禮作墓表。

長久保玄珠字子玉。號源五兵衛。水戶赤濱人。因號赤水。為人坦易洒落。學極該博。最長於地理。為圖精緻。其與人言。言語嗶嗶。其於文章。如無意者。而用心極細屑。自謂書詩皆拙。不可

視大方。然其詩流暢。書亦高古。時和漢輿地數圖。皆就緒上梓。又以疾命撰地理志。示其稿本。精密特甚。又示七道輿圖。方一丈餘。義公修史時所製云。赤水退居其鄉。水戶侯習鷹之次。過見之。召其親族賜謁。時赤水諸孫有二十有四人。赤水作詩以紀其事。

箕浦直彝字迂叔。稱右源次。土佐文學。土佐尚闇齋學。迂叔亦其徒也。最信淺見氏學。極該博。神道天文曆算莫不研究。其謙虛納交多方。無有所擇。皆廣異聞也。迂叔兄弟三人。兄稱專八。為大目付。弟稱乙三郎。亦為文學。父母垂九十。兄弟皆天資孝友。人皆觀感云。

辛嶋憲字伯彝。號鹽井。稱才藏。肥後熊本士人。世為儒臣。熊本嚮有數士厚為教授。及士厚病發。高本敬藏為教授。伯彝及大城文卿為助教云。薩州赤崎彥禮嘗遊熊本。雅識伯彝。云才藏才不負其名。余同祇役江戶兩三次。交道最密。後柴先生宅壬戌赤壁夕。會諸名士。伯彝亦與焉。白河侯聞之。寄書遺鱸於先生。索座客詩歌。先生使伯彝為之記。一時傳寫以為雅舉。

和田邵字伯高。號一江。稱鍊之丞。岡山文學。為人溫和樂易。有長者風。旁理天學。時備前及薩世子與吾世子。皆為同庚。一江謂余與赤崎彥禮曰。人主各成其德。在其所輔導。儒官為位雖卑。侍左右。雖日少。一語先入。其益匪尠。余則老矣。公等勉旃。余因一江得聞烈公事跡及其學政。多所未聞。蓋其學校之學。出於米川操軒。是中村惕齋之流。而熊澤了齋無所關也。又善言河口靜齋事。多可聞者。同在江戶。數閱月而別。其子久兵衛祇役江戶。一再相見。善傳家

學。

木孔恭字世肅。稱吉右衛門。大坂人。家在北堀江瓶橋。造酒爲業。密柑酒最著。善書畫。以好事著。號兼葭堂。客無雅俗。無日不至。余辭浪華之後。有新令定釀額。世肅家。時他人借釀具造酒。坐犯額籍沒。以世肅爲名。遂不免。家產蕩盡。乃携家往勢州長嶋。亡幾復歸住浪華。以鬻文房具爲業。沒後。官命納遺貯書籍。賜金五百兩。余閱其書。皆奇帙僻書。非經史文章可備研究者也。京人伴蒿蹊畸人傳。敘世肅事頗詳。

山口景德字正懋。號剛齋。稱剛三郎。大坂人。貌魁梧。聲如鐘。從余岳父飯岡先生。有父師之恩。學窮精微。又執贄於久米訂齋。旁治兵學。學屬越後。自結陣行軍之法。金鼓弓砲器械之制。無所不講。江戶服部右甫亦治兵學。長沼流。常嘆稱剛齋講兵。如屢經其事者。大叩小叩。吾所不能竭。有兵錄之著。善歌詩。又治神道學。說書明白。條理不棼。間以其所見。不必沿先輩舊套。資性謙卑。時或豪宕以之。初在浪華僦居。下帷授徒。貧窶特甚。後仕龜井侯。祇役江戶亦數反。與余交態最熟。柴野先生嘗招集諸友。酒一行。先生乃請坐客。分講論語與點一章。人各一二節。主人發端。說首一節。次到剛齋。剛齋講說纏々不已。遂至終章。辨說昭晰。引據的確。聞者不知倦。蓋剛齋耳聾。初不審主人所請。以至於此。余謂之曰。老兄一人終章。爲諸客代勞耳。一座粲然。而剛齋卒不了了也。剛齋白髮丹顏。氣概磅礴不可犯。而情真藹然。人莫不愛敬之。

莫不愛敬之。

磐行言字子言。號華沼。稱勘平。島原重臣。善詩及書。弱冠師事河口靜齋。與余交遊。時既致仕。年過七十。飲酒如壯夫。兩鬢無髮。假髮數莖。言談有趣。非常人也。在島原多政績云。

樺島公禮字世儀。號石梁。稱勇七。受業於紀德民。爲人質厚而有才。爲詩文敏捷。與倉成善卿善。善卿世儀簡率。不與德民莊重養望同。栗山先生嘗謂余曰。曩會信古堂。皆一時名士。德民未必脩邊幅。而言吐威儀。視諸吾輩。鷄群鶴也。如賓浦迂叔之朴野。是書生真面目。德民終未免俗。寒泉先生亦曰。德民廟堂之器。非吾輩也。其意與栗山同。

師友志稿本。亦精神所寓也。欲與在津紀事並存。擬待暇整頓。而一疾不能。故以屬汝。非要傳播人目也。苟書而存之。不獨敍我得益之誼。乃其人之梗槩。與交際之熟否。皆可以推知焉。則此諸君子者。後世或有因以識其真邪。是我紀述之本意耳。在世之人多不及。亦欲備載而未暇也。每段短長不必齊。要得其宜可矣。望汝善料理之。至囑至囑。文化十二年乙亥十月十七日。力疾把筆付裏。

補遺

尾藤二洲先生名肇。字志尹。稱良佐。伊豫川上人。父業操舟。先生少有足疾。來浪華。讀書於片北海門。與先君相知。先君得洛閩書喜之。勸先生相共從事焉。先生識悟超詣絕倫。著素餐錄。

可抗衡明薛胡二氏餘錄。為漫筆亦益後學。又國字發蒙者。有正學指掌。當路某侯。嘗訪士於寒泉先生。先生對曰。文辨雄豪。無若士慶。學識純粹。志尹為優。於是終徵先生云。以其足不良。特給官舍於昌平境內。策杖上巒。其奉朝請者。正會一謁而已。後賜第壹岐阪。退安養老。少於先君數歲。先沒。年六十餘。比其來江戶。喪配。續娶飯岡氏。乃與先君連襟。呼為襟兄。今嗣後配出也。先生肉角大口。音吐爽亮。詩文皆高朗簡遠。如其人。詩初愛陶柳。及老又喜白傅。精里先生以為不可。論難往復。栗山先生為調停之。終不合。性嗜酒。不多飲。微醉輒脩然倚柱。喜談本邦群雄事跡。又辨和漢名稱當否甚詳晰。著有稱謂私言。東儒淆亂名分之弊。至今日大革。先生之功居多。

古賀精里先生名樸。字淳風。稱彌助。肥前佐嘉藩士。初喜王學。及游京坂間。與二洲翁及先君交最密。終舍舊學。純於朱氏。後為藩侯所任用。參與機務。同藩石井仲車以才藻風流見寵。侯嘗謂左右曰。淳風可用者。仲車可愛者。以故仲車扈駕東西。而先生常在藩。與先君不相見數年。及先生與二洲翁。並為昌平教官。乃得相聚於東云。二洲翁恬淡簡易。而先生則嚴密寡默。少所許可。先君周旋其間。皆莫逆於心。先生軀幹豐偉。履舄皆特製。凡牙營士人賜時服者。更裁令窄。乃可服用。先生則直穿之而稱體矣。其學博涉無比。詩文使事用字。他人所搜索而得者。先生取之腹笥。咄嗟而成。驟見疑其奇僻。徐釋皆允當不易。雖日用應酬書牘。皆可誦法。好作字。

字體秀麗。觀人揮酒。乃發技痒。為人短視。每作立幅單條。展紙於膝右。提筆俯就。書至紙尾。字不欹斜。及諸博士病且沒。先生鬱然獨執學柄。有別第曰復原樓。時遊息焉。性健啖而不解飲。每出遊。大囊貯糞糕類。以代柑酒。後先君一歲卒。年六十餘。有三男子。皆俊才。留長壽字溥卿仕舊藩。貌酷肖乃翁。而風流洒落。與襄善。次煒。出嗣洪氏。季煜。從而東。見為昌平博士。博士之婚。先生猶在。侯伯贈遺滿庭。賓客門生賀者麇集。殺核極豐。而酒一二行。衆乃不敢飲。飲茗食肉而罷。

菅茶山先生名晉帥。字禮卿。稱太中。備後神邊人。父樗平翁。母佐藤氏。為人皆不凡。使先生及弟信卿就學。先生與西山拙齋翁同入京。從那波魯堂。與先君相知於浪華。先君歸省。輒過訪其家。家在官道。後就其宅北私起學舍。曰廉塾。依林帶流。雜種花木。比花木叢茂。而唔呶之聲鬱起。蓋山陽南海諸國。苟欲子弟讀書者。莫不屬之於菅先生。先生之鄉。為福山藩管內。初藩侯在東。見大學頭林公。公話次論詩曰。方今海內詩。當無出太中右者。侯問太中何處人。曰。聞其鄉曰神邊。侯愕然。戒吏訪問。欲擢用之。以疾辭。乃給俸。時召對焉。後又召之東邸。一再。給其塾以田。塾去廣嶋三日程。與先君往復。每月一信。無信輒遣使問安。少於先君二歲。先君常言。吾終身宦羈。而禮卿放曠如此。禮卿常病。不如吾健。天數乘除宜然。然先君先沒。先生自言。少小多病。不意生存至此。苟知至此。不以詩酒費許多歲月也。然其骨格岸

偉。朱顏白髮。不似有病者。嗜酒日醉二次。土木形骸。談諧橫生。而洞察人情。深曉世故。卓乎有用之才也。信卿比先生更魁梧。才敏絕人。先先生沒。

姬井元哲字仲明。號桃源。稱貞吉。萬波俊誠字伯信。號醒廬。稱甚太郎。二先生並備前文學。居其學館中曹舍。蓋烈公遺制。桃源與先君契舊。醒廬後同役於東相熟也。皆覃深理學。兼長文詞。桃源先沒。先君遺言屬埋銘於醒廬。

若槻幾齋先生名敬。字子寅。本京師角倉氏屬吏。辭為儒師。為人沈默寡言。而聞見極博。意不可一世。拙齋翁嘗戲謂先君曰。推子寅為心。雖程朱復生。或恐不輕合。而獨許於君家兄弟何哉。家在聖護院村。所謂環堵蕭然。簞瓢屢空晏如也者。大府賜金褒異。蓋風勵京儒也。

僧獅絃為竹原照蓮寺主。寺與先君故居隣。先祖父亨翁君欲教先君書。而無所獲法帖。懇獅絃就覽其所藏。日鈎摸數字。持歸臨學。寺依山樹石幽邃。獅絃方丈在其南偏。宜於觀月。曰澹寧居。及先君仕官。在本府時。告假展省。必一過焉。又敬桑梓也。

先君晚作師友志。起艸未全而沒。遺屬襄整理之。謹閱稿本。首錄各人名。既了者加勾。未了者否。否者猶三四焉。而有襄不及知者。不敢妄意補之。其及知而不敢不補者。略叙所聞見如右。昔者柳州記其先友於其父碑陰曰。先君所友天下善士舉集焉。東坡稱其考諸史。卓然知名者二十人。今諸先生亦卓然知名者。不必待先君之文而傳。況於襄續貂乎。悉載先友所

以加耀家乘耳。襄謹識。

師友志終

春水遺稿別錄卷一

藝藩

賴惟完千秋

著

男

襄

校

在津紀事上

惟完歸宦本府已三十年矣。追懷津上遊寓時。多少興致。有不可忘者。時又話及。兒輩自旁錄之。作在津紀事。文化庚午十月識。

北海片翁初在阿波橋北。陶齋趙翁在鹽坊。余師事二翁。二翁則朋友待之。有愧於心。承奉惟謹。混沌詩社。每月既望。諸子會集。分題探韻各賦。詩成取几上一紙書之。不別立稿。蓋腹稿已熟也。故無有臨書躊躇。無有故紙狼藉。

北海作詩文。雖長篇大作。未嘗立稿。腹稿不熟。則不下筆。混沌一社。人無巧拙皆倣之。詩社會集。相師友請益。互定推敲。皆暗誦舉之。亦北海家法。

混沌社。烏宗成世章。田章子明。合離麗王。篠應道安道。左鳳子岳。清履玄道。福尙脩承明。富維章有明。萱來章君譽。木孔恭世肅。岡元鳳公翼。葛張子琴。隱岐秀明子遠。平九齡壽王。西村直孟清。河子龍伯潛。岡田豹君章。井坂廣正雲卿。小山儀伯鳳。皆浪華人。余以羈旅周旋其間。烏翁齡垂耳順。北海子明次之。其餘皆不下三四十。余時二十許。小山儀少余二歲。玄道有明早死。少

所唱酬

一社雖不無親疏。或結伴出遊。於月於花東西相携。如無虛日。而人各有事故。少有舉社相會者。但余與子琴必往。余自移居江戶港。亦不得輒往。子琴則如故。

社友相會。交際甚昵。浪華之俗。酒饌極豐。拈韻賦詩于杯盤交錯之間。各言爾志。如北海崧岳。性不嗜酒。詩成輒先衆而去。鳴門恕齋善飲。子琴小飲。善於賞會。故一時都下之集。無子琴不樂。

社友詩會。或務談論。或沈吟難一二字。或過醉。或有事故。不成篇而去者亦多。獨子琴莫不笑諠。莫不詩成。或至累二三篇。而其字句極巧緻。又過數日改前詩數字。請正同社。蓋子琴於宴會。不以為樂而以爲學也。

子琴賦詩。人未嘗見其檢韻書。就詢字音平側。則莫不響應。都下雅集。坐客後先詩成。杯盤亦狼藉。北海一閱如不歷意。數日後乃舉前會詩數句或全篇。評論之極詳。

社友雖小詩短文。必相示請正。而後就北海取斷。北海有詩文。輒亦必謀之諸子。雖以年少如余。亦謀及焉。毫無自滿之色。

北海書堂會業。書課數葉。北海初開卷不復翻閱。諸子議論蜂起。北海斷之明晰。暗記其註釋一不

失也。

尾藤志尹初自豫州來寓北海。侍坐偶舉南郭文三三句議之。北海吹烟不答。志尹問不止。北海曰。勿以為也。議此不如吹烟。

北海善書及橫笛。麗王安道善書。公翼嗜物產學。子琴善笙及簫築篆刻。爲妙手。

鳴門學務該博。詩文亦一種氣格渾成。

鳴門家園曰愛日。樹石位置。自有別趣。有十花詠。其名品也。關小齋。齋前有芭蕉數莖。綠陰滿

窓。夏日無畏景。

恕齋會友。割烹極巧。蓋夫妻躬自調理。若温酒煎茶之候。亦有家法。聞其父白駒亦如此。

白駒多著述。富藏書。恕齋學信程朱。與父異趨。以向歆自處。若伊洛之書。皆恕齋所購得云。

然其學有所不純。余嘗以雜霸目之。恕齋有恨色。余曰。非獨其說。以其行事。恕齋笑而不辨。

恕齋豪宕不拘小節。但有臨池之癖。常摸古帖爲業。如國朝法帖。全部臨寫數十卷。表背裝釘。夫

妻手自理之。

恕齋好客。常留酌賦詩。一日謂衆曰。時序晴雨之詞。已覺可厭。請分詠國史何如。皆曰。善。余

與子琴。最不諳本朝史乘。一題到手。每詢之諸友。而後始能構詞。如子琴咏左馬頭義朝。文

公駢脇還逢害。智伯頭顱誰乞憐。鳴門咏小松內府。捕蛇朝下還城舞。却藥身終報國心。一坐嗟

賞。爾後社會。輒以此爲課。體限七律。至數十首。哀然爲冊。福承明早死。諸友會九島禪院。賦詩弔之。時余賦五言排律十六韻。有橋老山無梓。鳳飛臺有鳳一聯。人傳誦以爲得實。爾後弔亡友用十六韻成例。社友相戲以十六韻爲凶體。伯鳳嗜學。好讀奇僻迂怪之書。素有記性。自博物夷堅。近世志怪之籍。無不暗記。社友目爲怪物。時年二十餘。善病。

余一日過恕齋。恕齋方與公翼會讀南史。公翼朗然讀下。畧不滯澁。後過子琴稱之。子琴云。公翼幼善讀唐本。人稱以爲神童也。

公翼爲人溫藉。而家法嚴正。以嗜物產。庭有小圃。雜植藥品。子岳才雋。善詩善書。本京人。或云。家舊豪富。破產爲醫。故交遊際。時露富漢氣習。醫亦有卓識。非凡工也。

安道豪爽。與人言。無所回避。肥後藪教授。肥前松枝某。皆稱其豪。善書。又善騎馬。不遜武人。

君章本阿波邸小吏。多技能。嗜詩及書。書學張瑞圖。篆刻丹青皆巧。又善射善劍。善箏及簫。邸舍至狹隘。而書畫硯席及武器。位置極趣。後從其父歸國。擢爲教授。壽王爲明石邸司。竹山常稱其詩。隱然有蛻翁遺韻。其書甚拙。後學陶齋。俄然一變。視初如二手。

崧岳烏宗成刻其垂葭詩抄。出其稿本。博謀及余。有夕陽欲上階句。余云。欲字作斜爲是。崧岳不答。後崧岳以示子琴。子琴亦云。千秋所言似有理也。崧岳晒曰。公等未足知之。後子琴過余語之一笑。今而思之。欲字似勝。崧岳兒視余輩。余輩亦或狎之。崧岳恬然笑歡終夕。實長者也。崧岳初遊京。學醫於香川太中。且及東涯之門。時爲我輩語。東涯看書甚速。而強記絕人。一日會業。一後生出其文稿請正。東涯一瞥了。乃示坐客。各傳覽之。東涯從而暗誦其文曰。某字可削。某字當作某。某下當加某字。其閱他書。速而能詳。蓋皆類此云。

余訪福五岳于京師。池大雅在坐云。將與主人游高野。寫其山水也。五岳命酒半醺。不理行裝。大雅不飲酒。數數促裝。五岳乃言。倒樽而止。仍勸余輩交酌不已。大雅援筆賦詩云。樂聖福先生。倒樽曰爲度。倒樽又倒樽。倒樽終無度。五岳堂扁樂聖。故云。

安道子琴之師曰兄臧。字臧宗。號樂郊。隱君子也。其學師管小善。旁治兵學。余不及見之。其墓在北郊妙德寺。題曰樂郊兄先生墓。高芙蓉之隸也。松山邸司堤寬傳其兵學。堤早死。其傳泯焉。臧宗寡婦薙髮曰秋月。在北郊。

子琴御風樓在玉江橋北畔。西南豁達。宜月宜雪。余雪朝必訪子琴。子琴已開軒捲箔。手自溫酒待余。歡賞移時。浪華地暖。積雪易消。故賞不下辰牌。遇雪而狂者。惟余與子琴而已。

夏夜炎蒸不寐。夜半乘月起。行訪子琴。子琴未寐。聞余寤音。即欣迎。開樓小酌。將歸。子琴必送到玉江橋。又共倚橋欄。聯吟而別。

子琴宅前。漁艇往來。喚取買小鮮。為羹佐酒。

子琴人目為詩人。而其學該博。莫不究討。最熟左氏。治素難。問者服其精到。其人謙虛。不叩不言。

御風樓扁聯。皆京師老儒宮奇書。

中井積善子慶。號竹山。弟積德處叔。號履軒。名望已高。竹山因年九齡來我社。往來交熟。

竹山自號居士。履軒自號幽人。皆為處士之稱。履軒不外交。實幽人也。俱務實踐。學主程朱。時或出入。

竹山論詩可聽。著詩律兆。履軒詩用古韻。其一家言也。

竹山諳鍊經史。一時無比。健啖豪飲。亦無匹敵。

北海素朴不脩邊幅。洒洒落落。人無貴賤。交無生熟。皆恬然遇之。以其嗜點茶。都下豪富之家。

舉茶會以得招致為榮。北海則不自知也。履軒曰。北海可納交也。而渠顯者也。吾為幽人。所以不交。但其不自知幽顯。為可重耳。

履軒以隱居放言自處。獨與志尹交。志尹未疾。行不過二三十步。故少交游。其人從容忘懷幽顯。

履軒要之為幽人。

兩日幽人招余與志尹小酌。余識志尹不能往。因過志尹。志尹欣然。將反招幽人。頃焉幽人拉一力至。曰相迎愧泥濘。騎馬到階除。志尹乃騎其背。幽人為之馭。相與往會。極驩而歸。歸復如之。

履軒著通語。文辭雄拔。議論簡明。竹山云。栗山潛鋒保建大記。物徂徠紀事。共有可議者。家弟為之一二論述。遂成一書。

通語實快編也。志尹雅通國史。其行文之間。多因志尹論定。

某年臘月念九。天滿鄉失火。延燒數百戶。開歲客來拜年者。語莫不及災。赤松子方名邦以春菴行來。直論中庸某章義。曰今者過北海論之。吾未服也。指天畫地。談論風生。一語不及災。

池田楨夫名世恭。稱八郎右衛門。以國學名。博通本朝典故。和漢書籍無不經目。尤善鑒定古名蹟。其家藏數百種。交道極廣。而未嘗與宴會。飲食斷腥。家無妻妾。真奇士也。

楨夫所藏書籍。無不朱批。和書謄本。一一校讐。極其精到。人以為奇珍。楨夫許借於人。毫無恡色。

楨夫性謙虛。獨以和歌自許。曰非敢謂能巧也。吾學於似雲。得其正路。凡和歌不得正路。假饒極巧。與俳歌奚擇。余嘗見小澤蘆菴。京人。人推為和歌宗匠。語及楨夫。曰吾聞其博洽。不聞其善和歌也。

余乃舉一首。曩同遊但馬先歸留別之什也。蘆菴驚曰。居然正風也。

浪華深見氏與高天湊同宗。亦名家也。其祖西土人。來寓長崎。稱久兵衛。號二覽居士。又航海而

西。請黃檗祖隱元。其時謁費隱鼓山。皆時高僧。各贈詩。一稱與二覽居士。一似日本高久兵

其家衰替不振。費隱詩不知其所在。鼓山詩歸篠安道家。久兵衛夫妻肖像二幅。隱元木菴爲贊。其

裝爲其妻衣被。古色可觀。趙翁與之有舊。嘗寓其家。因記其事甚詳。

深見家剪刀熨斗提火爐。皆唐山製。蓋其祖携來物云。

古林氏浪華名醫。其母八十壽宴。余亦見招。窓軒之間。陳設有趣。有紀藩南龍公畫鷹巨幅。祖見宜

進藥有効。手寫以賜云。又有黃檗開祖隱元木菴獨立輩諸衲詩卷。亦謝其治隱元病也。京所司板

倉侯手簡一幅。爲隱元請治之書也。正廳東偏有祠堂。扁見宜堂。隱元書。大廈廣除。庭有古連

翹樹高數丈。亦名種也。古林氏。主人世襲稱見宜。是時見宜幼弱。藤岡道樂幹其家。家道再興。余弟千齡師之。

古林立菴見宜之族也。常講素難。津津不已。人以爲迂緩。余與志尹皆交善焉。志尹塾生久病。百方

無效。一日過立菴。談及病生。立菴曰。每訪先生。吾見其言貌。蓋風邪未除已。不足憂也。

其說引據五行。冗長可厭。翌日來診曰。果如吾所測。乃與藥。五七日而愈。志尹謂余曰。彼素

難之學。亦不可廢也。

河內一屋村有北山元章。亦名醫。喜交文士。每歲初夏招我社。江北海。林東溟。龍草廬輩。自京來會。

吟咏揮酒。雜以笙琴。元章徒弟日盛。家道年隆。一歲拉余輩偕登金剛山二宿。歸路上千劍破。

過觀心寺。鳴門作之記。附以群咏。題曰那羅延窟草。那羅延窟金剛山別名。一行二十餘人。今

不知其卷存否。

元章嘗導訪北村氏。稱六右衛門。泉之豪農也。西距界府二三里。曰踞尾村。歲収一萬餘石。堂室庭除。皆有古風。

待客極厚。同遊者。北海。鳴門。子琴。形壁。其餘一兩人。不記。

竹田向水以醫仕伯太侯。住泉府中。家亦富。余與鳴門。子琴。形壁。賞楓于牛瀧。向水識之。走价

要其歸路。乃往。一見如舊。供給至厚。向水善詩。終夜唱和。出其二子見之。皆幼。後托余

從學。長者先歸。少者曰省吾。好性理之學。幾乎有成。余適歸國。亡幾省吾病死。余爲銘其

墓。

志尹弟闈叔。孝章稱熊宗。才學克肖乃兄。余歸省及他適。數日之行。輒請闈叔代教督生徒。沒年二十

二。從余遊者。夭折可惜。闈叔省吾二人爲最。

平賀翁在京罹病。予東門人問之。不審。乃自理裝拉二宮東昌。備後吉和人。初爲僧。後還俗。善醫。嘗與翁同遊長崎。問病。侍

執湯藥十八九日。翁稍就安。乃辭歸浪華。後數年翁納繼室。嘗謂之曰。自吾寓京。唯有一事

不可忘。吾得篤疾也。賴某自大坂來曰。先生安之。僕來在此。吾心乃大安。繼室爲余語之。

西川義之。稱龍之進。後爲江府徒士。長崎人。寓平賀塾。一晤相歡益昵。暫還長崎。復往江戶。過余留

數日。爲余請海賈書。余堂扁爲贈。余不喜。因出唐貨蠻布代之。亦不喜。惟擇其水筆廿枝許取之。其堂扁雖余不欲得。以有余姓字委而去。

森田士德善書。其人率直。愛敬趙翁最厚。好古書畫。不吝財貨。但不欲多蓄。務擇其極佳者。其或同手重複者。必舍其一。其他器玩亦然。

京僧携書畫數軸來售。有僧愚中書。吾藝佛通寺開祖。士德出數十金購之。後聞佛通寺無開祖書跡。曰

在我爲玩具。在彼爲什寶。因改其裝寄之。所謂古金襴也。闔山大喜。士德愛其書。摹搨頒與同人。愚中亦嘗入唐者。其書有二種古氣。

秋萩帖爲道風書。和歌十餘首。帖首有秋萩二字。故得此名。其真在新清水寺。余欲觀之。與士德

謀。恐主僧拒之。索其所識書柬爲介。尙恐其弗肯。一日袖其書。與士德赴之。寺下酒樓曰

浮瀨。就命午飯。店主母問吾輩所以來。乃告其實。主母率然曰。妾請先往語之。頃焉歸報曰

可也。乃往。遂得縱觀。眞八百年來物。古色蒼然。而其絹青黃可辨。奇矣。是日一老嫗爲介。亦

益奇矣。但展覽之間。女奴數輩在傍。雜沓戲慢不解事。可厭。士德云。古人有東山携妓事。恐

亦如此。因共一笑。

美日和景。士德輒催余。俱過城東南廢寺閑院而歸。

山口剛齋性豪邁。少好任俠。且脩禪教。後折節受業於吾岳翁。又與久米順利交。講究道學。益極

精微。又脩越後兵法。亦抵蘊奧。對人談兵。如躬歷軍陣者。蓋浪華人所罕見也。家貧數遷。

後不得復儼舍坊市。遂寓上町一牙兵宅地。

剛齋考究火伎。而貧莫能試之。且都下令嚴。不得私演其伎。土佐人谷萬六得授其法。在國試之。

服其精妙云。

剛齋音吐骨幣。宛然一武弁。而風流開雅。善詩文。和歌和文亦皆可誦。性不飲酒。言談風生。時

聞笑謔。如醉漢然。

剛齋著兵錄。蓋兵書之要者也。又善鑿古甲冑。至戎裝之式。莫不諳練。

麻田剛立豐後人。來寓浪華。本姓綾部氏。長於天學。雅有卓識。每晚上屋觀星象。非剛健者不

能。不愧其名也。

岳玉淵名良。才穎無比。善書摸三王。多巧伎。愛石菖蒲。護養之方亦精。

玉淵八月獲兔。命工爲筆。工不能治其毛。玉淵自取治之。口授筆工始成。余亦試之。極佳。後

多製出。其有巧思如此。

五岳善詩。後好作六言。畫人而詩書皆有趣。五岳之後。吾未之見也。

五岳五子。以泰恒嵩衡華爲名。而多天。人或教之棄諸他家。他人舉而名之。乃能有育。後生一

兒。棄之於其東鄰。東鄰即北海。北海舉之。與名曰捨五郎。今東岳是也。

名和八郎者工篆隸。多技能。住北御堂後。墻壁皆形。自稱形壁。其人質素寡言。與北海交密。月岡雪鼎以畫著。與楨夫爲鄰。隱子遠介楨夫求畫鶉。辭之曰。往有需此者而辭之。時自謂吾鶉不及光起。過十年當及。今年既過焉。終不及之。所以辭也。

圓山應舉畫名一代。有人自京師來者。多齋贈余。大有德色。余不甚喜。得輒與人。今不留一張。余好古書畫。夏日入京。觀諸名利所藏。冒暑奔走。累二年。故在其時。祇園會亦不暇觀也。沈溺亦甚。

余謂晉唐之真不可觀也。得觀宋元斯可矣。茶博士所稱古僧伽書。按其時則宋元。其紙其墨。或可。以摸索米蘇黃蔡餘韻焉。故余在京坂見此等跡。必鉤摸玩之。於本邦古名人之跡亦然。趙翁見余費精於鉤摹。輒曰。無以爲己。存十一於千百。惟其神韻而已。臨摸爭巧。不了事漢之伎耳。

韓大年。天壽。稱中川長。四郎。伊勢人。嗜墨刻。有江戶人官藏。寓食韓氏。巧彫鐫。官藏來浪華。一再過余。

余在浪華。玩論語集註。伯潛多書。因借朱子遺書等。參互校閱。著私攷二十卷。後閱之不滿意。舉而火之。今而思之。枉費了許多日月矣。

趙翁書名甚高。好酒。豪宕不羈。遇北海子琴如小兒。

趙翁不乘醉不書。而喜金絲袈裝。士德欲請其書。輒先招飲罄歡。伺其乘興。稍出挂軸數幅。披

之皆空白。其裝金絲爛然。翁見之欣然。揮洒如掃。醉墨淋漓。愈出愈奇。直揭諸楣間。翁益欣然。士德退改其裝使雅馴而藏之。

趙翁醉後潑墨作畫。極多高致。非畫家所及也。

趙翁音吐沈靜。容貌溫雅。而其自律律人。多武人氣習。蓋少壯住江府。有所薰陶也。然身不佩

寸鐵。結髮如道士。蕭然一野人也。

趙翁在浪華。見奉行代官。必與之抗禮。視其僚佐。如奴隸然。

西山某莊樹竹幽深。亭臺各有位置。其茶室蓋千氏所規畫。四方取則。其徒之所艷稱也。主人就趙

翁請命之名。翁直命曰天心居。主人敬謝而退。坐客以爲有意旨。請其說。則曰。莊在天王一心

二寺之間。因得是稱也。坐客哄然。

趙翁後徙界府。僧法林從學。翁有客輒命具供給。力人八角。喜八在其門塾。余題枸杞園詩。有魚

蔬有課僧司膳。門戶無扁俠守關一聯。園植枸杞故名。

趙翁患腫累月。腰脚彎急。不能起行。諸子弟憂之。士德勸其浴但馬溫泉。力請乃得。遂爲具僕從

以往。數旬果有驗。爾後惡酒尤甚。蓋酒毒爲虐也。病後不爲畫。

余嘗與趙翁觀楓高雄。而過華園信宿。出伏見上舟。同載者有京語。有鄙語。相合甚驩。舟抵牧。方岸上有五六人。呼舟而乘。皆惡少年。所謂虛無僧侶也。言貌粗豪。傍若無人。衆皆沮喪。不

敢出二語。趙翁瞑目而坐。初如不經意。頃焉乃言。汝等何謔語乃爾。盍爲一弄樂。乃公也。衆相目失色。少年皆曰。丈人有命。敢不奉命。乃取笛于囊。二人吹。二人歌。一人口爲絃。一人舟抵源八渡。諸少年理裝上岸而去。衆皆拜謝。翁一鼎言不啻其帖然。命奏其伎。使吾輩取娛樂。黃檗僧大成住天王寺東淨壽院。詩書皆有一種風致。以其唐種也。趙翁亦以唐種。其與大成話。皆用唐音。時大笑。余問翁何笑。曰。吾謂禪師如此笨伯。得非飮大牢。僧蘭洲名淨芳。住九島院。善詩有風趣。時招吾社。酒茶吟咏。爲方外之遊。子琴尤親善。蘭洲常改竄其舊稿爲樂。

子琴未嘗閱本朝人詩文集。麗王好讀之。舉其疵瑕議之。亦一癖。麗王常檢其家集。數數改竄。殆不留原稿。詩曰小草。文曰遠志。僧大幻及見蛻岩。曰翁嘗語余。其所作五律晴雉鳴春野一首。自謂幾乎唐矣。其他皆前後安排。補湊成篇。獨此詩自起句任口道出。乃爾渾成。

界府益田高豐卿字孟文。稱天兵衛。睢軒亦及見蛻岩。年少不多記。一二傳說。或可聽也。睢軒遊長崎再三。善道高君秉熊斐事。睢軒書與詩皆有趣。畫學之於熊氏。真率超凡。猶其人也。後余遇之江戶一再。

睢軒事趙翁尤謹。枸杞園本其莊地。以與趙翁居之。梧栖河合逢原敬亭田中謙亦同事趙翁者。余未寓浪華也。嘗有事到界府信宿。驛亭鄰人導余過睢軒聚星軒。時趙翁自浪華來寓焉。諸子亦來會。酒間余賦詩呈翁。唱酬累篇。於是睢軒大悅。懇余留宿。趙翁已歸。余在聚星軒一月許。余識趙翁。自睢軒始。時余年十九歲。

萱君譽家有蛻岩復君譽父考澗俗牘。長四尺許。論詩極精。且勸其自改轍勉勵諄諄。又言及荒木定堅。商山父也。稱吾右衛門。君譽曰。蛻翁家父年齒相如。足以見其矍鑠。此書蓋二老八十二三歲時也。猶且力學相勸若此。尤可敬重。

荒木定堅池田人。善詩。有雞肋集。三子。兄爲商山。其弟住浪華。務講經義。早死。末弟善書。雞肋集乃其所書。精緻可玩。

商山嗜詩睨一世。鮮所許可。獨與子琴善。又能評隲本朝諸作家。論辨精確。編著昭代詩紀二十餘卷。東雅五六卷。皆非全書。

商山簡默寡言。性不飲酒。詩酒之會。如向隅者。獨與子琴言。時出冷語。且涉滑稽。滿坐一噱。而商山復默。衆愛之而不厭。

北海詩社有一富兒。時其會而來請曰。敝族在南都者。近開壽宴。諸公幸賜詩章。何榮如之。乃治具水陸駢陳。南都美酒。世所珍賞。亦在焉。衆酣暢吟詠。商山詩先成。富兒拜謝惟謹。及傳觀

則平常會集之詩也。子琴叱曰。盍爲壽章。商山恬然曰。吾不嫻爲龜鶴之祝。子琴颺言曰。壽章不成。當吐羹酒。商山曰。恕之恕之。一坐哄然。遂無一人爲壽詞。

世記赤穂四十六士之事。皆云其謀深密。其未舉事。無有一人知之。大坂中井鳥山二家有所傳。大異焉。中井世貫龍野。龍野士人井口某。猪兵衛。在江戶邸。其僮請曰。頃聞赤穂遺臣將襲吉良氏。期在某日。僕請奉郎君往觀。期之夕。井口獨寐邸樓。比曉聞舍外有聲。井口意是僮所言。闢窓而瞰。乃數十人穿防火裝爲隊而過。余聞此信疑相半。後聞鳥崧岳話。崧岳越前人。其僕文助者在越前時。爲國老本多氏丁夫。役于江戶邸在本所。與吉良氏爲鄰。鄰邸之變。發卒警衛。文助亦乘鄣執燈至曉。時方月夜。望吉良氏門外。觀者填塗。乃知中井家所傳信然。世之記者徒揣想爾。然當日事情如彼。而吉良氏未嘗慙知。亦可以見人心矣。

浪華有二翁者。鹽屋伊兵衛。家傳天野屋利兵衛事狀。惜其泯滅。欲待其人以文之。乃托之獨嘯菴。永富風。獨嘯菴托之平賀先生。平賀先生托之余。始立傳上梓。事詳先生跋。

其畧云。刻既成。千秋自浪華致書曰。昨醫生松田元龍者。引一商客來。執謁請見曰。聞先生爲藝州平賀君有所著。嘗托之平賀君者。僕即是也。因曰。自托之以來。無日不思之。旣而自慰謂。獨嘯所友。則其人必不背於約。苟留之天地間足矣。我得觀之與否天也。今乃得布天下以遂素願。非平賀君之信與先生義氣贊成之切。焉能至此。余得此報亦大喜。千秋之見。猶余

見之。其人稱鹽屋伊兵衛。在浪華綠橋畔。以賣糕餅爲業。安永丙申正月平賀晉民識。

余著利兵衛傳。其名不詳。西村孟清好善之人也。乃寅緣就其故里籍得其名押。始詳其名直之。非孟清則弗得也。

伊兵衛極賤極貧。而涉獵和漢之書。時來與余言。語氣慷慨。而其論以六經吾心注脚爲主。余爲辨王學之弊。乃自省悟不復言也。浪華市井之人往往弄文墨。而其詩文多足誦讀。其他以風流好事名世者。亦不少。如兼葭木世肅者其選也。獨若伊兵衛。博洽有識。我罕見之。京及江戶市井之人。則恐不能如浪華之文矣。

春水遺稿別錄卷一終

春水遺稿別錄卷二

藝藩

賴惟完千秋著

男

襄

校

在津紀事下

余移僑居于江戶港。時三月望後。因號春水南軒。

余僑居半架水。無庭砌。架船版方二丈許。偏廁之際。有二尺地植藤。向陽繁衍。着花最早。點

茶家識之。多來乞者。剪裁不吝。隨需與之。西村某盆栽海棠遺余。每春着花甚繁。伊丹某遺

綵石數斗。敷之船版上。使裝點相稱。肥後數士厚名愨號孤山一稱茂二郎來訪。有海棠花下挑銀燭。不識春

宵數刻過之句。自餘藤與海棠。入詩甚多。

士厚嗜詩。務論聲律。誦僧大潮唐音說。以鼓其說。竹山掉頭議其謬。因舉唐詩無數。引據的確。

士厚嘆服。士厚蓋未知其有律兆之著也。伊太素實稱伊形庄助亦肥後人。善詩。遇人輒說古韻

其說奇甚。履軒舉古書成句。以折其說。太素亦未知其有古韻之著也。

江村君錫名綬。號北海。稱傳左衛門。著日本詩選。人人爭求見收。湖人建達夫其故人也。君錫乃寄書徵詩。達夫

附詩稿數卷曰。毋以故舊為也。子誠封還此稿。曰無一可收矣。則吾知子之選之為選也。君

錫為余語之。稱其言不凡。達夫名孝銑。稱小龜寬吾。日野侯臣。

平紀宗 名義綱。稱平井齊次。棄官歸湖村。後住逢坂。其居靠山闢園。廣袤數十畝。其師建達夫命名幽暢。紀宗分其大小景勝十數。余爲之記。請同社分詠之。京畿諸名士。亦各有寄題。

紀宗時自湖上來。十數日寓余及子琴伯鳳。詩酒留連。脩其舊好也。

紀宗容止音吐。猶有宦途氣習。而韻趣藹然。江村翁開壽筵於圓山。文士畢至。紀宗亦在焉。會散吾社一隊聯步而歸。紀宗曰。京人爲詩塗抹狼藉。不似吾社腹稿。今日某生在吾傍。搦管沈吟。吾儉視之。初書一春字。頃焉乃書風字。是春風二字。且兩次作之也。一行驟然。

紀宗以余爲知己。托其遺稿。因抄錄授其弟。稱清左衛門。住江州平井村。爲名族云。乃併余園記上梓。曰滄池詩抄。遺

余數部。余寄諸嚴島文庫及佛通寺。以擬名山藏。

紀宗內兄弟井上某 伊織 仕一顯侯。威焰無比。人人寅緣納款。紀宗絕交不通書信。人以爲愚。紀宗不顧也。後侯黜免。某亦見斥。人始稱紀宗先見。

有士人托余寫一書。余會書生數人既竣。其人謝以紗穀二段。余直齋詣士德。請以換金。士德曰。盍留一段以爲外套。余曰。余舊有二套。不須副也。所以換金。將買書也。士德乃命管家權

其價。得金若干。遂携一生一省書上京。投告松潤甫。脩稱巖一郎。津和野藩士。僑居。潤甫亦周旋。得購朱子語類。大學衍義補二部。腰纏有數不得如意。語類有朱旋塗乙。衍義補較見行本差小。殘敗殊甚。余爲鳴門書春靄居士碑。鳴門來謝。會書賈菊宗至。開其包袱。有古文品外錄。鳴門取而閱之。乃

舉全帙置之余前曰。聊爲潤筆。余時二十三歲。自謂乳臭兒受之。極爲過當。乃辭之。鳴門曰。子弟第讀之。置而去。後數旬。夜携往返之。又曰。已贈子矣。寓諸我庫。時來取可也。鳴門已沒。不知其書安在。今猶記其內一二名文。僅約錢神論之類。爾時余徒知吾筆之不足潤。而不知故人資吾學也。可受不受。誠爲可悔。

有鴻池菟道者。以風流知名。嘗傾家產。更新開酒肆。其酒本係伊丹釀。名曰山井。菟道更名男山。用其故里名云。男山大售。釀主遂欲運諸江戶。海運之酒。每桶以藁席包之。烙印名號於包上。菟道請諸善書者十餘家。余一日過鳴門。鳴門使余書男山二字。余始不知何由。率然應之。菟道寄諸釀主。使其擇而用之。獨取余所書爲印。後男山大售於江戶矣。菟道因鳴門饋一苞桶爲潤筆。余東諸友。取數十日醉。諸酷戶傳聞之。以余書爲吉兆。來乞者接踵。余盡辭之。書賈菊宗父子。共善置奇書僻帙。不知其安取。一富漢學作文。問之於平澤元愷。字悌侯。初姓山內。名震。稱左門。後住江戶。稱茂助。後改五助。元愷曰。作文取喻爲要。有喻林者。宜買而讀之。富漢多方覓之不得。菊宗聞之。不日持喻林來。其價連城。

菊宗嘗持文衡山真跡七律十首。詣一友人。友人色飛。而以其直太高不肯取。宗亦不減一錢持去。二三年友人猶眷戀不厝。伴人問其書尙在否。曰尙在。遂出原價買之。宗徐收其金。哂曰。非君癡想誰購之者。人皆疾其黠。然亦有他賈所不爲。貧生如余。借觀不慳。得廣見聞。享賜多

春水遺稿別錄卷二

二一

矣。後宗患腫不起。余賦詩吊之云。鄴架惠車誰置春。春風看過許相親。如何閱市王家子。已失
 燃藜天祿神。幾處巧賺志爾黠。三年久借識吾貧。浪華城裡多書戶。不引空囊盡食人。
 菊宗持承清館印譜來售。著者明張灝。字夷令。罔羅一代名手。變化百出。一快書也。子琴君章皆欲
 得之。士德不論價收之。世肅嘗得蘇氏印畧為拱壁。士德亦藏一部。
 世肅藏蘇氏印畧二卷。原高芙蓉。名彪。字瑞皮。號芙蓉。以近藤齋宮行。住京師。後任水戶支封某侯。物。芙蓉篆法。一洗世習。一以蘇
 氏為範也。

曾谷仲介。之唯。字畏聖。京人。學篆刻於孺皮。人稱曰芙蓉影子。

虛舟善刻細字。嘗以方寸石刻獨樂園記。末署年月日姓名。印記皆具。後又刻後赤壁賦。亦方寸印。
 可稱絕伎。然世無觀之之目也。

虛舟又摹蘭亭帖。一面各豎一寸六七分。橫七八分。其字畫疎密肥瘦。宛然惟肖。前有米芾印。後有
 緝熙殿寶記。古今多縮本。未嘗有如斯刻之縮之又縮也。

眉公。姓赤松。名彪。以水野尾正珉行。善醫。書詩皆巧。篆刻與芙蓉子琴駢美。而人莫之知也。貧甚。後徙南都而
 死。赤松子方每誚其懶慢不能為生。一日會志尹宅。子方曰。吾子不見虛舟乎。以其刻使母坐
 食。吾子之刻。即不及虛舟。而蓋少自奮焉。眉公素簡默。至聞此語。則徐曰。以僕之刻比虛
 舟輩乎。子方顧問志尹如何。志尹曰。唯千秋亦以為勝虛舟。子方愕然。已而曰。苟然。吾益不

得不讓誚也。伎足以潤其身矣。而狼狽至此。眉公嘿然不復言。子方愛眉公如親眷然。
 隱岐子遠實行之士。其事義母。有八所不及者。余相知數年。因諭以過行不率之義。子遠釋然。益
 致歡洽。甚德余也。

子遠為大坂府騎士。騎士威權甚著。余嘗與志尹遊伏見桃山。子遠聞之請從。吾二人飄然上船。船
 抵京橋。子遠旅裝埃于水泚。舟師見之。畏敬尤甚。子遠還僕從而上船。篷底晤語。翌朝抵伏見。
 登桃山遊觀竟日。子遠事吾二人。如奴隸然。歸後來謝云。疇昔之遊。小子曠歲樂事也。蓋子遠
 為其權勢所拘。僅離大坂。始暢其志也。

中井氏常造一棺。以給同社死喪者。以其直復造焉。常備無闕。篠田氏亦有此備。二家敦厚之風。
 就此可見。

中井整菴。名誠之。字叔貴。稱忠藏。竹山父。墓在誓願寺。攻石府下無雙。

五井蘭洲。名純禎。字子祥。稱藤九郎。墓在實相寺。竹山為銘。少壯之作。文辭尤巧。彫鐫亦精。而石質不良。一

面泐剝。數字已泯。故墓碣擇石為先。擇工次之。

崧岳遺命不立碑碣。夫妻合葬。栽梅二株為標。

西村孟清沒。崧岳以知舊故。為經紀葬事。以銅板記其姓名行事。置于棺上。

北山壽安前輩名醫。墓在太平寺。以石造不動佛像。高丈餘。以代墓。不復記姓名。其裔正藏自號

七僧居士。為過書船吏。以好事知名。與芙蓉大雅諸名流交遊。人知有七僧之稱。而不知有正藏之名也。多藏古墨帖。余時借覽。多所取正。嘗往江戶。及見南郭諸人。善語先輩之事。太宰德夫自號駿臺。室先生亦住駿臺。人以駿臺呼之。太宰因後改春臺云。楨夫曰。七僧所藏物物說其來由。使人厭聽。若小本唐詩選。乃謂是吾到江戶時購之。袖以訪南郭者。得不珍乎。每品夸說。皆此類也。

坊間墨帖往往有七僧居士圖書記印。友人意其貧困粥之。以詰居士。居士曰。是皆近日書賈來售者。余必印之。有余印記。其價有加。友人失笑。

七僧與楨夫。皆年老親狎相戲。七僧目楨夫為君子。曰其人斷腥。家無妻妾。能忍人欲如此。非君子而何。

七僧宅在田養橋北畔。招余觀天神會。美濃後藤定六以夙患見稱。時寓楨夫。楨夫托余携去同觀。余性不喜雜選。寓浪華已七年。觀天神會。是日為始。七僧謂余曰。都下神佛之會。香火奔波。君子必往。若今日早僦單艇。且擇篙手解事者。在遊舸往來之間。隨便上下。游觀極樂。每歲為常。所以不來於此。後聞栗翁說云。東屋亦有此癖。

楨夫戲著菅會金湯。蓋擬陳眉公書畫金湯也。

世肅好事著名。雅多藝能。凡書畫篆刻。及諸機巧。莫不染指。人最推其畫及物產之學。余則欽其

讀書善得要領。凡舶來異籍。其新舊同異。增損出入之類。歷歷暗記。隨問響應。

世肅堂號兼葭。其扁字堂記寄題詩。請諸四方。為數十卷。客至出視。使人厭劬。今不知何在。

世肅對客。妻妾不去其側。皆解事者。書帙器玩。願指取辨。其遊長崎。亦携妻妾。

世肅數修其居宅。益狹隘。世肅常言。文徵明停雲館名著。客來問何在。徵明云。吾館自圖書上來。是可徵也。因嘗作兼葭堂圖。規模宏濶。皆屬假設。

世肅藏顯微鏡。油屋某集工人摹造之。精妙倍原製。履軒不猥出。聞是事。乃携虛舟詣油屋觀之。為作之記。油屋容貌動作彷彿世肅。人目稱狗兼葭。蓋如馬蓼野葡萄之謂也。履軒記亦佳文也。

浪華俗崇茶儀。居宅之制。莫不由此。庭砌樹石。故意為野趣。養苔滿地。谷松某家。庭砌之間。薜蘿蔓衍。不見寸地。其母愛之。旦夕撫養云。其上墻壁則有之。引而布地。唯吾家為然。

士德浴城崎溫泉。余與楨夫追往。楨夫先歸。余與士德歷觀天橋諸勝。在天橋樹下獲一拳石。高二寸餘。橫四寸許。袖之上轎。摩沙愛玩。諸杠夫小憩。相與私語。今日吾轎差重。意從者私載。道費一二百錢也。余意謂杠夫之肩如權衡然。不可罔也。

嘗為士德合卿。東章稱左介。所拉。偕遊高野山。往反數日。值雨數數。山行之艱。今猶不忘。還入界府。憩于趙翁枸杞園而歸。尚患脚痛累日。凡與士德同遊。未有如此行困頓者。作五古數首。

做朱子山北紀行。嵌注地名月日。今亡其稿。詩不足惜也。使其在亦一臥遊具耳。

浪華津村道場曰北御堂。本願法主之來也。其徒極力承奉。嘗更造其舍。扁額榜聯及障壁繪畫。皆以府下人為之。亦其徒所營也。於是乞余書其堂扁。辭之。紹介者曰。子且往觀焉。余從之。廣大輪奐。良眩人目。然竟不書。北海聞之笑曰。辭之無往觀焉已。既往觀焉。寧可辭乎。

某歲秋聞家君罹病。即日治裝歸省。時金春氏東來。張散樂於難波。是日演道成寺。所謂一代能也。傾都麈集。士德亦以夙好往觀。忽聞余行。不畢觀而來別。其交誼如此。

趙翁豪宕。亦感士德交誼。一日翁有急。借金士德。士德惠然倍其數而應之。翁曰。人之許借。或減其數。猶有德色。士德則倍之。

某歲舉一男子。余思家君晚暮抱孫之歡。不容緩也。乃治裝挈妻孥而西。士德來別曰。路資有乏。吾當相濟。余辭曰。既具矣。士德訣去。頃之僮僕齎小包袱來。發之磁杯一而已。曰以為膝下之獻。無復一語。其真率多此類也。

士德家有二巨艦。時屬八月。請余與醫人松井立專。賞月其柁樓。午後乘小舸而下。到安治川。梯而上艦。又上柁樓。樓上容二十餘席。潮應月出。柁樓益高。堤上之家。亦在目下。余作二歌。有森家千石遮洋舟。繫在浪華第一洲句。全詩不記。

鳴門要余與子琴。泛舟鮎渠納涼。子琴曰。吾二人行當老矣。鳴門老健。必躋八十。則僕七十。而千秋可六十。鳴門八十。不足奇也。僕欲觀千秋六十。當如何也。相與一笑。而子琴未五十而沒。

鳴門尋逝。亦未七十。余今過六十矣。玉碎瓦全。能無慨然。

余初無家累。歲除少事。而門生知舊所遺酒肉頗豐。例招子琴酣暢饒歲。子琴曰。終日為窮鬼所訶責。此會可以一洗焉。吟酌每至天明。後竹山亦携永介。早野辨之。字士譽。輩來會。及有妻兒。猶不廢此例。

余與竹山履軒遊京。過飲中村兩峯。有則字君夷。稱長二郎。中井氏門下生。有一塾生侍酒膳。履軒出令。唐詩云。田

禽出麥飛。又驚蟬出樹飛。請傲之以出飛為令。主客競發。愈出愈新。流麗奇崛。無所不有。

最後余戲云。僕有一妙句。恐諸君絕倒。塾生注酒滿盞。余云。蝙蝠出村飛。滿坐哄堂。塾生慚

然。徐云。咄咄逼人。主客益戰然。履軒為余指塾生曰。渠播人也。嘗寓吾家。有客必張兩袖

伺視。因目稱蝙蝠。兄今詠之故云。余始知有觸。叩頭謝。主客益興發。引滿不已。

高莊二郎流蕩落魄。傭書為生。戲草源語梯。及入江昌喜。稱平二郎。著述。皆係高生書。初書法俗陋。

余家藏渡邊素平書一軸。借與摸之。書法一變。常稱余德。

高生放誕。動造無根說話。甚則筆之。稍傳播世間。人或就質之。生笑不與理。更出一話悅人。余

亦數見騙。後覺之。語人曰。高生之造說話。猶人之見客供茶果耳。衆以為信然。生身服垢弊。

家無妻妾。善事老父母。承其歡心。

小石元俊善醫大雉。老母沒後。撤家移京。因請暫寓余塾。讀通鑑綱目。蓋欲詳六朝也。時就余

質問。味爽必起。拂拭几案。正坐讀書琅琅。夜初更後必就寢。是為脩養云。然見余飲食起臥有常課。以為不能及。

岡本尙卿亦論修養。與元俊兄弟交。皆質行之士也。為余切脉按腹。稱修養有素曰。宜矣其日夕教授子弟不勸。永夜看書不眠也。余曰。是非用力修養也。吾離親遠遊。常以不使親聞吾有微恙為志爾。

筑前龜井道載。名魯。號南溪。有事于京。過大坂寓元俊。以其故交也。携森某。二人髮髮不收蓬蓬然。道載無刀。森佩一刀。言貌疎宕。上京竣事。又寓元俊。將上船而歸。森出遊不在。小石塾生曰。日來森君數謂。玆地樂土。不欲歸鄉。或恐為留止之計也。道載曰。否。腰纏托在渠手。渠欲留必返。腰纏而後為其計。夜果歸來。與俱上船。

道載弟僧宗暉。曇榮號幻菴。在京師大德寺罹病。來寓元俊求治。時時過余晤語移時。暉善書善詩。獨嘯菴慕在藏驚菴。題額宗暉書。

三宅春樓。正誼字稱才二郎。以交碩菴遺草。裝為二行李。起臥自隨。備水火也。一日留讀人宴飲。文房諸器移諸南窓下。其夜亡之。竹山輩極力搜索。竟亡所得。蓋偷兒常伺以為寶貨也。藏弄周密。反啓盜心。亦可戒也。

春樓以其叔父觀瀾所著中興鑒言。手書上梓。楷法可觀。亦父遺命云。春樓竹山成一社。書法皆自

碩菴來。

吾塾生一夜自外歸。報上町失火。時志尹居上町。余拉二三塾生走救之。至則其火甚遠。志尹孤坐在燈下攤書。乃先遣還塾生。與論中庸首章章圖。夜半喫茶而歸。

古賀淳風佐賀藩人。遊京師。初從福小車。後入西依成齋之門。最後寓大坂。志尹妹婿福田某。為僦屋僑居。使與志尹近。亦為志尹謀也。余亦屢往討論疑義。剪燈或到天明。

淳風患脚疾。弟子金丸東作亦肥前人。為之看護。憂苦不安寢食。淳風覺之。或伴怒以安其意。東作猶不能措。時就余與志尹謀醫治之方。不使淳風知之也。曰吾所以云云。為師為國為學也。即代死亦所不辭。其悃悃如斯。亦可見淳風為一人。

履軒與人話。及民間孝子順孫事狀。動容稱贊。如癡如愚。不似平生豪邁。竹山亦然。而履軒為甚。淳風每厭之。

上野人高山正之。字仲繩。稱彥九郎。來寓河伯潛家。與吾輩游。好稱述好人行實。籍籍不已。且曰。履軒兄弟極口稱人之順良。其人可重。又有不必稱揚之者。其人有識亦可重也。吾與四方名士會。每有所驗焉。

友人門生每送余歸省。至於郭外。一歲子琴。專介。藤井元知。至大仁村麥飯亭而別。曰歸日如可期。當復迎于此。余曰。以吾常例。則大率為某日。乃別。已而東還。沿途知舊要遮者。隨宜辭去。抵

明石乃念。略可踐約。抵尼崎。巽渡津法盡日而輟。余迫暮呼而渡之。入大仁則夜矣。過麥飯亭。訪問。果有數客。即子琴專介及二三塾生也。驚而相賀。子琴勸其所齋酒。送返僑居。亦一快事。歸省往反。歷訪知舊。一宵之話。瀝瀉肝膈。亦自可樂。又持陳諸膝下。資其承歡焉。若岡元齡兄弟。西山士雅。吉田孔夷。或一過之。若菅禮卿。往反必過之。以其家在官道也。但士雅留余尤甚。以余匆忙。目為流民。余則往反有期。不得緩一日。士雅乃從容率其門生送余數里。別後就其近地遊覽山水。留連數日。或經旬餘云。

士雅住備中鴨方村。鄉先生也。徒弟歲進。其堂扁至樂居。塾曰欽塾。徒弟之於余輩。執禮甚嚴。其教法使然。而士雅諧謔。深夜談笑。旁若無人。徒弟侍側唯謹。

一歲宿禮卿宅。鄉人門生就余索書者頗多。里正江原某持帛一匹來手裂之。長短隨求。須臾盡之。爾後人目江原曰裂帛里正。余每過菅氏。輒來侍杯勺。轟飲善談。亦快男子也。為禮卿從妹夫。

三原宇都宮士龍聞余歸省在鄉。拏舟招余。至則共登妙正寺。命其僚佐。逼余索詩。士龍嘗索寄題于四方。既成數卷。而獨欠余作故爾。河伯潛嘗登覽有作。余又詩成。士龍覽之。欣然曰。諸作

舉冥搜之言耳。今得子與伯潛而實其景物。何幸如之。士龍處事。重厚無比。又解事且多風趣。吉田孔夷。名敬之。稱喜平次。之鄉曰御田。去浪華西七八里。造酒三萬石。余歸省往反宿其家。嘗有詩云。將吾鰓鼠腹。飲君萬石酒。凡詩人語及酒。動稱千斛萬斛。如孔夷家。乃為稱其實耳。伊

丹池田及御田近村沿海之地。與孔夷抗者不少云。孔夷多能善書。又通醫治。多蓄書籍。留客借觀。

余之在津也。有二壯遊。皆從家君也。其一望嶽也。余嘗知家君有是志久矣。庚寅之歲。乃決策使弟千齡西歸迎至。乃奉而東。快觀麗斑。遂觀江戶。又詣日光松島。歸路出出羽。觀象瀉。由

越後取岐蘇路而歸于浪華。家君猶有意於京。又東上京。留六旬餘。是在新鞆坊時事。其二觀花也。戊戌之歲。復催家君曰。芳野之遊。豈無意乎。千齡在鄉。從史贊成。復奉而來。為三月十

又九日。嘗慮芳野花期易失。周爰諮詢。結伴理裝亦已粗定。越廿又一日發大坂。同行者江田楨夫為首。余兄弟及小山仲鷗。翔稱作兵衛雨森太卿。稱政太郎安田駿仲。迪稱金平宇都宮清藏輩二十餘

人。宿當麻。翌傳芳野。則花開十分矣。余以獲天幸。歡抃不自勝。其翌歷觀諸勝。千齡有記。是在江戶港時事。

天王寺太子堂後。有櫻一樹。與芳野同候。吾芳野之行。雨森良璟。政太郎父豫為余言。此以為消息。果不差矣。

楨夫此行亦携一行囊。納書二三冊。時出翻閱。曰諸君以為殺風景。是不然也。留憩之間。無此則無聊。是亦一遊具也。其書則和歌和文之策。及宋版隋書禮儀志。往年但馬之行亦然。楨夫實書淫也。宜其博綜無比。

家君至自芳野。又携千齡上京。與小澤翁周旋樂甚。召余同觀葵祀。余唯而起。又携門生二三輩往觀。其明又奉家君遊琵琶湖。登石山寺。歸憩茶肆。雨遂宿。命買湖魚湖蜆酌酒待晴。又與家君謀。請平紀宗。以詩代東。紀宗乘舟而來。途會雨歇。度余必已起行。留棹石場以俟。乃俱與尋辛崎孤松。欲就宿焉。有禁。又抵山王祠前宿焉。其明欲之堅田。紀宗以無勝趣止之。因歷山王三井高觀音。復過紀宗幽暢園而歸京。既夜矣。是遊亦不可忘者。

余之於燕爾。竹山自爲永人。以崇岳翁齒德。且有家君之托也。時爲十一月。余冬日不爐已久。子原今井重憲稱佐兵衛爲家人送一爐。於此始有爐。有女僕。是時竹山作吞吞頌。都下傳誦。子原與余鄰近。嗜詩。與子琴善。亦密交也。

新迎翌年。家君携千齡來。話及往時京遊之事。余揣其意留千齡看塾。夫妻奉家君上京。館定。直訪小澤翁。翁亦欣迎。余時齋小行厨。翁取而啓之。以相獻酬。家君師事翁。翁則朋友待之。翁先曲肱而臥。相得甚驩。

翁供菹菜。所謂加茂酸菹。又供筍。醍醐產也。皆可珍。翁時病鼻。曰久矣吾之鼻也。人皆知口之知味。而不知鼻之知味也。今吾不唯鼻於諸香臭之物。他食物亦如嚼蠟然。

翁酒間詠歌。賜吾妻且諭。句句有來由。口誦古歌爲典故。凡數十首。余因謂吾黨之於詩。亦當然。而不能半於翁矣。

家君遊京數回。能記四郊景勝。意永觀堂藤花當開。命杠夫赴之。果盛開矣。乃令吾妻操杖。與花相較。花長尺餘。

余解褐後。復抵浪華。將取妻孥而西。過趙翁枸杞園。翁年七十。有近作五絕二十首。有客輒書扇遺之。余亦得一扇。其詩簡率可愛。過片翁。翁呼酒留酌。引筆硯草文數百言。如蠶抽絲。乃送余序也。曰腹稿未熟。而見子始下筆。以相質耳。約其淨寫。未果而翁沒。爲余終身之憾。今所藏酒間稿本也。

又過士德。士德出白紙素縑之表裝者長短數軸。索余揮酒。所索余舊詩。士德朗朗上口。案頭黃帙風吹散。不是人間可解書。題城東村寺也。野竹三竿石三尺。高標見得主人心。過東合卿宅詩也。新綠樹陰多鳥語。晴簷案上讀唐詩。同宿天心居詩也。其他數首。皆其同遊所得。士德惜余睽離。別後覽以自慰云。余亦索士德書其舊詩。士德固辭。強請。乃書白詩二三幅貽余。數處錢席詩文。哀成二冊。時自展玩。亦以自慰。猶士德之意也。子琴長律結末。有自茲浪華浦。雲樹日長吁句。因名浦雲編。

父執春水先生釋褐其藩。既三十年矣。追念往事。錄爲二卷。投示於弼。弼受讀卒業。其事皆先生曾在此地。所與諸子相徵逐嬉遊。而弼常日所耳於家君也。其文雋拔澹雅。一時風人騷士之盛。可以想見焉。浪華之俗。今異於古。有學者飾於邊幅。有財者務於薰灼。溫藉真率之風。

蔑如。 弼生也晚。 不能逮寶曆明和間而觀其盛也。 然其巍然於今。 東有精里先生。 西有先生。 書郵相次。 絡繹如織。 家君雖老矣。 尙能孜孜訓誘不倦。 弼不肖奉以從事。 其或免乎爲今浪華之人邪。 今浪華之人。 亦有觀此冊以興起。 則其庶幾乎爲古浪華之俗耳。 乃別寫一本。 且題其後。 以示同志。 浪華篠弼謹識。

春水遺稿別錄卷二終

先儒三子評

服部栗齋

吾邦近世伊洛ノ學ヲ唱フル。 其大ナルモノ。 道春也。 闇齋也。 惕齋也。 鳩巢也。 他ハ論スルニ足ラズ。 道春ハ疎淺駁雜ヲ免レズ。 惕齋ハヤ、深密ニシテ醇粹也。 操守ノ篤實。 モットモ他ニ優レリ。 シカレモ道上廓大ノ見ニ乏ク。 或人議シテ名物度数ノ學トスル。 其所謂ナキニアラズ。 鳩巢ハヤ、光明發越シテ。 文筆大ニ勝レリ。 シカレモ醇粹ノトコロ。 惕齋ニ不如モノアリ。 三子ミナ短長アリテ。 畢竟ミナ程朱ノ眞腴ヲ嚼得ザルカ。 闇齋ノ流。 神道ノ是非ハ姑ク是ヲ論セズ。 詞章ヲ卑ムノ甚シキヨリ。 讀書龜漏ノコト多ク。 博雜ヲ厭フヨリ。 考索寡陋ノ病アリ。 見所ヲ尙ブヨリ。 或高ニスギ。 風節ヲ厲スヨリ。 偏迫ニ流ル、弊多ク。 世儒ノ議免レカタキモノアリ。 シカレモ高明卓越。 思フニ亦程朱ノ眞ニ逼ル所。 他流ノ髣髴スル所ニアラズ。 是其門ニ入ルニ非レハ知リカタキモノアリ。 究竟闇齋ノ長處ハ見カタク。 其短處ハ見ヤスシ。 仲室二子ノ長處ハ見安ク。 其短處ハ見カタシ。 世ノ學者。 作聖ノ志ナク。 儒者ト云ヘバ。 詞章モナクテナラズ。 書モヨクヲサメネバナラズ。 博物ニモナケレバナラズト云所ヨリ。 先輩ヲ皮相シテ。 マツ表向業ノ欠ナキヲトリ。 多クハ惕齋ニ之カザレバ。 鳩巢ニ之ク。 餘義ナシト云ヘシ。 ソレヨリ闇齋ヲ貶スルヲ甚シク。 其取ルヘキ所尤大ナルモノ有ルヲ看破セズ。 惜ム

ベシ。鳩巢ノ徒一轉シテ詞章雜學トナリ。惕齋ノ流サスガ操守ヲ失ハザレトモ。多クハ委靡シテ振ハズ。ヒトリ其徒ノミニモアラズ。惕齋ノ錢屋ミセラ出サレ。鳩巢ノ公儀ニ乞テ誓紙カ、ル、類、ツヒニ人ノ非議ヲ免レズ。豈卓越ノ見ナキヨリ。植立ノ節タハム所アルニ非スヤ。大抵闇齋ノ見所。惕齋ノ篤實該綜。鳩巢ノ文章。其長所也。聖トナルノ志ナクンバ已マン。若シ聖トナルノ志アツテ。三ノ者ヲトランニ。イツレ重ク。イツレ輕ク。孔子ヲシテ品格ヲ評隲セシメンニ。イツレヲ高トシ。イツレヲ卑トセン。試ニ是モ思フベシ。サレバ學者力足ラバ。三者ノ長ヲコトク、ク奄有兼併スベシ。モシ力不足ンバ。輕重本末ヲ辨ヘ。先後スルトコロヲ失ハズシテ可ナルベシ。鳩巢ニ學ベル人。京ニ入り尙齋ニ從ヒ。後東歸シテ鳩巢ヲ婦女子ノ學トセント。又或人。闇齋ノ欠ル所多キハ。眞見ヨリ出ヅ。他儒ノ全キニ似ルハ。俗見ヨリ出ヅト云ヒシト。過論トハ云フベケレドモ。ヤ、所謂ナキニアラザルカ。癸卯後（隱居放言卷一）

儒林評

廣瀨淡窓著

近世儒林ノ人物ハ。先哲叢談ニ畧ボ載セタリ。然レモ其品目ヲナスニ至リテハ。其人ノ心ニアリ。且叢談ノノスル所モ僅々タリ。余固ヨリ廣ク他書ヲ考フルコト能ハズ。但シ邦儒ノ著述ナド少々讀ミテ。其人ノ一斑ヲ知ル所アリ。今口ニマカセテ其見ル處ヲ述フルノミ。

二百年來ノ儒風。大畧三變セリ。國初ニ惺窩羅山ノ諸公。初テ佛ヲ出テ、儒ニ歸シ。儒術ヲ中興セリ。本邦儒道ノ中興ニシテ。又程朱學ノ開祖タリ。之ニ次テ藤樹。闇齋。了介。益軒。錦里ノ諸賢競ヒ起リ。其人ト學ト不同アリト雖モ。大抵性理ニ本ツキ。躬行ヲ主トセリ。其志ス所。專ラ佛法ヲ擯斥シテ。聖人ノ道ヲ明スニアリ。是一變ナリ。伊仁齋復古說ヲ唱フルニ及ンデ。物徂徠之ニ次デ起ル。其說務メテ宋儒ノ古ヲ失ヘルコトヲ辨ジテ。古義ヲ再興スルニアリ。於是儒流ノ争ヒ盛ンニナリ。佛ヲ排スルニ遑アラズ。其學訓話ヲ精クシ。詩文ヲ主トシテ。躬行ヲ務メズ。是再變ナリ。其後伊物ノ說盛ニシテ。程朱ノ學衰ヘシニ。儒者多ク浮華放蕩ニ流レテ。躬行ヲ務ムル者ナシ。於是世人之ヲ厭ヒテ。再ビ宋學ニ歸スル者多シ。然レモ宋學ノ弊モ亦鑒ミザルニ非ズ。故ニ程朱伊物ノ說ニ於テ。互ニ取捨スル處アリ。世之ヲ折衷學ト稱ス。當時高名ノ儒者。十二七八折衷學ナリ。

其行狀中頃ノ放蕩ニコリテ。少ク收斂ニ赴ケリ。然レモ其利ニ走ルコト極テ甚ダシ。是三變ナリ。凡二百年來儒風人氣。大畧如此。此後如何變ズベキヤ豫知シガタシ。

百二三十年以前ノ儒者ハ。其人物皆豪傑ナリ。然レモ文辭ハ至テ拙クシテ。漢土ニハ傳ヘ難シ。百年來ハ。詩文ノ道ハ大ニ闊ケタリ。然レモ其人物ハ皆遙ニオトリテ。其以前ノ人ニ比スベキニ非ズ。是天運人事自然ノ勢ナルベシ。

羅山ハ聖道ニ功アル人ナリ。其時縉紳家ノ外ハ。書ヲ讀ムコト絶テ無カリシヲ。羅山初テ處士ノ身分トシテ講説ヲ開キ。且ツ四書五經ノ類。皆訓點ヲ加ヘテ和刻トナシ。天下ニ流敷セリ。又國家草創ノ砌ナルニ。其制度羅山ノ議ニ出ルコト多キコト。叔孫通ノ漢ニ於ケルガ如シ。一代ノ儒宗トナリテ。子孫繁昌スルコト。天其功ニ報ユル所ナルベシ。

闇齋ハ實ニ豪傑ノ士ナリ。程朱ノ學ニ明ナルコト。此人ヲ第一トスル由聞キ及ベリ。晚年神道ニ入りテ又一家ヲナセリ。當時神道ヲ講シテ佛法ニ抗衡スル者アルハ。皆闇齋ガ餘澤ナリ。其人ト爲リヲ見ルニ。剛毅強梁。物ニ撓ムコトナシ。如此人ニ非レバ。一宗ヲ興スコト能ハズ。之ヲ佛者ニ比スレバ。日蓮ナドニ庶幾カラシカ。

藤樹ハ聖人ト稱セシ程ノ人ナレバ。其德行ハ申ス迄モナシ。余其著述ヲ見タルコトナシ。定メテ英氣ヲ以テ勝レタル人ナルベシ。其盜ニ遇ヒシ時ノコトナド。其一端ヲ見ルベキナリ。又門下熊澤ノ如キ英雄ヲ生ズ。愈以テ藤樹ノ人トナリヲ推ハカル可シ。天若シ之ニ年ヲ假サバ。イカナル事業アラシモ度リ難シ。僅ニ不惑ヲ過キテ歿セシコト惜イカナ。

蕃山ハ儒林第一ノ英雄ナルベシ。徂徠ガ古今ヲ睥睨スルヲ以テスラ。猶且熊澤ガ知ト稱シ。又人才ハ熊澤ト稱セリ。徂徠春臺ガ經濟ノ説ハ。熊澤ニ本ツクコト多キ由。先儒モ之ヲ云ヘリ。余其集義和書及ビ外書ノ二ツヲ見ルニ。如何ニモ經濟ニ深キ人ナリ。此人陽明學ヲ好メリ。其人才モ我國ノ陽明ナルベシ。

益軒ハ博學ヲ以テ勝レタル人ナリ。其行事ハ。闇齋ナドノ如キ嚴勵ナルコトハナクシテ。温良寛厚ノ好人物ト見エタリ。其著述ヲ讀ムニ。其志專ラ世人ヲ利益スルニアリ。名譽ヲ好ミ門戸ヲ張ルノ存念ナシ。實ニ儒林中ノ長者ナリ。但シ和文ノ著述ハヨシ。漢文ハ拙シ。慎思錄。大疑錄ノ類。往々顛倒錯亂アルコトヲ免レズ。余益軒ガ和文ノ著述數部ヲ見タリ。盡ク我身ニ切ナルコトノミ。予嘗テ豊ノ儒者三浦某ト談話セシニ。余ガ曰ハク。近世儒者ノ著述。千歳ノ後ニ傳ハリテ滅セザルモノハ何人ナラント思ヒ玉フヤ。三浦ガ曰ク。余ガ見ル處ヲ以テセバ。一ノ貝原先生アルノミ。其他ハ余ガ知ル處ニ非ズト。此言モ亦見ル處アルニ似タリ。

仁齋ハ度量人ニ踰エタル大人ナリ。徂徠春臺皆其德行ヲ稱セリ。本英氣餘リアル人ナレトモ。之ヲ養フテ温厚ナラシムル者ナラント。春臺ガ紫芝園漫筆ニ評セリ。如何ニモ其通リナルベシ。其復古學

ヲ唱フルコト。見識ノ勝レタルヲ知ルベシ。春臺ガ評ニ。徂徠ガ才學ハ仁齋ニ勝レテ。識ニ至リテハ仁齋ニ讓ルト云ヘリ。當時古學ヲナスモノ。浮華放蕩ニ流ル、ハ。皆徂徠ガ末流ノ弊ナリ。仁齋ノ預ルコトニ非ズ。仁齋東涯ノ德行ノ如キハ。程朱ニ配シテ愧ルコトナシ。然レモ古學ノ天下ニ流行シテ。朱學ヲ壓倒スル程ニ至リシハ。徂徠ノ功多シ。仁齋ノ功ハ少ナシ。叢談ニ。藤樹仁齋各盜難ニ遇ヒシ事ヲ記セリ。都テ斯様ノ事柄ハ。作り話シ多キ者ナリ。此二ツモ大方コシラヘ事ナルベシ。然レモ亦二子ノ學風心術ノ同シカラザル所ヲ知リテ作りタルモノナリ。藤樹ハ心學ナリ。仁齋ハ古學ナリ。心學ハ心ノ安ズル處ヲ行フ。天下ヲモ大ナリトセズ。一身ヲモ小ナリトセズ。唯理ノアル處。即チ心ノ安ズル處ナリ。士庶人タルモノ。盜賊ニ遇ヒテ衣類貨財ヲ奪ハレタランニハ。天子ノ天下ヲ人ニ奪ハレ。諸侯ノ國ヲ人ニ攻メ取ラレタルト同シ事ナリ。羞惡ノ心アル者ノ忍フベキコトニ非ズ。是藤樹ノ刀ヲ拔テ戰フ所以ナリ。古學ノ見ヲ以テ云ハバ。道ハ聖人天下ヲ治ムル爲ニ設ケタマヒシナリ。天下國家ハ大ニシテ。一身ハ小ナリ。若シ一身ノ節ヲ伸ベントシテ。一家ノ存亡ヲ顧ミズ。一家ヲ正サントシテ。國天下ノ利害ヲ顧ミザルハ。權ヲ知ラザルナリ。是仁齋ガ衣ヲ脱シテ賊ニ與フル所以ナリ。是ヲ以テ。人ノ行事ハ見識ニ本ツク事ヲ知ルベシ。假合作リ話ニセヨ。心ヲ付置クベキコトナリ。

錦里ノ行狀ハ。詳シク知ラズ。門下ニ英才多キコト。此人ヲ以テ第一トス。其弟子兩伯陽ガ橋窓茶話

ニモ。錦里ヲ評シテ。其英才ヲ教育スルノ一事ヲ舉ゲ。其他ハ予ガ敢テ知ル所ニ非ズト云ヘリ。非常ノ英雄ニシテ。其光ヲ包ミタル人ナルベシ。

錦里ノ門人多シト雖モ。白石ヲ以テ第一トス。白石ハ經濟ニ長セリ。蕃山ト何レカ勝レリヤ知リ難シ。詩文ノ才ハ白石遙ニ勝レリ。然レモコレハ時代ノ前後ニヨレリ。是ヲ以テ其ノ人ノ優劣トハシガタシ。獨嘯菴近世ニ四人ノ豪傑アルコトヲ論シテ。蕃山ヲアゲテ。白石ニ及ボサズ。白石ハ英邁ヲ以テ勝レタル人ナリ。其度量器局ハ蕃山ヨリモ小ナルカト覺ユルナリ。

白石ガ文席ニ仕フルノ日淺クシテ。制作ノ志ヲ遂グルコト能ハザリシハ。實ニ儒林ノ遺憾ナリ。獨リ儒林ノミナラズ。我邦ノ遺憾ナリ。但シ國運ノ長短ハ。ソレニ預ルコトニ非ズ。若シ老子ノ徒ヲシテ之ヲ論ゼシメバ。白石ノ用ヒラレザルハ邦ノ幸トヤ云フベキ。德席ノ白石ヲ黜ケ。又徂徠ノ說ヲ見タマヒテモ取用ヒタマハザルハ。漢文ノ賈誼ヲ用ヒザリシト相類セリ。

徂徠ハ吾邦ニテ古今一人ナリ。當時日本ノ文學大ニ開ケシハ。此人ノ功多キニ居レリ。其毒ヲ天下ニ流スコトモ亦甚多シ。或人ノ評ニ。功首罪魁ト云ヘリ。實ニ然ルコトナルベシ。

徂徠ノ吾邦ニ出ルコト。是當代ノ霸氣鬱勃ノ中ヨリ蒸出セルモノナリ。當時儒ニ徂徠アリ。佛ニ鳳潭アリ。孰レモ其雄氣壯膽。古今ニ超越シテ。聖ヲ呵シ哲ヲ罵リ。佛ヲ廢シ祖ヲ無イカシロニシ。器然トシテ天地ノ間ニ獨立ス。其行事氣象。皆是霸氣ナリ。國家霸氣ノ盛ナルニ非ズンバ。安ゾ能ク

如此人ヲ生センヤ。其長短得失ノ如キハ。識者ヨリ之ヲ見レバ。深ク論スルコトヲ待タズシテ明カナリ。

徂徠ハ文學ニ長シタル人ナリ。大人ヲ動かスコトハ。其所長ニ非ズト覺ユルナリ。新造ノ柳澤侯ニ仕ヘタレト。上大夫ニナリシニモ非ズ。文學ノ任ニ具ハルノミ。憲廟ニ咫尺シ。又德廟ニモ謁スレト。アゲ用ヒラル、ニ至ラズ。若シ蕃山白石ヲシテ其地ニ居ラシメバ。今少シ趣向モ有ルベキカト思ハル。

東涯ノ學問ハ。仁齋ニ數倍セリ。其人ハ篤行ナレト。度量ハ父ニ劣レルコト。先輩モ之ヲ評シタリ。伊藤學ヲナスモノ。常ニ東涯ヲ以テ徂徠ニ方ベテ。其優劣ヲ評ス。是仁齋ノ學問徂徠ニ及バザルコトヲ知リテ。ワザト其一等下ナル物ヲ出シテ。却テ勝ヲ取ラン爲ナルベシ。東涯ノ學問ハ。徂徠ヨリモ行キト、キタル處アルベシ。其人オト文章ハ。同日ノ論ニ非スト思ハル。

春臺ハ方正端嚴ノ人ナリ。學問ハ徂徠ニ本ツキタレト。其人ハ絶テ相似ズ。程伊川ノ人トナリニ近キ様ニ思ハル。南郭ハ獨嘯菴カ評ニ。徂門ノ高人ナリト云ヘリ。此評極メテ確當ナリ。其名一時ニ顯赫ナレト。人ト是非ヲ爭ハズ。優遊世ヲ弄ブノ氣象アル人ナリ。徂門ノ人物ハ。周南ヲ以テ第一トスルコト。龜井昭陽翁ノ評ナリ。其人外温厚ニシテ内ニ英氣アリ。

古文辭ナドモ格別信向スル様子ナク。見識アリテ一概ニ師說ニ惑ハサレヌ處アリ。

予徂徠集ヲ讀ンデ。周南ガ其師ニ忠アルコトヲ知ル。徂徠集中。諸國ノ求メニ應ジテ。亭記壽序ノ類多ク作りタル有レト。防長ノ人ノ爲ニセシハ一モナシ。有ルハ皆乞ニ應ジテ道ヲ論ジタル文ノミナリ。是周南ガ中ニ在テ紹介ヲナス故ナリ。周南ガ如キモノハ。能ク其師ヲ尊ブト云フベシ。人ノ弟子タル者ハ。周南ヲ以テ模範トスベキナリ。

室鳩巢。雨芳洲ハ皆木門ノ秀ニシテ。白石ニ次クモノナリ。其行狀ハ叢談ニ載セタリ。予鳩巢ノ駿臺雜話。小説。芳洲ノ橋窓茶話。たはれ草ヲ讀ム。何レモ面白キモノナリ。芳洲ハ佛老ノ學ヲモ尊信シタル人ナリ。又和學ニモ通ゼリ。白石ト不和ニナリシハ。朝鮮聘使ノ事ヨリ起レルナルベシ。對州ハ朝鮮ノ臣下同様ノ國ナリ。白石新議ヲ始メテ聘使ヲ抑ユ。對州ニテハ大ニ迷惑スルコトナリ。予芳洲ノ白石ト應復ノ書翰ヲ見テ。其事情ヲ悟レリ。

蛻巖。南海。玉山。何レモ詩ニ長シタル人ナリ。蛻巖ハ極メテ磊落ノ人ナリ。南海ハ如何ナル人ニヤ有リシ知ラズ。玉山モ。其ノ詩ヲ讀ンデ其人ヲ思フニ。極メテ洒々落落ノ人ト見エタリ。水斯立ハ極メテ英才ナリ。短折惜ムベシ。予村井琴山ノ話ニ聞ケリ。水斯立。秋玉山。瀧鶴臺。西依成齋。皆同年ニテ有リシトナリ。斯立ヲシテ歳ヲ得ルコト三子ト同ジカラシメバ。其造ル處測ルベカラズ。惜イカナ。

山縣大貳ハ豪傑ナリ。予其柳子新論ヲ讀ンデ。彼ガ爲人ヲ知ル。惜イカナ才有テ識ナク。自ラ禍ヲ招キタリ。俗間ニ大貳ガ始末ヲ書キタル物語アリ。一向タハイモ無キモノナリ。大貳ガコトヲ少シモ知ラズシテ作りタルモノト思ハル。

我海西九州ノ文學ハ。肥前ノ僧大潮ヨリ開ケタルコト多シ。大潮ハ徂徠ヨリ少キコト十三歳。徂徠ノ弟子ニハ有ラネドモ。其交親シク。學問詩文。徂徠ノ説ニヨリテ修セシ人ナリ。徂徠没後。其餘聲天下ヲ動カス。海西ノ人其風ヲキイテ慕ヒ。皆大潮ニ從ヒテ其説ヲ學ビシナリ。我郷ニ僧法蘭。寶月アリ。文辭ヲ能クセリ。皆大潮ノ弟子ナリ。予ガ幼時從遊セリ。筑ノ南溟先生。肥ノ高君秉。黃道符。皆大潮ノ弟子ナリ。

我豊後ニテ先輩ノ高名ナルハ。杵築ノ三浦安貞ナリ。安貞ハ條理學ト云フコトヲ自ラ始メタリ。宋儒窮理ノ説ニ似テ少シク異ナリ。生涯仕ヘズ。弟子ヲ教授スルコトヲ事トセリ。從遊ノ者。筑ノ龜井ト相比セリ。海西ニテ四方ヨリ生徒ノ多ク聚ルコトアルハ。三浦龜井ノ二先生ヨリ始レリ。三浦ノ門人ニ。脇義一郎ト云フ儒者アリ。予ガ童幼ノ時。書信往復セシコトアリ。即チ日出ノ帆足愚亭ガ師ナリ。帆足モ窮理ヲ好ミ。又生徒ヲ教授スルコト。三浦ノ學脈ヨリ傳ル處アリト覺ユ。安貞ノ子修齡。予嘗テ相見ス。杵築侯ニ仕ヘタリ。コレモヨキ儒者ナリ。今ハ歿セリ。

原田東岳ハ何方ノ生レニヤ。日出ニ居リ。又中津ニモ住セシ人ナリ。是亦豊ノ一名儒ナリ。即直次ガ

祖ナリ。

予十歳始メテ書ヲ讀ミ。師友ニ從ヒテ當時ノ高名ナル人アマタ聞及ベリ。京ニテハ皆川淇園。龍草廬。江村北海。浪華ニテハ片山忠藏。中井竹山。履軒。東都ニテハ紀平洲。古屋昔陽。柴野栗山。塚田多門。山陽ニテハ西山拙齋。賴春水。杏坪。海西ニテハ藪孤山。龜井南溟。コレ幼耳ノ熟スル處ナリ。其中ニテ草廬北海ナドハ。已ニ古人ニテアリシヤモ知ラズ。其後追々ト高名ノ聞及ベリ。四方ニ遊ビテ。其人ヲ問ハント思ヒシニ。多病ニシテ志ヲ遂ゲズ。此中ニテ面ノアタリ相見シハ。龜南溟一人ノミナリ。

予十歳バカリノ比。當世儒者ノ角力ヅケト云フ者ヲ見タリ。委シキコトハ覺エズ。但シ東西ノ大關ハ。片山ト古屋トナリ。孤山西ノ關脇ナリ。龜井ハ第八人目ニテ。其對ハ草廬ニテ有リシコトヲ彷彿ト覺エタリ。

古屋ハ肥後ノ人ナリ。東都ニ住セリ。經義ニハ詳シカリシ由聞及ベリ。其兄ヲ鼎ト云フ。極メテ手厚キ學者ナリシヨシ。此人ハ肥後ニ住セリ。隱君子ニテ。名ヲ求メズ。昔陽ノ説ハ。多ク其兄ニ本ヅキシトナリ。予十四五歳ノ時肥ニ遊ビテ。鼎ノ門ニ入ラント欲シ。人ニ托シテ其事ヲ申シ入レタリシガ。終ニ遂ケザリシナリ。

片山ハ宇士新ノ弟子ナリ。只今ニテハ生時高名ナルホドニハ知ル人ナシ。此人著述ヲ好マズトカ聞及

べリ。ソレ故身後ノ名ナキナルベシ。
龍草廬ハ叢談ノ續編ニ出デタリ。餘リ評判宜シカラヌ趣ナリ。

北海ハ日本詩選ヲ作りタルニヨリテ。其名傳播ス。但シ其時ニ金ヲ取りテ生キタルモノノ詩ヲ多ク入
レシト云フ評判アリシ。

皆川ハ京師ニテハ仁齋東涯以後ノ大儒ナルベシ。學風ハ甚ダ奇僻ナルヨシ。或人ノ評ニ曰ク。日本ニ
テ學問ノ博洽精密ナルコトハ。東涯。春臺。淇園ノ三先生ナリト。果シテ然ルヤ。

皆川ハ行狀放蕩ナル人ナリ。東都ノ山本北山モ亦然リ。予ガ友原士萌。人ノ説ヲアゲテ曰ク。皆川ノ
放達ハ。世ヲ弄ブヨリ出テタリ。謝安ガ東山ニ妓ヲ携ヘシ類ナリ。北山ニ至リテハ。其中ニ於テ利
ヲ射ルノ謀ヲナス。同日ニシテ語ル可ラズ。

龜南溟ハ甚皆川ヲ喜ビズ。嘗テ予ニ語リテ云ハレケルハ。柴野ハ赤松滄洲ニ比スレバ。十等モ劣リタ
ル人ト覺ユ。皆川ハ又柴野ガ十等モ下ナリト云ハレシナリ。昭陽ノ云。竹山ハ宋學ナレト。其學術
文章。實ニ矯々タルモノナリ。皆川ガ著述ハ。一向□ラヌコト多シ。竹山ガ比ニアラズト。

竹山ハ非微逸史等ノ書ヲ著シ。其名天下ニ傳ヘタリ。但シ非微ハ壯年ノ作ニテ。晩年ニハ大ニ悔ヒシ
トカ承ハル。此人容貌雄偉ニシテ。膽氣豪強ナリ。嘗テ力士ノ谷風ト枕ビキセシコトアリト聞及ベ
リ。是ハ非微ヲ著ハセシ處ニヨリテ附會セシ話ナルベシ。龜井父子ハ。宋學ノ人ヲ惡ムコト。幾ト

讐ノ如シ。然レモ竹山ヲバ毎々豪傑ト稱セラレシヲ聞及ベリ。

履軒ハ一家ノ學ニテ。竹山トハ異ナリト見エタリ。經義ハ極メテ精シカリシトナリ。隱君子ニシテ世
人ニ交ラズ。然レモ豪勇ナル氣象ノ人ナリ。龜昭陽東游シテ歸ラレシ時。予ニ語テ曰ク。東遊中兩
才子ヲ見タリ。賴子成。韓聯玉ナリ。豪傑二人ヲ見ル。中井履軒。村上太和ナリト。

紀平洲ハ大家ト思ハル。尾州ノ人ニ遇テ其事ヲ問ヒシニ。幾ト聖人ノ様ニ申シタリ。此人大人ニ交ル
ノ道ニ長ジタル人ト見エ。上杉侯ハ師ノ禮ヲ以テ事ヘ。大ニ尊敬アリシナリ。其國ニモ請待アリシ
ガ。講釋ナド聞キタマフコトハ嘗テナク。但政事ノ尋ネノミナリシトナリ。其他ノ諸侯ニモ重ク用
ヒラレタリ。近來ニテ儒者ノ諸侯ニ重ゼラル、事。此人ヨリ盛ナリトカ聞及ベリ。筑後ノ樺島石梁。
其高足ノ弟子ナリ。極メテ師ノ風アリ。但シ具牀而微ナルベシ。

平洲ハ人才ヲ愛シ後進ヲ誘引スル人ナリ。予十餘歲ノ時。當縣ノ吏人。予ガ七絶ヲ書キシヲ數葉。東
都ノ女壻ニヨセシタリ。其人平洲ノ門人ナリ。或時平洲其家ニ遊ビテ。予ガ書キシ者ヲ見テ甚ダ
嘆賞シ。才子ナリト申サレシ由。其人ヨリ岳父ノ方ヘ申シ遣ハシ。若シ入門ノ望ミアラバ紹介セン
ト云ヘリ。予ガ父龍門ノ一賞ヲ得タルコトヲ喜ビ。親友ト其事ヲ議セラレシニ。三百里外ノ人ニ入
門シテモ。名アリテ實ナキ事ナリト申スニゾ。相止メタリ。其後筑ニ遊ビシ比。龜井昭陽ノ話ニ。
平洲予ガ文ヲ見テ大ニ賞シ。我七十ノ歲始メテ如此ノ人才ヲ見ルト云ハレタル由。東都ノ友人ヨリ

申シコシタリトノ話ナリ。彼此ヲ以テ考フルニ。杜少陵・韓昌黎ナドガ如ク。人ノ美ヲ稱スルコトヲ好ム人ト思ハル。

塚田多門ハ早ク聞及ビタル人故。餘程ノ先輩カト思ヒシニ。數年前マデモ存命ニテアリシナリ。少クシテ高名ナル人ト思ハル。是其著述ノ早ク開板セシ故ナルベシ。經書ニ多ク手ニ入レラレタリ。今時ニハ格別ムカヌ學風ナルベシ。

柴栗山ハ宋學ノ中興ナリ。東都葦園ノ學風盛ニシテ。朱學衰ヘシニ。白河侯政ヲナシタマフニ及ンデ。宋學ヲ再興ノ志アリ。首トシテ栗山ヲ聘シテ博士トシ。其他岡田。尾藤。古賀ノ諸子。追々ニ登用セラレテ。今ニ及ンデ五十年。當時葦園ノ餘風。幾ンド地ヲ拂フニ至ル者ハ。栗山ノ力ナリトゾ。

栗山ハ極メテ人才ヲ愛シ。東坡ニ似タル人ナリト。樺石梁ガ評ナリ。當時ノ儒流。泰山北斗ノ如クニ尊ビシ事。公朝ノ博士ト云フノミニハアルマジ。定メテ德望アル人ナルベシ。但シ異學ノ書ヲ悉ク焚滅セントセラレシハ如何ニヤ。東坡ニ似タル人ノ様ニハ思ハル。

西山拙齋ノ人トナリハ。委シク知ラズ。栗山ト親シカリシ人ナリ。程朱ヲ厚ク信ジタリ。篤實ノ君子ナルベシ。龜南溟嘗テ其師獨嘯菴ガ子永富充國ガ放蕩ニシテ教ニ從ハザルヲ憂ヘテ。之ヲ西山ニ托セラレシニ。西山善ク之ヲ教育シテ規矩ニ從ハシメタリ。南溟其事ニ感ジテ。後ニ昭陽ヲシテ行キテ見エシメラレシニ。旅行ニテ遇ハズ。其後龜井父子ヨリ書信ヲ通シタレト。答書ナカリシトゾ。

春水ハ童子ノ時ヨリ書ヲ善クスルヲ以テ。其名甚ダ高シ。其弟春風。杏坪。亦皆書ヲ善クス。或人ノ

話ニ。春水ハ學問ハ格別ノ事ハナシ。但書ニ因テ名高シ。其人物ハ智術アリテ。當世ニ合スル人ナリト云ヘリ。始ハ古學ナリシガ。後ハ宋學ニ變ズ。晚年儒官ヨリ登リテ。國政ノ重キニ預レリ。何レ智者ト見エタリ。逢ヒシ人ノ話ニ聞クニ。風韻ハナキ人ナリト云ヘリ。

藪孤山ハ其父ヲ震菴ト稱シテ。徂徠ト親シク交リシ人ナリ。然レドモ程朱學ニテアリシナリ。孤山家學ヲツギ。少クシテ秋玉山ニ代リテ肥後ノ教授トナル。玉山ノ規約ヲ改メテ。專ラ朱學ニヨリテ教法ヲ立テシナリ。龜南溟ニハ十歳ホドモ長ゼシ人ナルベシ。南溟之ニ兄トシ事フト云ヘリ。當時藪

龜井ヲ以テ海西ノ兩名家トスルコト。兒女子マデモ知レリ。大川滄洲ガ栗山ニ與フル書ニ。朱子派ニテ文辭アルモノハ。足下ト藪士厚ト二人ナリト云ヘリ。予ガ友藤左仲ガ云ク。從兄永充國。藪柴野ニ先生ニ歷事ス。學問ハ柴野勝リ。詩文ハ藪勝レリト評セシナリ。

龜南溟ハ予ガ十歳バカリノ時。家君行キテ學バシムルノ志アリシカ所。予幼年ナルヲ以テ。他邦ニ遣ハシ難ク。人ニ托シテ豫メ入門ノ事ヲ約セラレシニ。彼方ヨリ承允セラレタリ。幾クモ無クシテ。南溟官ノ譴ヲ蒙リ蟄居トナリ。門下ニ旅客ヲ置ク事ヲ許サレズ。於是行キテ學ブコト暫ク止ム。後予ガ十六歳ノ時。竟ニ筑ニ遊ビ。假リニ筑人トナリテ。其息昭陽ノ門ニ入りテ。初メテ南溟ニ謁スルコトヲ得タリ。時ニ南溟年五十五歳ナリ。閑居シテ教授ノ事ハ。皆昭陽ニ委ネラレタリ。然レト

予ハ常ニ其側ニ咫尺シテ教ヲ受ケタリ。予筑ニ在ルコト前後三年ニシテ大歸ス。其後モ數度行キテ問ヒシナリ。南溟沒スル年七十二。今年丙申マデ二十三年ナリ。

南溟二十一歳ノ時。朝鮮聘使來リ。暫ク筑ニ止レリ。南溟行キテ見エ。之ト贈答筆話ス。韓使大ニ其才ヲ奇トシ。夫ヨリ東都ニ至ル迄。途中ニテ諸儒ト筆話スル時。必ズ筑ニ龜道載アルヲ知レリヤト問フ。是ニヨリテ其名一時ニ天下ニ傳播セリ。其筆話ヲ録セシ書ヲ決々餘響ト云フヨシ。予ハ其書ヲ見ズ。

南溟ノ父ヲ聽因ト云フ。筑前姪濱ノ人ナリ。少キ時游俠ヲ好ミ。飲博無賴ノ徒ニ交リシガ。忽然トシテ節ヲ改メ。書ヲ讀ミテ醫トナレリ。聽因豪邁不羈ノ性ナル故。儒ニ於テハ徂徠ヲ喜ビ。醫ニ於テハ良山ヲ喜ブ。於是肥前ノ僧大潮。徂徠ノ說ヲ傳ヘタリト聞キテ。南溟幼少ノ時ヨリ之ニ從ヒテ儒ヲ學バシム。又長門ノ獨嘯菴ニ從ヒテ醫ヲ學バシム。獨嘯菴ハ良山ノ弟子山東洋ノ門人ナリ。南溟中年筑ニ仕ヘテ儒官トナリ。竟ニ醫業ヲ棄テタリ。後其嫡子昭陽ヲシテ儒業ヲツガシメ。二男大壯。三男大年ニハ。皆醫ヲ學バシメテ。祖業ヲ繼ガシメタリ。南溟昭陽。皆徂徠ヲ尊敬スルコト甚ダシ。是聽因ノ志ヲツグ爲ナリトゾ。

南溟ハ氣象英邁ニシテ。眼光人ヲ射ル人ナリ。尊貴ノ人ニ屈セズ。直言シテ媚ブルコトナシ。是ヲ以テ人ニ忌マレ。罪ヲ得テ塾居スルコト二十餘年ニシテ終レリ。晩年終ニ心疾ヲ發スルニ至ル。是ヲ

以テ譏ヲ世ニ招ケリ。小石元俊ハ其同門ノ友ナリ。予ガ友藤大春。嘗テ予ニ謂テ曰ク。我京師ニ在リテ小石先生ニ侍リシ時。先生側ノ人ニ語リテ申シケルハ。道載ヲ當時ノ京師ノ儒者ナド、同様ニ思フ可ラズ。實ニ猛虎ノ如クナル者ナリト云ハレシトゾ。其少年ノ時ノ豪氣思フベシ。

南溟ハ極テ人才ヲ愛スル人ナリ。尤モ教育ニ長ゼリ。是ヲ以テ門下ニ有名ノ士多ク出デタリ。江上茶洲。山口白賁。原古處。牧園第山。小國士高國。鳥京山。永富充國等ガ如キ。其著シキモノナリ。其他郷國ニ於テ。名譽ヲ占ムルモノ。勝ゲテ數フ可ラズ。但シ南溟ノ人トナリ細行ヲ檢セズ。門下モ亦跡弛ノ士多ク。其末流ニ至リテハ。益々放逸無賴ニシテ。身ヲ亡ボシ家ヲ覆スノ徒モ少ナカラズ。是ヲ以テ毀リヲ當世ニ得。人其學ヲ言フ事ヲ忌ムニ至ル。惜イカナ。

南溟ハ詩文ニ長ズル人ナリ。學問ハ餘リ博キコトナシ。經義ハ論語語由ト云フ著述アリ。一旦上木シタレト。筑ノ官府ヨリ指シサハリテ。世上ニ流行スルコトヲ許サズ。其學問ハ徂徠ヨリ出デ。一家ヲナセリ。大略徂徠ノ說ノ已甚シキモノヲ削リテ。中道ニ適シタルモノナリ。其自ラ稱スルハ。朱物二子ノ域ヲ超エテ。直ニ古道ニ泝ルト云フ。然レト世人ハ之ヲ稱シテ。徂徠學ト云ヘリ。

南溟ノ男三人。長子昱。字ハ元鳳。月窟ト號ス。又空石ト號ス。又昭陽ト號ス。又天山遜者ト號ス。父ノ業ヲ嗣イデ儒トナル。沒スル年六十四。次男昇字ハ大壯。雲來ト號ス。醫トナル。詩ヲ善クセリ。歿スル年五十一。三男萬字ハ大年。天地房ト號ス。醫トナル。亦詩ヲ善クセリ。歿スル年三

十六。南溟弟アリ。禪僧トナル。名ハ宗暉。字ハ曇榮。崇福寺ノ長老トナル。詩及ビ書ヲ善クス。世人南溟兄弟並ニ三子ヲ並セテ。之ヲ五龜ト稱ス。

昭陽ハ行狀謹嚴ナル人ナリ。父ノ喪ニ居ルコト三年。全ク古禮ニヨリテ省畧スル處ナシ。終身娼妓ノ類ニ近ヅカズ。幾ンド二色ナキニ近シ。其氣象ハ豪爽ニシテ慷慨ナリ。頗ル父ノ風アリ。内行ニ至リテハ。大ニ異ナリ。

昭陽ノ學風ハ。專ラ父ノ說ヲ主張セリ。其經術文章ハ。父ノ上ニ出ルコト遠シ。然レモ名譽ハ父ノ半ニ及ブコト能ハズ。或人之ヲ評シテ曰ハク。昭陽ノ學問ハ父ニ勝リ。度量ハ及バズ。猶東涯ノ仁齋ニ於ケルガ如シト。

昭陽ハ著述極メテ多シ。壯年ヨリ戸ヲ閉ヂテ閑居シ。カヲ著述ニ用フルコト。數十年一日ノ如シ。世儒ト交ヲ通ゼズ。亦俗人ヲ見ルコトヲ喜ビズ。是其名譽少キ故ナリ。門人ヲ育スルコトハ。父ノ風ニ似タリ。然レモ人才ノ多ク出デタルコトハ及バザルナリ。

大壯。大年。皆磊落ノ奇才ニシテ。東野。金華ノ風ニ似タリ。若之ヲ都會ノ地ニ置キタラバ。名ヲ天下ニ傳フベキモノナルニ。已ニ其地ヲ得ズ。亦其時ヲ得ズ。名譽アリト雖モ。遠キニ及ブコト能ハズ。惜イカナ。

曇榮ハ僧大典ノ弟子ナリ。其詩龜井一派ノ風ニ類セズ。中晚唐ノ風ヲ學ビテ。清新ノ趣アリ。此人モ

其名其實ニ及バズ。惜ムベシ。

赤松滄洲。佐野少進。村瀬栲亭。皆洛ノ名家ナリ。予十四歲ノ時。洛人藤左仲ガ話ニテ始テ其名ヲ聞ケリ。滄洲ハ皆川・柴野ト至テ親シク。京ニテ社ヲ結ビ。三百社ト號セシナリ。三子ノ中。學問ハ滄洲尤モ劣リタレモ。人物ハ豪傑ニテアリシトナリ。栗山ガ異學ノ書ヲ燒クノ議ヲ立テシ時。滄洲書ヲ贈リテ之ヲ難ジ。其義竟ニ止メリ。此事世上ニ名高キ事タリ。龜井父子ハ當世ノ學者ニテ推許スル處ナシ。獨リ滄洲ヲバ賞セリ。滄洲ノ子ヲ蘭室ト號ス。學問ハ其父ニ勝リシトナリ。予蘭室ガ子宏平ニ筑ニ於テ相見シタリ。之モ儒トナリテ祖業ヲツギシ人ナリ。少進ハ經學ニ精シカリシトナリ。栲亭ハ藝苑日抄ト云フ書ヲ著ハシテ。世上ニ傳播ス。予未ダ之ヲ見ズ。

浪華ノ篠崎長兵衛ノ名。亦藤左仲ガ話ニテ始テキク。書ニ長ジタル人ナルヨシ。即小竹ガ父ナリ。

柴野彦助。尾藤良助。岡田清助ノ三博士。當時東都ニテ三助ト稱セシヨシ。江戸ノ人ノ句ニ。「三助ニ六百石ハ過キタモノ」ト嘲リシトゾ。三博士各二百石ヲ領スル故ニ。カク云ヒシナリ。柴野尤モ名高シ。尾藤之ニ次グ。岡田ハ後ニ代官ニ轉セラレタリ。三子皆白川侯執政ノ時。朱學ヲ再興センガ爲ニ。新ニ擢デラレタリ。但シ岡田ハ旗本ノ家ニ生レンシ人ナリ。三子ノ後。古賀彌助ハ肥前ヨリ召出サレタリ。古賀ノ名モ。栗山ニ次デ顯ハレタリ。即チ今ノ博士侗菴先生ノ父ナリ。關惠一ハ童耳ニハ喧シク其名ヲ聞キタリシガ。其後ハ寂トシテ音ナシ。人物ハ餘リ宜シカラズト或人

ノ語リシ。如何ニヤ。
 北山ノ名ハ。余ガ十四五歳ノ時。始テ聞キシガ。其後追々ト盛ニナリ。海内ニ轟キシナリ。其一時ニ於テ氣勢ノ盛ナル。護園以後此人ナルベシ。東都ニ於テ。栗山朱學ヲ唱ヘ。護園ノ學ヲ擯斥セシカ也。經義ノ上ノミナリ。詩文ヨリシテ一切ノ風ヲ變革セシコトハ。皆北山ガ力ナリトゾ。其人トナリハ。世ニ毀リヲ得ルコト多シ。其門派ノ弊風。人ニ厭ハル、コト。護園ニ數倍セリ。蓋シ北山ガ徂徠ヲ擯セシハ。袁中郎ガ王李ヲ擯スルニ似タリ。所謂一解一解ヨリモ下ルモノナリ。
 中川寬齋ノ名ハ。北山ニ後レテ聞ケリ。此人詩ニ長ゼリ。京師ニテ宋躰ヲ唱フル者。僧六如ニ始マリ。東都ニテハ此人ニ始マル。江湖社ヲ結ブ。五山。詩佛。皆其社中ノ人ナリ。予未ダ其詩集ヲ見ズ。大田錦城ハ予三十餘ノ時。其名ヲ聞ケリ。已ニシテ名聲大ニ震フ。此人博聞強記ニシテ。文辭ヲ善クスルコト。一時抗衡スルモノナカリシヨシナリ。其行狀ニ至リテハ。毀リヲ得ルコト。北山ヨリモ甚ダシ。兒謙。樺島石梁ニ遇ヒシ時。樺梁ノ話ニ。某ハ數十年東都ニ居タレ也。天幸アリテ北山。錦城ナドニハ。途中ニテモ行逢ハザリシト語リシトゾ。
 菅茶山ハ予歳十五ニシテ始テ其人アル事ヲ聞ケリ。宋躰ノ詩ヲ好ムニヨリテ。其七絶ノ愛看大月抱松升ト云フ詩ヲ聞ケリ。其砌ハ誠ニ異端邪法ノ如クニ思ヘリ。其後筑ニ遊ビテ。時々其名ヲ聞ケ也。彼方ニテモ專ラ嘲リ毀ルコトノミナリシガ。或時曇榮禪師ノ話ニ。太仲ハ詩ハ名家ナリト申サレシ

ヲ聞キ。始テ一向ニ棄ツベキ者ニ非ズト思ヘリ。予二十二三歳ニ及ビテ。始テ宋人ノ詩ヲ讀ミ。其趣ヲ愛スルニ由テ。愈々宋ヲ學ブモノ、邪路ニ非ザルコトヲ知ル。二十七歳ニ至リテ。近作數十首ヲ録シテ。人ニ托シテ茶山ニ正ヲ乞ヘリ。爾セシヨリ後。書信應復スルコト二十年。予ガ四十六歳ノ時ニ當リテ。兒謙ヲシテ行キテ謁セシム。其年茶山没セラレタリ。年八十ナリ。
 茶山ノ詩ノ躰ハ。六如ニ本ヅケルモノナリ。六如ガ詩ハ。景多クシテ情少ナク。濃密ニ過ギタリ。始メ喜ブベシト雖モ。後ニ厭ヒ易シ。茶山ハ情景相半シ。濃淡中ヲ得タリ。故ニ久シクシテ厭ハザルコトヲ覺ユ。但シ其初年ノ作ハ。風骨森然タリ。中年ノ後ハ。爛熟ニ過ギテ。其格大ニ下レリ。人其二稿三稿ヲ初稿ヨリモ勝レリト云フハ。詩ヲ知ラザル者ノ論ナリ。
 茶山ハ賓客ヲ善遇スル人ナリ。謙讓ニシテ禮アリ。又善ク度外ノ士ヲモ容レタリ。是ヲ以テ後進慕尙スル者多ク。老而名益高ク。末年ニ至リテハ。海内不知モノナシ。詩ヲ以テ顯レタレ也。外ニ所蘊アル人ト見エタリ。冬日影ト云フ著述アリテ。經濟ヲ論ゼシヨシ。予未ダ其書ヲ見ズ。
 賴子成ハ予ガ始メテ詩稿ヲ茶山ニ寄呈セシ時。子成茶山ノ塾ニアリ。同シク評語ヲ加ヘタリ。之ニ因テ詩ヲ以テ贈答ス。後十餘年ニシテ。子成海西ニ遊ビ。日田ニ來リテ。初テ相見ヲ遂ゲタリ。長子コト二歳ナリ。後京師ニ卒ス。年五十三ナリ。予ガ眼中ニ見ル處。此人ヨリ才アルハナシト覺ユ。子成ハ才ヲ恃ミテ傲慢ナリ。貪ツテ禮ナシ。故ニ少年ノ時。其國ニ容レラル、コト能ハズシテ出亡セ

ニリ。海西ニ遊ビシ時ハ、年四十二近カリシモ、至ル處人ニ惡マレ。其地ヲ逐ハレザルハナシ。京師ニ於テモ、徧ク毀リヲ得タル由ナリ。然レモ其才ハ實ニ秀逸ナリ。總シテ漢土ニハ文人ニ如此人多シ。人以テ常ナリトシテ怪マズ。我國ノ風俗ハ質朴ニシテ、書ヲ讀ム者ヲ見テハ、必ズ之ヲ責ムルニ行義ヲ以テス。故ニ此ノ如キ人。世ニ容レラル、コト能ハズ。惜ムベシ。

肥後ニ伊太素ト云フ詩人アリ。世ニ稱スル長風萬里一帆還ノ作者ナリ。李白ヲ學ンデ飄逸ノ風アリ。龜南溟肥ノ詩人ヲ品シテ。一ニ玉山。二ニ岡士騏。三ニ伊太素。四ニ藪孤山ト云ヘリ。岡士騏ノ詩ハ、樂泮集ト云フ書ニ出テタリトナリ。

龜南溟ノ門下ニ於テ。經術文章行事兼備シタル人ハ。江上芥洲ナリ。予幼時ヨリ江芥洲。山口白賁ノ名ヲ聞クコト熟セリ。後筑ニ遊ビテ。數度相見セリ。芥洲ハ一旦南溟ニ代リテ甘棠館ノ祭酒トナリ。後儒官ヲ止メテ平士トナリ。家ニ在テ教授セリ。此人モ居ルコト其地ヲ得ズ。故ニ其名譽遠キニ及バズ。惜ムベシ。山口ハ今モ存命セリ。

原震平字ハ士萌。古處山人ト號ス。筑前秋月ノ人ナリ。南溟ノ門下ニ於テ。詩人ノ冠ト稱セリ。南溟常ニ稱シテ曰ハク。文ニ兒豎アリ。詩ニ原震平アリト。中年ノ後東遊シ。茶山・五山・詩佛等ノ諸家トモ相交レリ。是ニ因テ東方ニモ往々ニ其名ヲ知ル者アリトゾ。古處モ李白ヲ學ビタル人ナリ。天才飄逸ニシテ。詩人ノ風アリ。卒スル年六十一。

田能村竹田ハ我豊後竹田ノ人ナリ。畫ヲ善クシ。詩ヲ善クシ。數々京攝ノ間ニ遊ビ。賴山陽。篠小竹ノ輩ト社盟ヲ結ブ。故ニ其名譽。京攝山陽ノ間ニ喧傳セリ。近來文政十七家絶句ト云フモノ。世ニ梓行セシガ。海西ニテハ竹田一人ヲ載セタリ。數々予ガ郷ニ遊ビテ。予モ相見セリ。賴子成予ニ語テ曰ハク。海西ノ詩ハ。享保ノ餘習ヲ受ケテ。陳腐熟套ノミナリ。共ニ詩ヲ云フベキ者ハ。足下ト竹田ノミナリト云ヘリ。

予弟子ヲ教育スルコト三十餘年。束脩ヲ取ル者二千人ニ及ベリ。其中ニ於テ第一ノ才子ト稱スベキハ。中島子玉ナリ。子玉名ハ圭。後ニ大賚ト改ム。米華ト號ス。豊後佐伯ノ人ナリ。予ガ門ニアルコト六年。後三都ニ遊ビ。諸名家ニ交ル。逢フ人其詩才ヲ稱セザルハナシ。惜イカナ三十四歳ニシテ歿セリ。天若シ之ニ假スニ年ヲ以テセバ。其至ル處計ル可ラズ。其文才ハ甚ダ賴子成ニ似タリ。其人ハ甚ダ好シ。恨ムラクハ近年酒ニ耽ルコト大過シテ。攝生ノ道ヲ失ヘリ。

我邦佛法ノ盛ナルコト。遠ク漢土ニ過ギタリ。四五百年以前マデハ。豪傑ノ士ハ皆佛門ニ出デタリ。二百年來儒教大ニ振フ。而シテ釋氏ノ徒。又往々ニ文學ヲ以テ聞ユル者アリ。是レ全ク儒風ノ餘化ナリ。其中ニ於テ著シキ者ヲ舉グレバ。大潮。萬菴。大典。古梁ノ如キ者是ナリ。大潮ノ事ハ。前ニ述ベタリ。萬菴ハ江陵集ヲ著セリ。予ガ童幼ノ時マデハ。其集盛ニ行ハレシニ。今ハ讀ム人少ナシ。萬菴ノ詩ハ。俊逸朗暢ニシテ。讀ム者ヲシテ洒然タラシム。遠ク大潮ノ上ニ出ル者ナリ。大典

著述極テ多シ。文章ニモ長ジ。學問ノ精密ナルコト。當時ノ儒林ニモ其比稀ナルベシ。古梁ノ詩文ハ。予未ダ之ヲ見ズ。龜昭陽當世ノ文人ヲ稱ゲテ。東ニ古梁アリ。西ニ藍泉アリト云ヘリ。又其古梁ニ贈ル詩ニ云フ。梁公不喜鄭聲淫。高古雄渾絕代音。寄語儒流何面目。洋々禮樂落叢林ト。古梁ハ詩文享保ノ躰ヲ好ム人ナリ。故ニ龜井ト同調ニテ。如此稱セラレシナリ。

藍泉ハ修驗ナリ。修驗ニシテ文辭アルモノ。古今ナシ。只藍泉一人ナリ。龜井父子極テ此人ヲ重ンズ。昭陽少年ノ時。山陽ニ遊ビ。行キテ謁見シ。弟子ノ禮ヲ取レリ。之モ詩文ノ風。李王ヲ學ビ。徂徠ノ說ヲ宗トスル故ニ。龜井ト全調相合スル者ナリ。其人ハ篤實ノ君子ナルヨシ。

我知ル處ノ僧。世上ニ高名ナルハ。筑ノ曇榮。肥ノ豪潮。法海。我郷ノ法蘭。寶月。豐前ノ大舍等ナリ。曇榮ノ事ハ前ニ述ベタリ。豪潮ハ儒僧ニハ非ズ。律僧ニテ道德ノ譽高シ。嘗テ禁廷ニ至リテ。寬政ノ天子ニ授戒シ奉リ。後ハ尾州侯ノ招キニ應ジテ其國ニ至リ。其地ニ沒セリ。氣象豪爽ニシテ。富貴ニ屈セズ。言語善ク人ヲ動カス。尤モ善ク大人ヲシテ歸依渴仰セシム。法海ハ東本願寺ノ徒ナリ。晚年講師トナレリ。少年ニシテ文辭ヲ善クセシガ。中年ヨリ之ヲ捨テ。佛學ヲ事トセリ。今其少年ノ作ヲ見ルニ。當世ノ詞林ニハ敵少ナシト思ハル。法蘭錢塘詩集ヲ著セリ。寶月ハ即チ法海ノ父ナリ。其姫島ノ詩。諸人ノ能ク知ル所ナリ。大舍ハ猶存セリ。即チ東本願寺ノ今ノ講師ナリ。

儒林評終

鵬翁云。者者不一。役者第一。藝者第二。醫者第三。儒者第四。占者第五。神道者修行者第六七。拙者遠國勤番者。此自不在于此數。實可謂名言矣。如何則役者巨擘給金千兩。藝者揚結晝夜一兩。纏頭因主顧之親粗。醫者國手駕賃三分。藥札因病家之輕重。儒者眞慙益暮百匹。出役一年銀錠五枚。哀哉占者判斷。飛睡二十四銅。神道者高天原振鈴僅十二銅。憐哉修行者今日無遣一文無矣。者者不同。比々如此。夫儒者解經釋史。其苦勞百二十萬倍於役者之舞臺。藝者之坐鋪。貪金實鈔。人之指笑七十五日。放屁儒者渡世。摸擬君子自重德色。不知三世味。臆度學士。不辨佳惡。偽造文人。與其之學殖患不被稱。羨殺人聲價。能罷編心與執物。虛襟公平。不爲門戶之見。遍與名士。周旋。飽飲水道之水。屢履大門之口。則學有牽知疎脫之態。世無蠢愚痴歎之人。今閱此編。品題褒之。皆中其窳。遠擬八文字屋番附。近効亢輪喜內評判。妙絕堪賞頓話。一閱。畏縮大家。羞怕名士。可謂無遺。嗚呼世之慙實先生。其於人之口。不能塞戶云爾。

乙未春(天保) 悟免庵主人題

評判記初編標目

- 第一經學家之部
 - 第二詩文家之部
 - 第三書家之部
 - 第四醫者之部
 - 第五本帥家之部
- 通計五條 卷中目錄畢

當世名家評判記前編卷之上

東都

悟免菴主人著
門人出放大校

經學者之部

大極上々吉

朝川

鼎

名鼎

字五鼎

號善菴

【頭取】 當時での經義は折衷家の大家でござります。文章は自分も出来ぬといはれますが。經義は錦城沒せられてより。此先生に及ぶものはござりません。【ワルロ】 いや〜。孝經私記の御手際では。昌平橋壯年のときなれども。ぶんとお力が見へますが。近頃の大學釋義で還つてぼろが見へまして。昌平橋の諸先生がこれゆゑに彼を評がござります。其上僞君子と申事が世上に申しますゆへ。これが白壁の疵でござります。【ヒイキ】 いや〜僞君だ。一齋さへもさるおやしきで。やりましたゆへ。まして先生は勿論なり。

極上々吉 柴野平次郎 名元升。字吉甫。號碧海。

【頭取】 先生は栗山先生の長子でござります。【見物】 知れた事。それはいはずとも。評判はいか。【頭取】 學問は家學の手強き。性理文章詩書ともに三絶でござります。惜哉寡聞固陋の譏りは免れません。

大上々吉 松崎退藏 名復。字明復。號慊堂。

【頭取】 當時の立者。誠の儒者と申べき先生でござります。世の中に諂ふ事を厭ひ。羽澤の山莊に引込まれても。御名は下町に住居の人より高うござります。其上博覽旁通。右に出る人はござりますまい。【ワル口】 いや。説文すきで。たゞ古物癖で。偏倚の先生で。一向宗のくせが今にこれません。

功上々吉 龜田三藏 名長梓。字木王。號綾瀨

【頭取】 親父より學問が手がたくて。風流温藉。眞の儒者でござります。それゆへに本どうに。しんぷくする人が多ふござります。【ヒイキ】 そうじやく。【ワル口】 女房に誤るのはごふだ。【ヒイキ】 それはそれ。手跡も老先生の様でござります。

上々吉 久保莊左衛門 名愛。字君節。號筑水。

【頭取】 先生は兼山の高弟。さすが老功でござります。段々のお世話にて。諸子類も追々世上で讀む

人が出來ます。

上々吉 長野友太郎 名確。字孟確。號豊山。

【頭取】 世上で人が知りませんが。誰も恐れて居ります。文章も二洲先生のお仕込みゆゑ。なか。出來ます。松陰快談のお手際で。お力のほごが見へます。

上々吉 東條文左衛門 名耕。字子臧。號琴臺。

【頭取】 近頃のお著述が見へます。それゆへ御名は一時に聞えましたが。あまり手が利きまして。切落しの評判がまちでござります。【ワル口】 そうじやく。若きに似合はず。博識じやげなが。十だいの頃浪人して本屋に居たさうじや。それゆへ今でも本屋すすめといふ符帳とり。よく三都の書肆を手につけて。山をするといふ事じや。【ヒイキ】 山をする。名のあるによつて。世上の偽君子に妬まれませう。近ごろは師家をも破門されしが。益々ひいきが出來ます。【見物】 ちげいねいちげいねい。何でもわるくてもよくても。今での江戸風の儒者でござります。しかし焼けたで。へこみます。

上々吉 岡部新吾 名英。字。號菊涯。

【頭取】 北山のお仕込で。づんと博識でござります。世上の浮薄の學風を厭はれて。一向に應接をも好まれません。下谷中で達者でござります。【ワル口】 なんだ下谷の達者だ。ごうりやたら著述

をして錢をこるなかまだ。

上々吉 寺門彌五左衛門 名良 字子温 號靜軒。

【頭取】これは下谷の近所淺くさの名家でござります。おとしは若うございますが。經義文章ともに出來。また詩人と肩をならべて。清新の風に長じて居ります。【ワルロ】嗚呼。それは江戸繁昌記や太平誌を著して。世上を愚弄せし人か。自分が近頃はまじめになりたりとて。あゝも悪くはいはれぬ者よ。其故に昌平橋邊にては儒者中のあはれものといふ評判たつた。【ヒイキ】何と外ではふが。筆のまはる事。書を解すことは。誰もおよばぬ。達者になる者は。何れ一度は悪く謂はるゝものなり。何といふてもこちやかまやせぬ。

上々吉 池守儀右衛門 名廉 字廉夫 號秋水 又烏足園。

【頭取】誠に江戸風の學問。醇粹の古學でござります。いまに至つてまで。よく仕へを好まれません。其師鵬齋の餘風ありて。磊々礧々として一世を睥睨されます。【ワルロ】いや／＼それはうそじや。兎かく本國へは筮仕したがりがて。勤るげな。よいかげんにおきにしろ／＼。【ヒイキ】莊子の御講釋は。御手に入つたものでござります。烏足も妙でム升。

上々吉 萩原鳳次郎 名承 字公寵 號綠野。

【頭取】大麓の二子でござります。今によく家風が衰へませぬ。父兄とちがひ。詩文ことにお手がき

ゝます。【ワルロ】何かもいゝが。山子點の素讀をよしてくれゝばよい。兎かく兼山がしみこみぬけぬそうだ。

上々吉 塘 鴻 作 名公壇 字公甫 號他山。

【頭取】これは錦城先生の高足弟子。文章に長せられまして。駱駝考。教學辨などにて。人のしりました。兩國邊の大家でござります。【ワルロ】いや／＼そうじやない。是は錦城晩年に田舎より來て。學庸原解二書の板下をかゝれてより。錦城の世話になりしを。師没して後。自ら押して自立のつもりで居らるゝゆへ。錦城の社中にて。碑銘一條より中あしく。一人も同門の士服するものなし。何でそれが高足弟子であろぞい。【頭取】いやそんな事は内證でござります。

上々吉 東 條 文 藏 名弘 字士毅 號一堂。

【頭取】これは鵬齋の高足弟子。經義をもつて御高名でござります。【ワルロ】なんだ家を大きくして。聲を高くして。夫で落^{オチ}をとりしお玉が池の運のつよき大家のこの先生。老功の人にて。近來は皆川淇園風に字義の穿鑿にて。醫者や商家も風靡いたされしが。棧じきも切落しも評判なくて殘念／＼。

上々吉 山 本 額 藏 名信陽 字景年 號箕山 一號學半。

【頭取】これは若手でござりますが。近世江戸の親玉北山の孫でござります。さすが名家の跡なれば。人がしつて居ます。【ワルロ】なんだ／＼まだ早いわい。今こゝへ出る所であるまい。もつとよく修

行をしやれ。【頭取】ハイ／＼それはそうでもござりませうが。今に一枚看板になれませう。

上々吉 牧原唯治郎 名直亮。字景武。號半陶。

【頭取】是は精里の高弟。醇粹の朱學でござります。先生世上に御名はござりませんが。づんど手堅い御學問でござります。【ヒイキ】そうじやく。なにもかもしはすにおいてくれ。おらが先生は名をば賣りたがらぬわいな。【ワルロ】陶淵明の半分で。半陶といふ積りだけな。お手釣りのはせも。此頃はいかがでござります。

功上々吉 小松原順治 名雄。字叔義。號恭齋。

【頭取】これは山崎派の老儒。よく今日に至るまで。醇粹の理學でござります。御學術はさておき。徳行にて人が服します。【ワルロ】今でも石摺をして賣る事が上手でくらすげな。

眞上々吉 清水俊藏 名正徳。字俊藏。號赤城。

【頭取】これは山の手の大家。一家の見がござりまして。博覽にござります。世の人が兵家とのみ存じます。實は經學が専門でござります。赤城と申す御儒者が。長尾赤城。大澤赤城などとうしまするもござりまするが。中々清水赤城には及びませぬ。【見物】評判はなん／＼。ハイ赤城小松原にも流行におくれてはやりませぬ。

卷軸 大極上々吉 佐藤捨藏 名坦。字大道。號一齋。

【頭取】東西／＼。當時江戸第一の立物かぶで。一聲で人の恐れます愛日樓の親玉でござります。なんと卷軸で。申分はござりますまい。【ワルロ】なるほ／＼。鵬齋錦城など没せられてより。下町に大豪傑がなし。齡といひ。學問といひ。卷軸はあたりめへだ。むかしは水虎カクもいやがる人ど。葛西因是が評判せし一言の通り。今でも兎角我慢の事が多くして。同門の松崎慊堂などさへ。異議ある噂もござります。また愛日樓文鈔。肥後の澤村某が上木いたし。三都の學士の評判まち／＼でござります。小石川邊にては偽君子といふ噂にて。味噌をつけました。【ヒイキ】何でもまける事はない。幕の内に大勢加せいは有るぞ。【見物】よしにしろ／＼。悪酒を呑むやうで。あと腹がわるからう／＼。

詩文家之部

大極上々吉 大窪柳太郎 名行。字天民。號詩佛。

【頭取】詩は江戸はさておき。三都にても肩をならぶものがござりません。また書畫も近來は別して美事でござります。今での親玉／＼。【ヒイキ】何を言はずとも。人がよくしつて居るわい。【ワルロ】されども文章の出來ぬが疵だ。

大極上々吉 菊池左大夫 名桐孫。字無弦。號五山。

【頭取】 詩佛と互角の詩でござれども。齡が少しだゆへ。第二席へおきました。栗山翁の門人にて。江湖詩社へ入り。江戸の詩風を一變しました。御手柄の事。【ワルロ】 文章は詩佛より出来れども。書をかくが拙なり。そして風流といふ事なく。妙々奇談で評せられた通りだ。詩話の補遺と書畫會のさつどうで困るそうだ。

上々吉 館 勇次郎 名機。字樞卿。號柳灣。

【頭取】 近頃は老衰で引こみ多うござりますが。御編述もおほくて。人がじりました。林園月令にてお手際が見へました。【ワルロ】 おうねが越後ものにて。金持の子ゆへ。富にまかせて英萬笈をとりたて。本屋の引にて名をならせたげな。いまでも名にはかまはず陶朱公をするごと。貨殖のみじてくらすと。

上々吉 齋 藤 德 藏 名謙。字有終。號拙堂。

【頭取】 碧海もこの先生は半年づつよりおほく江戸でござりますゆへ。此評林へ入り。又若手の文人でござります。【ワルロ】 文話が出来て。却て文名が落ちました。お名は謙と申せども。あまり自慢がすぎます。【ヒイキ】 なんでもよく博識をいたされました。よく人をも容れられます。大家の風がござります。

上々吉 梁川新十郎 名字 號星巖。

【頭取】 北山の御門下でござりましたが。近來は京攝の間でお名が高うござります。今に江戸の大家になりませう。【ワルロ】 鳥なきさとの蝙蝠で。京攝の間で評判のよきを自負し。新下りに下りしに。誰も服する人なく。久しく塾して。やう／＼顔見せしたが。ごうも覺束ない。今に夜逃をするだらう。

上々吉 山本亮助 名謹。字公行。號綠陰。一號茶佛。

【頭取】 北山の子。むかしは頗る達者でござりましたが。おひこみました。されども名家のあとでござります。【ワルロ】 近來は山も止めたげな。尙書勤王師で損をした。【ヒイキ】 イエサ通りもので。詩も放翁の様でござります。

上々吉 辻元崧菴 名崧。字山松。號樓宇。

【頭取】 お醫者が本業なれど。詩はゑらひもの。奚疑塾の才子でござりまして。今では詩も格別に作られません。作家でござります。

上々吉 芹澤尙淳 名字 號靜所。

【頭取】 若手の作家でござります。追々お名が出ませう。

上々吉 下毛秀次郎 名正應。字子健。號藕塘。

【頭取】 文章も出来ます。五山の社中才子でござります。

上々書 小南常八郎 名寛 字 號栗齋。

【頭取】 經學が専門と申しますが。詩が本色でござりますか。【ワルロ】 先生は近來道德仁義説のあとへ。江戸竹枝は何の事だ。狂詩か本詩か。しかしこれより始めて人がしりましたが。固陋でなさりません。

上々吉 山地武一郎 名寛 字孟毅。號蕉窓。

【頭取】 これ鵬齋翁門人の詩人でござります。

上々吉 野澤彦六 名恒。字寧恒。號醉石。

【頭取】 先生は御作家なれど。人が存じませぬ。おつけお名が出ませう。惜い事〜。

上々書 宮澤雲山 名雉。字子雉。號細菴。

【頭取】 先生は江湖詩社の一人。若年よりお名がござります。そして月琴が名人で。詞曲がお手に入りました。【ワルロ】 近來は御藏前の豪福の門人に阿諂して。専らに俳諧をするげな。

上々吉 服部眞藏 名元濟。字君美。號芝山。

上々吉 荻生惣右衛門 名維則。字式卿。號櫻水。

【頭取】 御兩人ながら御名家の跡ゆへ。どうしても遺澤がござります。

上々吉 谷立本 名立惠。字太公。號斗南。

【頭取】 先生は金峨の學流を汲みし人にて。唐明の詩風にては。贗古偽調を説きました作家でござります。隠君子ゆへ人がしりません。御著述もあまたあります。

上々吉 鹽田又之丞 名華。字陳敬。號隨齋。

【頭取】 朱延平の門人。御若さにて作家でござります。津藩にては拙堂といへども。詩にては遠く先生へ譲られました。【ワルロ】 どうだ酒はやんだか。五山堂詩話へ詩をいれて貰つて。世上に名を知られたとか。【ヒイキ】 イヤ〜。それは虚談じや。江戸ではさほどでなれど。上方にてはゑらい高名だ。早く詩集を上木したふり升。

上々吉 田邊晋次郎 名誨甫。字季德。號石菴。

【頭取】 先年續八大家讀本編輯にて。人のしりました。村瀬誨甫先生でござります。近來宋潜溪・王陽明・方正學・唐荆川・王遵岩・歸震川など。文畧が追々編輯にて。上木になります。誠にお手柄の事でございます。【ワルロ】 なせに一人して兩名にするぞ。田邊晋次郎では二百三十俵の方さ。聲にいつたせな。アの腕でなせ自立せぬやら。【ヒイキ】 イエ〜。それは色々譯がある事。【ワルロ】 儒者の番付も。本屋に頼まれて作りしとき。自分の名の違ひにて。自ら入りしと聞く。わけといふ事はこの事か。何とちげへねへの。真中であらうの。

上々吉 安 積 祐 助 名信。字思順。號良齋。

【頭取】 皆さまのおひるき多き駿河臺の名家でござります。良齋文畧の出来ましてより。世上で名を
しりました。【ワル口】 如才なき人ゆへ。よく大家へ取入て。よくきに入るやうにしたゆへ。とりは
やしがよくて。出入場も多くなり。流行醫者とおなじやうに。東西南北へかけあるき。今に大立物と
いはれやす。切落の評判はさておき。座元のひきにて。今にも座頭ともなりやせうが。下町へ出るに
違なく。氣の毒な事〜。【ヒイキ】 見ろ〜。今に大親玉が株は。外へはおれらがやらせぬわい。

卷軸 六極眞上々吉 岡 本 省 翁 名成。字子省。號花亭。

【頭取】 東西〜。經學文章はさておき。詩にては江戸のうちにて。いかなる作家にても異義のござ
らぬ大先生。近來別して高名でござります。何と卷軸で。相當でござりませう。【ヒイキ】 ちがいな
い〜。何もいふ事はあるまい。どうぞ詩集を上木して。京攝へやりたふござります。【見物】^{てんぼう} これ
やい。評判は至極よからうが。また詩人はいくらもある。なせに出さぬぞ。西の久保や牛込や芝や本
郷にも。詩人はまたありて。此評へいらぬを羨しがるであらうぞ。【頭取】 いや〜。あこの書
家が待かねて居りますから。今日はこれで御用捨〜。

(編者云 卷下書家醫者本艸家ノ部ヲ省略ス)

當世名家評判記前編卷之上終

跋

相撲好の番附をみて肘を張も。しばぬすきの給金の高下を見てあらそふも。蓼くふむしのすき〜な
れど。最負はのけておきのいし。人こそしらぬとおもへとも。みなこれ十指のゆびさすところ。戸の
建られぬが。世間の口のは。善惡邪正の評判記。儒者でも。醫者でも。者の字はおなじ通用もの。
是はいらぬとすてるとも。紙屑ならば二合半。ごみ屑ならば砂むらといはねど。これたあたりまへ。
ちよつと評したたねがしま。嘘なら聞てみなど町鐵砲洲の親船をねらつて。しりへにぼんとはなすこ
としかり。

天保五甲午夏

狂聖堂主人 南 子

天保五年十月某日 岡本省 著 某主人 評
 予頃造化兒ノ爲ニ勞シ。秋夜寂々夢ヲナスコト能ハズ。胸客語ヲ催シ
 テ。腹主玄ヲ談ズ。ココニ東都人文ノ衰ヲ嘆ジテ。當時ノ儒林ヲ論ズ。
 無名ノ徒ハ評スルニ暇アラズ。ソレ評スルニ暇アラズ。

秋雨談

予頃造化兒ノ爲ニ勞シ。秋夜寂々夢ヲナスコト能ハズ。胸客語ヲ催シ
 テ。腹主玄ヲ談ズ。ココニ東都人文ノ衰ヲ嘆ジテ。當時ノ儒林ヲ論ズ。
 無名ノ徒ハ評スルニ暇アラズ。ソレ評スルニ暇アラズ。

三河 沙 門 某 撰

淡々たる筆に、雨の音、風の音、人の音、物の音、すべてが、静かに、そして、深く、心に響いてくる。作者の観察眼は、鋭く、そして、温かい。この雨、この秋、この世、すべてが、作者の筆に、生き生きと、そして、静かに、そして、深く、心に響いてくる。

秋雨談

三河 沙門 某撰

眞評

紀世馨 名徳民。 號平洲。 通稱細井甚三郎。 尾藩學職。 元談淵高弟。 談淵ハ中西維寧。 尾州人。 號談淵。 爲一家。

世馨ハ如來山人トモ號ス。 名望ノ高キ。 友道ノ廣キ。 海内人ノ知ル處。 早ク詩ヲ以テ顯ハレ。 晩ニ經濟ヲ以テ任トス。 實ニ東都第一ノ名家。 ワレ間然スルコトナシ。 市ヶ谷五段坂ニ居ル。

井仲龍 名潜。 號四明。 通稱井上仲。 備藩文學。 蘭臺通熙ノ男也。 住愛宕下。 今住築地。 子叔ノ風ヲ繼デ。 詞壇ニ文柄ヲトリ。 詩名スデニ海内ニ彌漫ス。 林家耆老。 温厚ノ君子ナリトゾ。

關君長 名修齡。 號松窓。 通稱關永一郎。 蘭臺高弟。 住愛宕下。 初住國學館ト云フ。 金峩ト雁行シテ。 井上ノ捻華ヲ得タリ。 訓話ノ學。 大ニ東都ノ巨擘ト呼ハル。 傲慢ノソシリアリト雖。 要

マタ羅山家ノ傑ナルベシ。

古公欵 名鬲。 號昔陽。 通稱古谷重次郎。 秋玉山門人。 後爲一家。 古公鍊弟。 熊本侯文學。

詩書專門
其勝兄比
逐臭者比
斗山

善老君
子未足
爲一箇
雄傑。 眞評如品

真評

住日本橋。著述ヲ好マズ。強テ名望ヲ求メズ。然レトモ東都ステニ紀氏ニ比スルモノアリ。噫明道ノ德。伊川ニ及ボスカ。嘗テ其學三禮ヲ宗トスルトゾ。

服栗齋

名保命。字祐甫。通稱服部善藏。村士行藏門人。麴溪書院教授。住麴坊。徵擢ノ重ヲ辭シテ。ヨクコノ道ヲ任トナセリ。學校舉兼山ノ後。盛事ト云フベシ。門風嚴正。家學ヲ以テ東ニ雄視ス。若シ夫レ英才ヲ教育スル事ハ。ワレ知ラズ。

豐嶋子卿

號豐洲。又考亭。名幹。通稱中岡終吉。字澗水門人。後爲一家。寓居火番坊。文學ノ稱既ニ四方ニミツ。其秦皇ノ說ハ。鄭漁仲ニヨリ。老子ノ辨。伊蘭嶼ニ似タリ。奇見怪論アリト雖。マタ豪傑ノ儒ナルベシ。

冢田虎

號大峰。字貌。通稱冢田多門。尾藩寓臣。住麴坊貝坂。信陽冢旭嶺男。諸經傳ヲ註シテ一家ヲナス。マタ儒林ノ雄。成書已ニ宇内ニアマネシ。タダ其急名ノ癖。大ニ識者ノ嘆ヲ生ズ。世ニ山信有ニ比スルモノアリト雖。其倫ニ非ズ。

山本北山

名信有。字喜六。幕府小臣。一號孝經樓。住神田玉池。今寓于今戶。其師ヲ知ラズ。儒名日々ニ都下ニ赫々。詩文ハミナ公安ノ流。經義亦一家ヲナシ。書ヲ著ハシテ古人ヲ排斥ス。然レトモ其人客氣未ダ消セズ。後來ノ識見。恐クバコレニ止ラン。晚年悔非改過モ知ル可ラズ。故ニ今定論ヲナサズ。

試定論。眞當世。雄海內。名家。

真評妙

眞評。中原逐鹿。或得此。或失斯乎。

龜田鵬齋

名長興。通稱龜田文右衛門。金峩門人。今爲一家。住燭坊。信有ト並ベ稱ス。詩文經義皆一家ヲナシ。豪爽ヲ以テ名聲都下ニ噪シ。然レトモ放酒放達。敢テ自重ヲナサズ。故ニ其嫌モ亦多シトゾ。

服仲山

名元立。號霸陵。通稱服部眞藏。仲英男。南郭嫡孫也。居赤羽。管習之ト連壁シテ詩名アリ。又文章モ碌ニアラズ。南郭ノ孫。其名家タルコト。ワレ何ゾ贅センヤ。

齋東海

名惟喬。字德明。通稱齋藤忠吉。鶴士寧門人。或曰。南郭晚年門人。住駒籠。南郭ノ正統ト稱シテ。一世ヲ虎視ス。閉戸ノ儒。世人ノ議論ニ及バズ。然レドモ偏狹ノ質。遂ニ惺々ノ風ヲキクコトナシトゾ。

東龜年

號藍田。通稱伊藤金藏。金谷門人。住湯島。熊耳ニヨリテ文名煥發。徠家ノ老儒。詞壇ノ傑ナリ。近世或ハ嘲評ヲキクコト多シ。然レトモコレ聲者ノ辨色□ニ論スルニ足ラズ。觀場ノ矮人。試ニ其詩文ヲヨメ。

根君美

名經世。通稱中根覺太夫。號東平。熊耳高弟。遠侯世臣。住小河巷。熊耳ノ高弟。徠門ノ宿儒ナリ。能ク家學ヲ守リ。世ノ雷同ニ拘ラズ。詩文經義大ニソノ流風ヲ興起ス。惜ムラクバ藩外知己少ナシ。

崎允明

號淡園。通稱戶崎五郎太夫。守山侯太夫。居礪川。經濟ノ才ヲ以テ。一藩ノ重任ニア

真評

或稱徠家。老頭巾。或云。名惟馨。元稱元六。

眞評。然嘲不除。當亦似過。

真評妙

真評

其實不知可否

儒臣得能弊

雷同聞聲生。與自論奇。其高操古雅。喜評未足。評不足

真評

真評。然惜過當。

或曰。風流家。又曰。真評。

當代。雅匠。海內。知其真。

評過當

可惜

真評

真評妙々

タル。文詩稱スベシ。堂々タル徠家ノ干城ナリトゾ。

倉輔 號鶴林。通稱戸倉作輔。堀川門人。岡侯文學。命在豊後。住芝。經義ノ外。詩文ヲキカ

ズ。又一方ノ宿儒。尋常ノ文學教授ニアラザルナリ。

巖行言 號華沼。字子言。通稱岩瀬勘平。島原侯世臣。河靜齋門人。或曰。瀧彌八門人。居敷

寄屋橋。書ヲ以テ鳴ルニ似タリ。儒名モ亦韓使ニ對話シテ。舊學ノキコエアリ。只藩ノ顯官。業專

ラナルコト能ハズ。

荻野喜内 號鳩谷。名信敏。姓孔平。一號天愚。雲藩世臣。赤坂ニ住ス。崎人ノ目アリ。孔

平子ノ稱一世ニ高シ。或曰。其家儉ニシテ富メリト。

兒玉喜太郎 號空々。名慎。蘭林門人。田安侍臣。或曰。土肥霞洲門人。住牛込。放達ニシ

テ琴ヲヨクス。儒名モ亦鳩谷ト雁行シテ。大概其學魯衛ノ政也トゾ。

林珠淵 號龍山。通稱小林六左衛門。南溟門人。岡崎侯世臣。住小川巷。老儒ノ稱アリ。詩ヲ

好ミ。傍ラ俳ヲ嗜ム。子夏易傳。識者ノ嘲ヲマヌカレズト雖。マタ滄浪社中ノ遺風アリトゾ。

岳東海 名融。字子陽。通稱岳太仲。熊耳門人。住芝新錢座。古文辭ノ奇ヲ極ム。一時或ハ難

讀ノ評アリト雖。宏才硬學。白雲樓ノ稱スルニ。詞壇赫々。滄溟ノ遺脈。再ビ當世ニ傳フトイフベ

シ。

柴邦彦 號栗山。字彦輔。又號大對學。通稱柴野彦輔。東都直學。蘭林門人。或曰。後藤彌兵

衛門人。又曰。西成齋門人。住駿臺。京都ニ在テ儒名舊シ。東都ニメサレテ直學士トナル。詩文及

ビ書モ。藝苑ニ聞ユト雖。其人偏狹。ツヒニ道學頭巾ノ氣ヲ免カレズトゾ。

河子靜 號西野。一號寬齋。通稱市河小左衛門。富山侯文學。林家門人。住神田玉池。今住叡麓

長者街。文ハ熊耳ニ出デ。シカモ護園ニ入ラズ。經ハ松窓ニ得テ。訓話ヲ好マズ。只詩ヲコレ業ト

ス。白香山ノ風ヲ興ス。進領袖ノ稱。世盛ニ唱フトゾ。

菊池叔成 號衡岳。名禎。觀海門人。紀藩世臣。通稱菊池内記。モト牛門ノ社ヲ結ンデ。觀海

ノ門詩名ヲ得タリ。其人謹慎。尋常徠家ノ風ニ非ズトゾ。

源長卿 號琴臺。通稱佐々木源三郎。住谷中。台嶺ニ清隱ノ名ヲ標シテ。晚唐ノ調ヲ唱フ。文

章經義亦一家ヲナシテ。殆ド詞壇ノ偉器ナリトゾ。

菅原文藏 號東海。名基。字子恭。金峨門人。其學以山崎氏爲宗。住靈岩島。名ヲ好マズ。

飄々トシテ塵世ヲ弄ス。然レドモソノ見卓然トシテ。劇論當時ヲ空クス。懶放脫洒。タゞ酒趣ヲ會セ

ズトイヘリ。

吉田坦藏 號篁墩。名漢官。金峩門人。今爲一家。住淺草。モト水府ノ醫生。故アリテ東都

ニカクル。狂態多ク世議ヲ犯ス。青樓ニ漫論シ。市ニ染毫ス。孔墨ノ書ヲ校シテ。淫坊ニ上木セリ

固陋寡聞。陶中。救業。田中。古故。態。田。評。第。二。評。過。當。

トゾ。
小田穀山 名煥章。修姓陳氏。字子文。片兼門人。住八貫町。越ノ松子永ヨリ出タリ。玩世ノ風。曾哲牧ガ流ナルベシ。快談語。眼中タ、稽阮アルノミトイヘリ。
爽鳩允 號星岡。字子允。通稱鷹見彌一右衛門。田原侯世臣。平洲高弟。元大湫門人。住正長ノ孫。徠家ノ學ヲウケ。名家ノ風モ亦當行ナリトゾ。

泉盈 名長。通稱泉谷太郎。如來門人。元大湫門。號豐洲。住湯島。如來ノ女婿ナリ。當世聞名ノ儒ニテ。名聲日々文壇ニナル。又後來ノ俊。殆ド先輩ヲ睥睨スベシ。

太田覃 號南畝。字子耜。通稱太田直次郎。東都小臣。觀海門人。住牛門御徒町。モト秀才ノ稱ヲ得テ。寐牕ノ號世ニ鳴ルニ似タリ。中年行ヲ改メ。學ヲ正ス。然レドモ優孟遂ニ叔敖ニ異ナリ。却テ惜ム今寥寥ニ至ルコトヲ。

三繩準藏 號桂林館。蒲山名惟直。清河高弟。住濱町。清河ノ統ヲツイデ。徠家ノ名ヲ稱ス。文モ亦出藍ノホマレアリテ。當世風流ノ儒門ナリトゾ。

萩原永輔 號大麓。名萬世。字休卿。兼山門人。住藥研堀。松一齋ト雁行シテ。兼山ノ學ヲ業トス。詩モヨク舊風ヲ傳ヘテ。名聲ヤ、鳴ルニ似タリトゾ。

菅野勘平 菅兼山男。會輔書院教授。住大橋。ヨク家聲ヲツイデ。性理ヲ講ズ。學校ノ任。

素讀夫子。評似過當。

寥寂。然評得妙。

評未得。真。常人。中。學生。學。中。凡。人。畢。竟。不。足。比。數。

其實與評不合

無名男。子。評。尤。過。當。

未。知。其。方。實。一。何。聲。譽。在。傲。居。一。創。父。自。詩。人。中。有。目。自。嫌。他。呼。可。憐。迷。似。不。妙。妙。亦。妙。

真評

真評。然。未。知。其。可。否。

マタ老頭巾ノ長ナルベシ。

草加和助 號崑山。名定環。字循夫。住八町墜。蕃山氏ノ統ヲ傳ヘテ。其舊□ヲ校ス。詩清

河ノ風月ニ會シテ。雅人ノ稱ヲ得タリトゾ。

管武環 號峨嵋山人。名義鄰。字季德。横田氏寓臣。住麻布。北越學校ヲ創シテ。文名ヤ、響

クト雖。不過流俗。タ、寥寥ノ徒ニ混ズルトゾ。

河内藏 號□。名□。宮川侯文學。士寧門人。住愛宕下。徠家ノ生也。詩文ノ外。行事ヲ嚴ニ

シテ。上方ノ聲譽ヲ得タリ。

犬塚唯助 號印南。名遜。字退翁。林家門人。住本郷。林門後世ノ俊ト稱シテ。詩ノ一家ヲ

ナス。シカレドモ胸中三尺ノ荆。アルヒハ排議ヲマネクニ至ル。

倉成善卿 號龍渚。名經。通稱倉成善司。中津侯文學。元堀川門人。住築地。古義ノ學ト稱

ス。後濂洛ノ風ヲ以テ。名聲イヨク聞ユ。マタ一藩ノ長者。詩文モ亦當行ナルベシ。

陰熙 號豐洲。名雅。通稱陰山忠右衛門。岳子陽門人。小山侯文學。住麻布花簪橋。岳氏ノ流

ヲ傳ヘテ。徠家ニ名アリ。詩文ミナ其家風ヲ以テ。鐵中錚々ノ稱アリトゾ。

菱川字門 號秦嶺。名賓。字大觀。佐倉侯文學。片北海門人。今爲一家。住櫻田。大室ノ美

ヲ繼デ。佐倉ニ鳴レリ。釋冷然頻ニ稱シテ通儒ノ名ヲ許ストイヘリ。

未知其實

眞率老人
評何宛

眞評

眞評

眞評

眞評

評似過當

中川源助 號琴川。名健。字強甫。菅原氏。弘前侯教授。宇士迪門人。今爲林門。住本所。

子迪ノ學ヲ傳ヘテ。林門ニ遊ブ。マタ經義ノ業。聲ヤウヤク振フトゾ。

谷谷 名修。通稱谷文五郎。白川侯寓臣。南溟門人。住下谷。詩ヲ以テ稱セラル、ト雖。浮薄

輕率。識者ノ爲ニ嘲ヲ得タリ。タダ舊世ノ遺老トシテ。臭ヲ當年ニ賣ルトイフベシ。

尾藤孝肇 字志尹。號二洲。通稱尾藤良佐。片北海門人。今改宋學。教授昌平學校。徠學ヲス

テテ閩洛ヲ慕フ。正學指掌ノ作。ワレ敢テ論ゼズ。徵擢ノ儒中。殺氣凜々タリトゾ。

古淳風 名樸。號訥齋。一號精里。通稱古賀彌助。藪孤山門人。或曰。西。教授于國學館。モ

ト藪氏ニヨツテ儒名ヲ得タリ。詩文ノ聲譽。關西ニ噪シ。風流ヲ好ミ。温和ノ人ナリ。徵擢中。イ

ササカ大方ノ稱ニアヘリ。

松一齋 名壽。字子福。號葵岡。一號葛山人。通稱松下清太郎。片兼山門人。住番坊。片山氏

ノ流ヲ傳ヘテ。番坊ニ鳴ル。閉戸先生。敢テ他門ニ會セズトイヘリ。

佐藤坦 號一齋。字大道。林家門人。爲一家。元四明門。通稱佐藤捨藏。住楊子子。專ラ陽

明ノ學ヲ講ジテ一家ヲナス。文辭モ亦詞壇ニ翮ヲトシテ。後進ノ英物ナリトゾ。

平貴徳 號九峰。一號釜山。通稱高井十郎右衛門。舊氏久保田。東都先鋒隊騎士。尾州布施氏

門人。住牛込榎巷。寶曆ノ頃。文學室ヲ著ハシ。儒名アリ。後來好奇ノ癖。漸ク生自負。殆ンド

衆議ヲ招ク。畢竟老學宿儒ノ名アルノミ。

太田才助 號迂濶居士。號錦城。名元貞。北山高弟。今爲一家。住藥研堀。才名ヲ以テ文林

ニ虎視ス。無行ノ嘲アリト雖。マタ庸々碌々ノ群ニアラズ。

葛西健藏 名質。字休文。號因是居士。平澤弟侯門人。爲一家。或曰。河子龍門。住木挽巷

築地。傲儒ノキコエアリ。其詩文モ亦日ニ大方ノ稱ヲ得タリ。或曰。吉漢宦ガ流ナリトゾ。

篠子温 名兼。號竹堂。東都小臣。通稱篠本久次郎。金峨門人。住牛込山伏町。金峨晚年ノ門

人ナリ。其人君子ノ風アリテ。詩文モ亦一方ノ儒名ニ耻テズ。

佐士文 名欽。號熊水。通稱佐久間英。東海門人。住下谷車坂。山本北山ト筆戰シテ。其名聞

ユ。徠學ヲ任トシテ。齋東海ガ姪ナリトゾ。

滕休 號狹南。字明夫。熊耳門人。通稱大久保五郎兵衛。住三田聖坂。熊耳ノ風ヲウケテ。淳

篤ノ質。ヨク善名ヲ保ツ。程不識ガ兵ソノ價ヲ損スルコトナシトゾ。

東都廣濶。必シモコ、ニ止マラス。虎士ノ雄タル。藩臣ノ傑タル。他日聞見ニシタガツテ。二編ヲ

ナスベシ。

藝州 頼彌太郎。薩州 赤崎源助。熊本 大城多十郎。有馬源内。辛島才藏。久留米 樺島雄七。仙臺

志村東藏。五島 永富數。米澤 神保要助。

奇才絶
倫。評未
足。

眞妙評

眞評

未知其實

評過當

右別記

寛政十二庚申

東都 無 爲 菴

都下名流品題辨

解題

慶元以降。文運盛に赴きて。學者彬々として輩出し。巧藝異能の士。亦時に應じて駢び臻る。然れども其餘弊は。諸家門戸を立て、相排擠し。同異を胸中に挟みて。朋黨結構し。賣名射利の風を長じ。文壇竟に輕浮の陋習を招くに至れり。文化十二年。大窪詩佛。菊地五山。山本綠陰。秦星池。依田竹谷。佐藤晋齋相計りて。當時の文藝の士を角力番附に擬して品藻し。刮鬪に附して之を江湖に汎布し。賣名好譽の陋を極めたり。

然れども其班列する所。本篇中邊以冉の所謂。取浮名轟然喧傳一時者。而不取經術文章實行篤學者也の嫌あるが上に。己に同する者は則ち揚げ。己に異なる者は擯くる所あり。斯くの如き兒戲に等しきこと。豈學者の關すべからざることなるに。當時世舉つて。賣名射利の風に醉ふ際なれば。一時に喧傳して。群論聚謗。葛西因是の如き。太田錦城の如き。また是れ好名の徒ならざるに非ず。之に激する者。竟に増山雪齋を驅つて。威力を以て其板を毀たしむるに至る。兒戲に起りて兒戲に終る。嗚呼醜に出でて醜に終り。陋に出でて陋に終れり。

都下名流品題辨
 關脇 詩佛柳太郎
 小結 痴齋文一郎
 前頭 星池源藏
 全 綠陰良助
 全 可庵榮之助
 全 南湖門彌
 全 善菴カナエ
 全 南嶺猪三郎
 全 赤水忠藏
 大關 鵬齋文左工門
 關脇 詩佛柳太郎
 小結 痴齋文一郎
 前頭 星池源藏
 全 綠陰良助
 全 可庵榮之助
 全 南湖門彌
 全 善菴カナエ
 全 南嶺猪三郎
 全 赤水忠藏
 大關 鵬齋文左工門
 關脇 詩佛柳太郎
 小結 痴齋文一郎
 前頭 星池源藏
 全 綠陰良助
 全 可庵榮之助
 全 南湖門彌
 全 善菴カナエ
 全 南嶺猪三郎
 全 赤水忠藏

都下名流品題辨

番附 但シ幕内

東の方

西の方

- | | | | | |
|----|--------|----|--------|----|
| 大關 | 鵬齋文左工門 | 大關 | 谷 | 文晁 |
| 關脇 | 詩佛柳太郎 | 關脇 | 五山左大夫 | |
| 小結 | 痴齋文一郎 | 小結 | 米菴三亥 | |
| 前頭 | 星池源藏 | 前頭 | 董堂加右工門 | |
| 全 | 綠陰良助 | 全 | 如亭門作 | |
| 全 | 可庵榮之助 | 全 | 因是健藏 | |
| 全 | 南湖門彌 | 全 | 金陵金之助 | |
| 全 | 善菴カナエ | 全 | 榕齋九兵衛 | |
| 全 | 南嶺猪三郎 | 全 | 雲潭祥藏 | |
| 全 | 赤水忠藏 | 全 | 鳴門一藏 | |

行司四明仲
蜀山人直次郎
寬齋小左工門

藏六千吉
鈴木芙蓉
勤齋重藏
鐵形蕙齋
晉齋榮吉

世話役
佛菴彌太夫
蠮齋藤藏

勸進元抱一上人
桐隱公子

近有為名流品題者。以愛憎為優劣。大犯公議。讀此詩者。能知其妖人窠窟矣。

藝苑妖魔君識否。星池移影綠陰間。慈裝說法化詩佛。忽捲黑雲歸五山。

和番附學士戲作。行事畫人芙蓉

處々群芳春欲盡。星池生毒陰綠間。近聞詩佛開魔界。妖術術又作口竊行傳五山。

葛西因是

淳化年鐫梨棗板。星池樓上秘藏深。一聲霹靂摧殘盡。強寸銀錠謂今之雨錄。縫不禁。

梨棗成精狡且頑。星池水上綠陰間。多勞詩佛揮神斧。劈破魔身化五山。

奉呈鵬齋老先生。同人

經學文章占舊門。白頭爛醉隱寒村。曲江院裏春風滿。博得當年新狀元。

和因是先生之韻

投老田園掩竹門。誰知名士在寒村。惜君豪氣未除去。枉被人呼新狀元。

晴軒。太田敦 錦城男管三郎

近有無賴子。品題都下名士。以鵬齋寫山為頭。以詩佛五山為探花。因是有詩賀鵬齋。予亦

和之。錦城

品藻名流出孰門。春星池上綠陰村。探花二子多才學。何況先生是狀元。

二 同人

當年儒雅在君門。晚節屏蹤水竹村。白頭所得何榮幸。一榜雙題畫狀元。

同前奉和 鵬齋

春風一夜動蓬門。僞登科錄噪僻村。身是當年打噪聒。愧人誤唱占三元。

星池月落新齋昏。竹谷風腥深鎖門。詩佛堂前眠不就。無弦琴上綠陰翻。無絃五山名

又

新山虎吼五山震。新山因是舊姓。水折石顛壓幾人。石顯雪齋老侯號。四子欲逃逃不得。

錦城城裡泣天民。四子。星池。綠陰。竹谷。晉齋。稱下谷四天王

代星池

噬臍今多於噬筆。子孫深戒賣虛名。柳橋橋畔星池漲。流出錦城再不回。言星池為錦城所絕

山儒歌

近來世上不依何。角力取組番附多。因之俗儒不思附。各居關脇見下他。其徒五山又天民。晉齋刻板番附新。大關鵬齋關脇彼。好貌欲欺田舍人。笠井健藏忽知之。忽呼一人糺實非。此山忽露被占付。御免御免泣無涯。五山山崩一山無。天民如土民之愚。見一一天作五。二人無五天作土。江戸始之儒者騷。評判自富士山高。

與大窪天民書

太田錦城

元貞再拜。天民足下。不面踰月矣。春氣日舒。風日晴和。想江山書屋之前。松竹幽蒨。花柳鮮麗。池館之勝。今爲其時矣。貞奔走塵事。不得一往而見之爲憾。頃有一事可告者。傳聞都下名士品題。出於足下諸人之手焉。其中失當可議者極夥矣。交遊之誼。不可默止。請畧陳固陋。足下裁焉。井四明一代耆宿。經學文章頗爲一家。且其溫厚篤實。足稱君子長者。實當今儒宗也。足下輩有何恨。使之次南畝之下焉。是其失當者一也。河西野雖乏學識。亦一代才子。其詩名夙振藝林。其諸子善書畫。天下莫不知之也。風流之家。當以此子爲巨擘矣。足下輩有何恨。使之次南畝之下焉。是其失當者二也。南畝不善詩。不善文。所長世所謂狂歌者耳。是非劉訥言俳諧。則鄭紫歇語。實不足齒于藝苑。足下輩有何恩誼。不做高宗排劉訥。而學昭宗相鄭五。使之立于四明。西野之上

焉。是其失當者三也。木芙蓉以畫鳴于天下者三十年矣。其巧拙則非貞之所敢知也。雖然其人頗讀書解文辭。亦鐵中錚錚。庸中佼佼者也。足下輩有何恨。使之與蕙齋藏六。晉齋伍焉。是其失當者四也。葛西因是才學文章。一時英雋。其文不辨雅俗。是其所短。雖然其才氣則遠超出于時輩。今代文人當以此子及佐藤一齋爲冠冕。足下輩有何恨。使之立于不學無術之如亭之下焉。所謂佛頭著糞。是其失當者五也。鵬齋夙以經學文章。雄視一時。近則棲遲衡門。放浪于酒詩之間。混淆于書畫之士。蔑棄禮法。與優倡爲伍。少壯勇邁之氣。一變而爲放誕之流。其與畫家相爲配儷。其所自取。無如之何。足下輩以此置狀頭似矣。雖然使之與文晁相配焉。是爲褒之乎。又爲貶之乎。使鵬齋猶有人心乎。則不甘受此品藻矣。如果受而悅之乎。可謂老悖喪心矣。昔祝欽明奏八風舞於淫后之前。盧藏用歎曰。五經拂地矣。今日品題。鵬齋經學文章拂地。是其失當者六也。是其最昭明赫著者。其他則更僕曷罄。或言此品題不出于足下矣。雖然世間喧傳。其作之者。星池。綠陰而足下與五山指蹤之。猶蔡京使強浚明。葉夢得作元祐黨籍碑。魏忠賢使馮銓。崔呈秀作東林點將簿也。果然則後世有李綱陳東。則足下與五山。不免六賊之名。楊璉二十四大罪疏。當爲足下發。而欽定逆案。則足下與五山。當在客魏之列焉。星池。人品最劣矣。且夫無學不辨皂白。古所謂擿植索途者。爲足下鷹犬之用。唐突名士。固其所也。綠陰以名父之子。其不學則同韓利金銀。其不良則同王雱險惡。世傳北山一世所爲。近似匪人者。皆綠陰所教。今又作此品題。不辨菽麥。都下藉

々莫不惡之也。皆言是其黨狡謀。不足欺都下之人。都人自有有識具眼者。能明辨其誣矣。是故傳之於遠鄉遐陬。欲驅無識者入吾黨中耳。足下輩心術之姦。顯然呈露。無復餘隱。足下成長于北山之門。不爲無恩義也。雖不能諫止其子之妄。豈忍指蹤之以爲搏噬之用。使其負天下之謗乎。足下縱言不預其謀。則僞也。稿成之日見而悅之。且出金以資其刻費者誰乎。足下遂不得辭其罪也。近聞都下書畫篆刻之士。不辨其伎巧拙。阿諛足下輩。而入其黨者。乃於所謂書畫會者。聚首造膝。親如兄弟。時褒賞其伎。以欲其名之傳播矣。如不入其黨。則背面反眼。視如仇讐。甚則綠陰君鳳輩。齟齬排擯。無所不至。使其不能在其坐焉。其意一在脅制書畫文墨之士。入吾彀中。張其羽翼。皇其門戶。以爲賣名射利之媒焉。其爲謀亦黠矣。其用心亦毒矣。是豈君子之所爲乎。凶焰熏灼。乞兒附火。星池則貞門之士也。近則附足下之黨。能成其名。是足下諸人之賜也。雖然足下輩揄揚之過。使其人頓成名。極肖暴富之兒忽生侈心。是故以大家自居。侮蔑名士。作此妄品。以媚鵬齋文晁及足下諸人。又以報鵬齋文晁及足下諸人之恩也。比之於天啓逆案。非贊道擁載。則頌美阿附之流。是豈君子之所受乎。雖然足下諸人同歃牛血作此妄品。蓋有其本焉。北山一生議論不公。在其門庭。則雖寡啓寡聞之士揄揚之。使在九霄之上焉。如不立其門牆。則雖驚才絕識之士。抑退之。使入九淵之下焉。見逸勢冲天者。鍛其翎翮。見學飛控地者。則假其羽毛。要出其性之忌克。實此翁之大過也。足下諸人習聞其言。是故平生毀譽。皆出愛憎。無一公正。遂

馴致此妄意品評矣。師傅不正。勢之所必至。豈不可惡之尤乎。世間自有明智。天下自有公論。豈可肆一人臆妄。亂天下是非乎。雖然北山讀書知道理。雖議論失當。胸中自有皂白。是故能知今之名士爲某々。不復如足下諸人之妄也。使北山在今日乎。名流品題決不如此。則足下諸人。不特爲他家罪人也。又北山之罪人也。昔汴京黨籍碑。安石不爲之。而蔡京蔡下爲之。今日名士品題。北山不爲之。而足下爲之。古今之事相似。有如此者。要之不別皂白。不辨菽麥。使名士枉蒙誣罔焉。是豈文苑之美談乎。又豈盛代之美事乎。貞與足下故矣。且足下在黨類中。頗有良心。或稱爲有長者之風。知非拒言之人矣。是故不覺觀縷至此。雖然貞之所規正。豈特今日之品題乎。冀足下誨諭綠陰星池輩。使不得肆其妄謬矣。如否則自是以後。顛倒賢愚。錯互優劣。急於賣名。勇於射利。廉耻掃地。莫所不至。藝園公道。秦塞蕪穢。世人或視爲姦商猾賈之流矣。風流之士而至于此。實文運之一厄也。貞與星池絕矣。撲滅燎原凶焰。任在足下。足下豈不努力。足下如猶不服貞言。則幸見教。貞掃几案而俟其報焉。元貞再拜。

三月十日

大窪天民足下